

江戸名所圖會

四

江戸
名所
圖會
四

ル 4
5105
4



門
號 51.05
卷 4

江戸名所圖會卷之二

天旋之部目錄

東海寺 佛殿
 洞山法苑和尚
 牛久保天王社 同祭礼の目
 新敷山 浄土
 光嚴寺
 貴明神社
 天龍寺
 海晏寺
 上古海道
 西光寺
 長徳寺
 寄木明神社
 海龍寺
 來福寺
 光福寺
 磯の清水
 中の橋
 本光寺
 常行三昧寺
 品川寺
 千代神堂
 大龍寺
 妙國寺
 千代神堂
 洲邊辨財天
 品川驛
 納経塚
 麻島明神



昭和41年12月20日
原安三郎氏贈

宗無寺

雲松院

折本淡島明神社

本覺寺切通

版綱権現社

姥島

帷子里

左神宮

蔣田城跡

青木明神社

神明宮

金澤 同敷

金沢貞顯墓

普賢象 文殊様

觀音山

小机城跡

本覺禪寺

袖ヶ浦

本牧十二天宮

帷子川

品野坂

乘蓮寺

妙寺

杉田梅園

龍見堂

美女石

一室

慈光権現山

泉谷寺

多目周防宅地

陽光院

富士沙間祠

吾妻の神社

程ヶ谷新町

古町街道

二位禪尼彩堂

同海氣と製子圖

擲筆松

稱名寺

西門

慶雲寺

師忌慈光権現宮

西向寺

道灌山

側乾無天祠

杉山神社

林戸川

界本

任吉明神社

麻耳山

二王門

稱名寺

西門

金澤文庫舊址

藥王寺

浦の郷

野島の渡

照天松

圓通寺

能仁寺舊跡

六浦川

光傳寺

慈根権現社

烏帽子島

名産甲番

御所ヶ谷

藥師堂

善應寺

洲崎

瀬戸明神社

金龍院

上行寺

当光寺

界地藏

雀ヶ浦

夏島

兼好法師用居舊址

天然寺

野島

瀬戸

泥牛菴

松寺

油堤

三艘浦

中志岩根付岩

猿島

新華寺

金沢

瀬戸橋

瀬戸辨財天

日の上人加持水

六浦

侍従川

太寧寺

榎戸湊

保島

萬松山東海禪寺 呂川北馬場あり花浴大徳寺派の禪宗

江戸觸頭の一員より當寺ハ輪番中より八月より交代也

寛永十五年戊寅 台命を奉りて澤庵和尚開創を命

所の禪園なり 塔頭十七

佛殿 釋尊の像を安んず 額 祈禱堂 天倫筆 二重家根額

世尊寺殿 同筆 山門樓上ハ觀音を安んず 額 潮音閣 大明院宮

公辨法親王真跡 中門額 東海禪寺 天倫筆

鐘樓 本堂の右あり 露臺 要津橋 南の方あり 千歳杉 同所橋あり

門へ砂道の右あり 寛永の頃 大樹命 十境の一 千歳杉と云々 是も 浴鳳池

十境の一 宝曆の頃 暴風吹折りて今ハ其幹 釣玄室 池の北の汀あり 大樹寛永

山下清泉流出師引之開一池於室之北面云云 東海和尚年賦云寛永二十年仲秋之夕

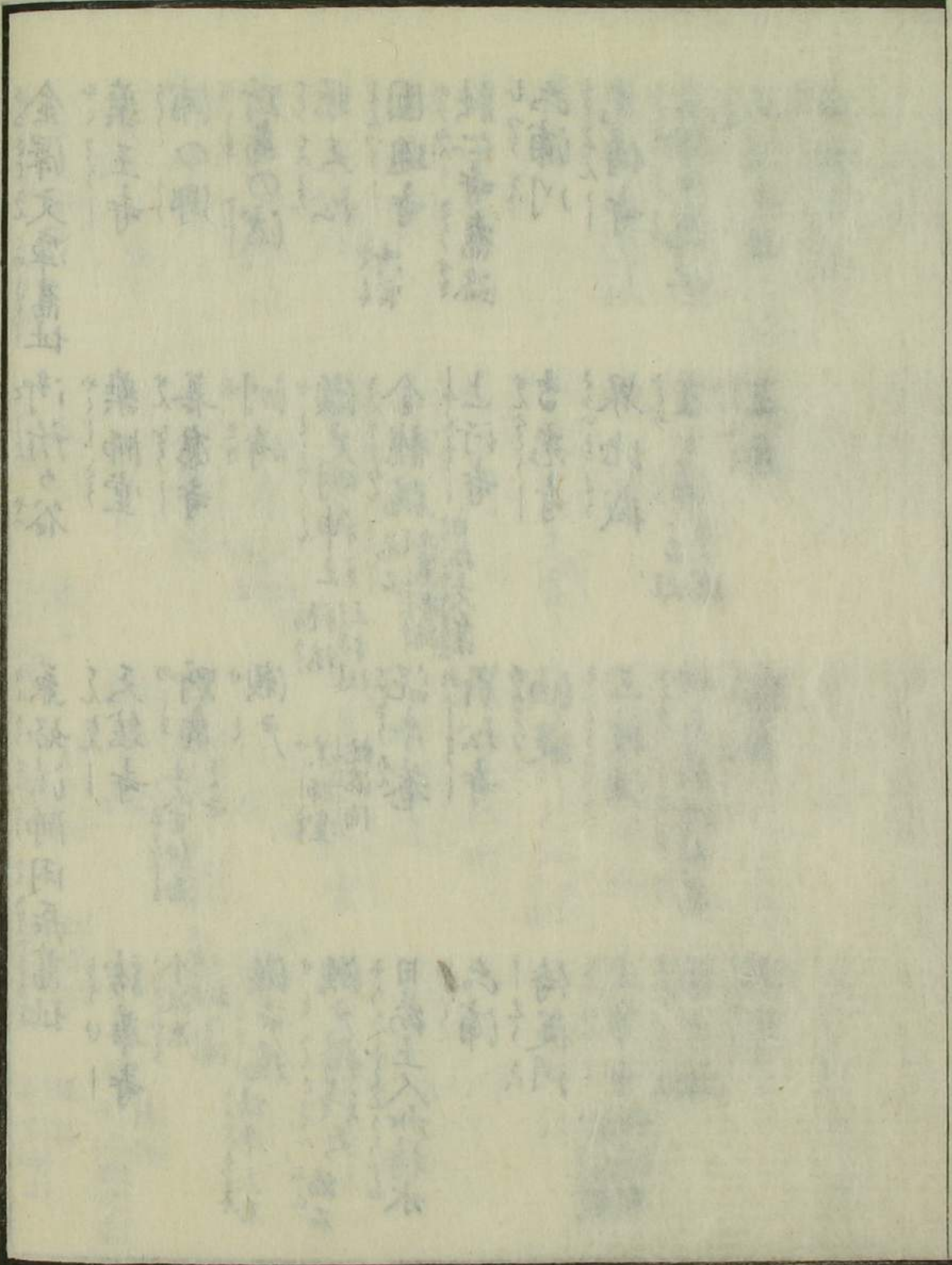
此所ハ夜法問あり 則十境の一なり 東海和尚年賦云寛永二十年仲秋之夕

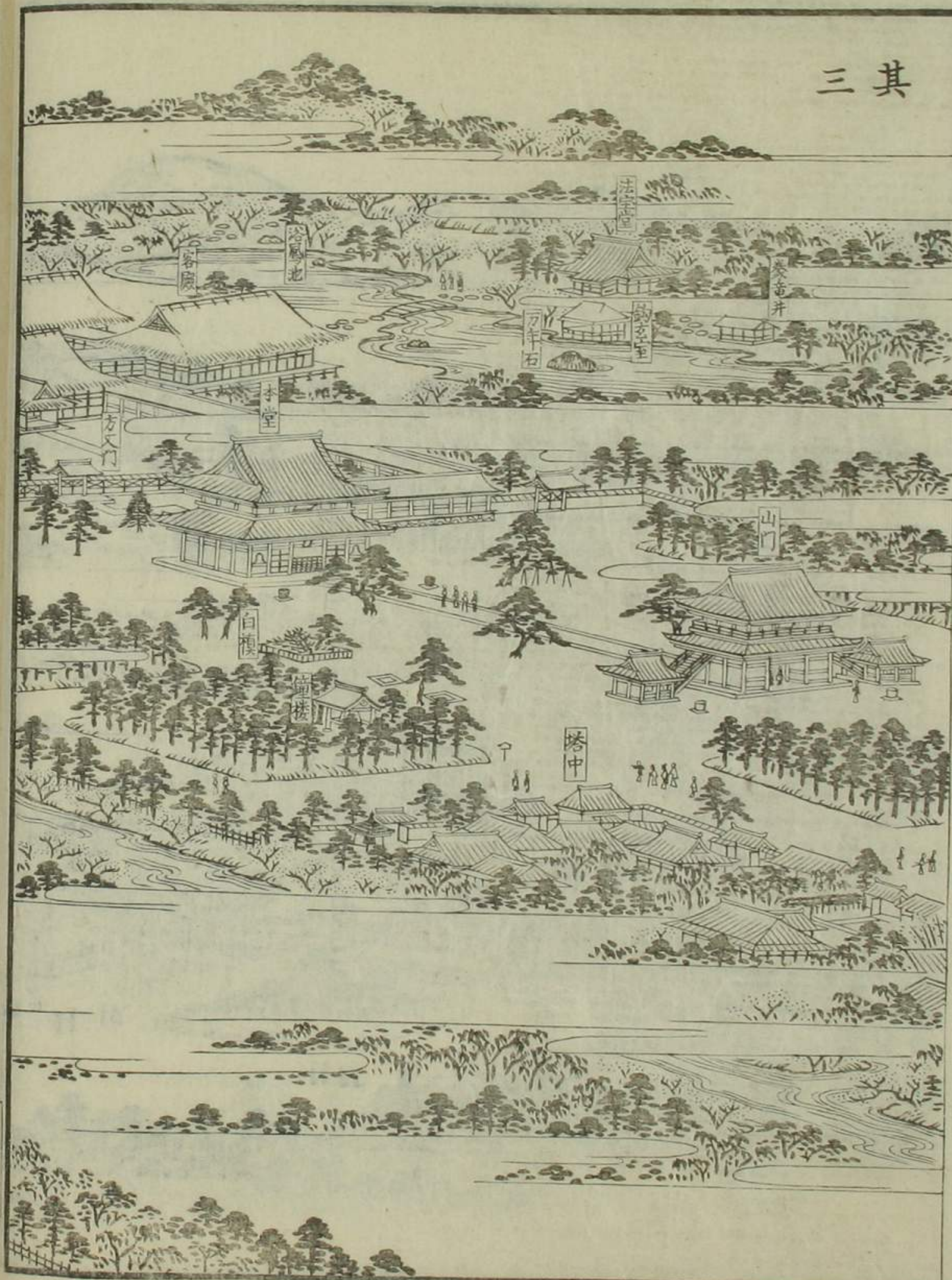
台駕入東海觀月於山亭台顔怡而出山亭猶乘月明倚池上小亭亦侍傍云云

泰龍井 鉤玄室の東ハ並寛永の頃 大樹茶の水ハ 萬年石 池中東の方

一ツあり 寛永二十年癸未三月十四日 大樹當寺へ台駕を檢せしなり

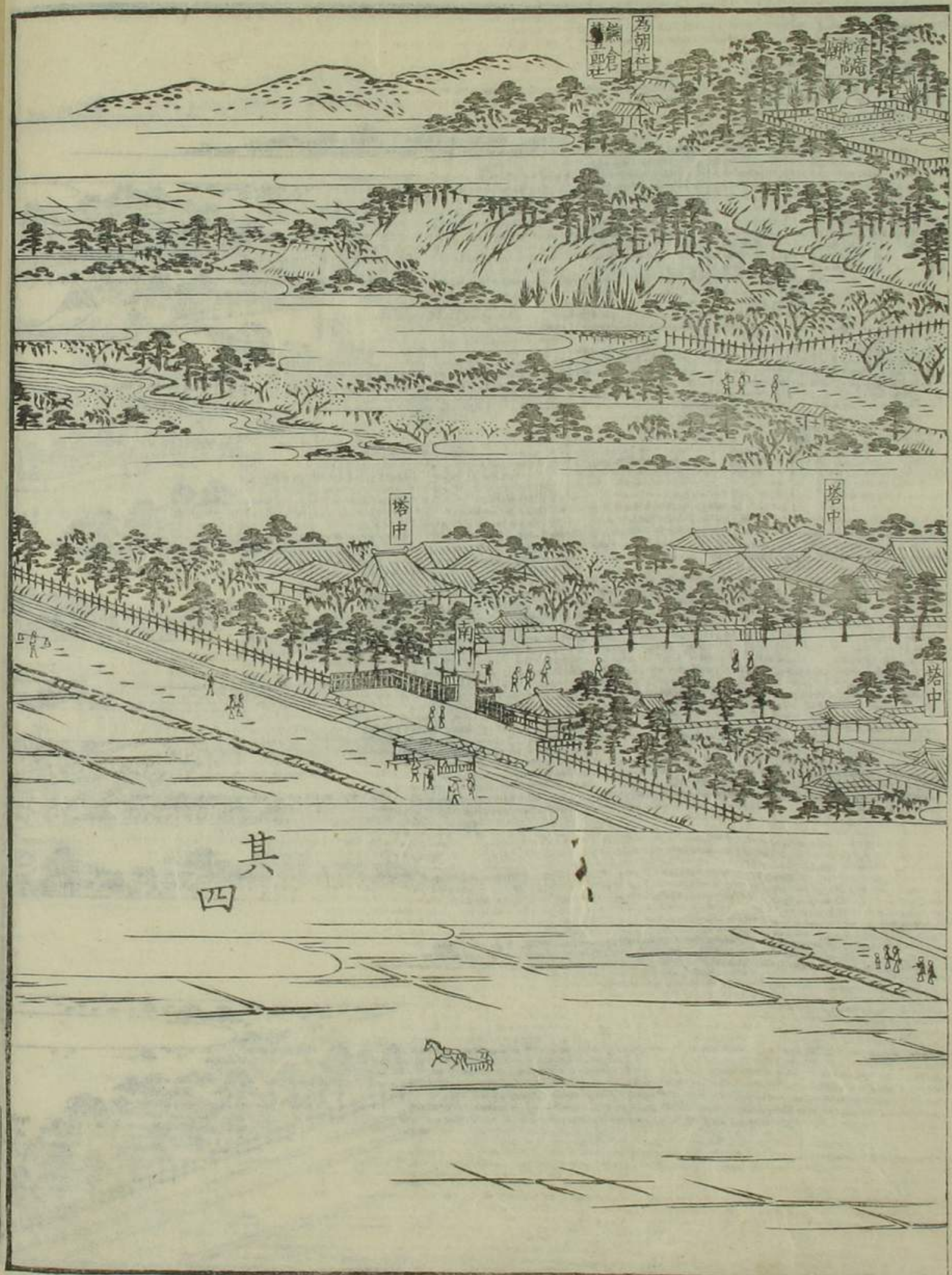
其時 遠州侯小堀政一ハ命せられしなり





開山者南浦明和尚正塔銘並序
 昔時歸于一朝而啟淨慈之遊
 老印者國師有餘人入者以陶大
 正室燈師明而後也二燈相續洪
 其燿色得證其化自爾以禪燈相
 挑也朝廷昭其化自爾以禪燈相
 氏也挑也朝廷昭其化自爾以禪燈
 諱先喜業於暮天正庵初禪生於
 典受稱東海翁之天正庵初禪生於
 德禪師先喜業於暮天正庵初禪生
 師與師董參仲公諱宗而彭師方去
 師請之乃東行隨公諱宗而彭師方
 窮益亦周旋矣仲公諱宗而彭師方
 窮益亦周旋矣仲公諱宗而彭師方
 飛錫而泉尤老就文西也堂酌流之
 朝師而南尤老就文西也堂酌流之
 師而南尤老就文西也堂酌流之

開山者南浦明和尚正塔銘並序
 昔時歸于一朝而啟淨慈之遊
 老印者國師有餘人入者以陶大
 正室燈師明而後也二燈相續洪
 其燿色得證其化自爾以禪燈相
 挑也朝廷昭其化自爾以禪燈相
 氏也挑也朝廷昭其化自爾以禪燈
 諱先喜業於暮天正庵初禪生於
 典受稱東海翁之天正庵初禪生於
 德禪師先喜業於暮天正庵初禪生
 師與師董參仲公諱宗而彭師方去
 師請之乃東行隨公諱宗而彭師方
 窮益亦周旋矣仲公諱宗而彭師方
 窮益亦周旋矣仲公諱宗而彭師方
 飛錫而泉尤老就文西也堂酌流之
 朝師而南尤老就文西也堂酌流之
 師而南尤老就文西也堂酌流之



弟命身月月号受疾如寺復之入寺慕黑号河大問卓鈞然飢下生
子也於十不而道預一其舊鞏山曰下不無 上法庵命師色扁涯
武門東一痊煩俗知點可規固草東於日國 皇婁曰召知寬投爾
野人海日一 予緣墨知之識木海金而師皇召曉檢還其永淵後
氏在之也日 賻盡書也 新生落城下号情入遇東二行己軒歸
安泉西世曉朝衆遺于正 筑輝成南謚也大 優暫翁止已折山
齋南北壽天奏僧誠贊保鈞之師之品天願悅 涯寓師係師脚陰
翁者岡七援莫著云詞乙命久奉日川應下師仙對止抵數有鑑之
往祥唯十筆入衣瘞於酉益昌 賦創大 奏院望焉武不事內故
年雲種有書木契全其夏是辛 賀草現綸我講愈 陵寔昇煮里
昇樹松三夢牌飯身上令依已鈞頌梵國旨山原高 於容玉麻構
師塔乎僧一於如於以畫師歲命致刺師 第人戊幕城色室麥一
行名其臘字本平後為師之降賦登使有 二論寅下外壬翁粟把
實曰上五泊寺日山壽劃所使和祝師功上世辨秋徵民申同豆茆
求寂不十然之矣莫空一願本歌厥住于皇徹瀾師師村 賤給於
銘然樹有而祖且誦同圓也寺一後持曩允翁激之於一 于日宗
其曩塔九逝堂莫經年相有出首 山祖之唯起京營生幕窮食鏡
塔肯蓋瘞實云為設仲相功世祈 曰若圭有如師中鳴下卿而主
因參依于十云求齋冬中于制國台萬此章禪懸 時之降遐無山
循學遺全二彌謚莫示親本法基與松也寶師江 時地 微有之

勝深塵邑在寅禪峰延驪綽寺本歿于師襲彭界難命師驪亟之之
槃靖埃之雲再室視師喜有經寺也陽入寶禪而寫畫有也見弗典
抱有視南門造問其為如古二枚師春室護子能平匝所鏡之就籍
烟時聲再菴大道去開見人年着昔聞師同麼殺素寫契移機明附
霞寓色建乙仙詰雷山點風而繼衆師之邑 予佛作鏡悟同辨堂師
沈南若南卯之且知祖佛味入臨陽勘酬有失者略壽投邑縱古初
痼京泡宗南拾馳其也同亡院德春辨對宗笑快入像印南橫鏡雲
有之幻不宗雲書輕師邑何于禪補而敏無云拂魔索證宗應禪英
時芳有亟囉軒謝重翻有告本同席驚捷者何子界贊語寺答師偉
僑林時不鬱師之陽法宗退寺年慶異而為不突而鏡号師如一公
城菴在徐攸禪癸明語印還大秋長嘉玉先問出還涉日執響東玉
州鞏泉尋之坐丑殿慶者于德八丁謨轉考起云降毫澤侍實滴甫
薪光南復災之一下之創泉一月未云珠齋大父魔書菴中透公珠
之匿天舊師暇新信讚建南杏主師真回緇平攘宗曰賦瓶網住公
妙耀下觀告緇南尹之一泉為龍年跨也侶天羊活鹿祇日金色以
勝有邑師邑大宗公于菴南古興三竈此殊下隱機面夜夜鱗之法
寺時而視宰燈之一泉名緇鏡山十兒時請師之自易抒參而陽器
守入變名相年鐘夕南曰素供南有也鏡圓領底由描其究頰春期
空泊幽利攸譜樓入于祥郊住宗五於臥鑑之不入中義鏡響菴師
寂瀨遠若於况甲師龍雲迎山禪遷鏡病國珍是佛眉師知青師招

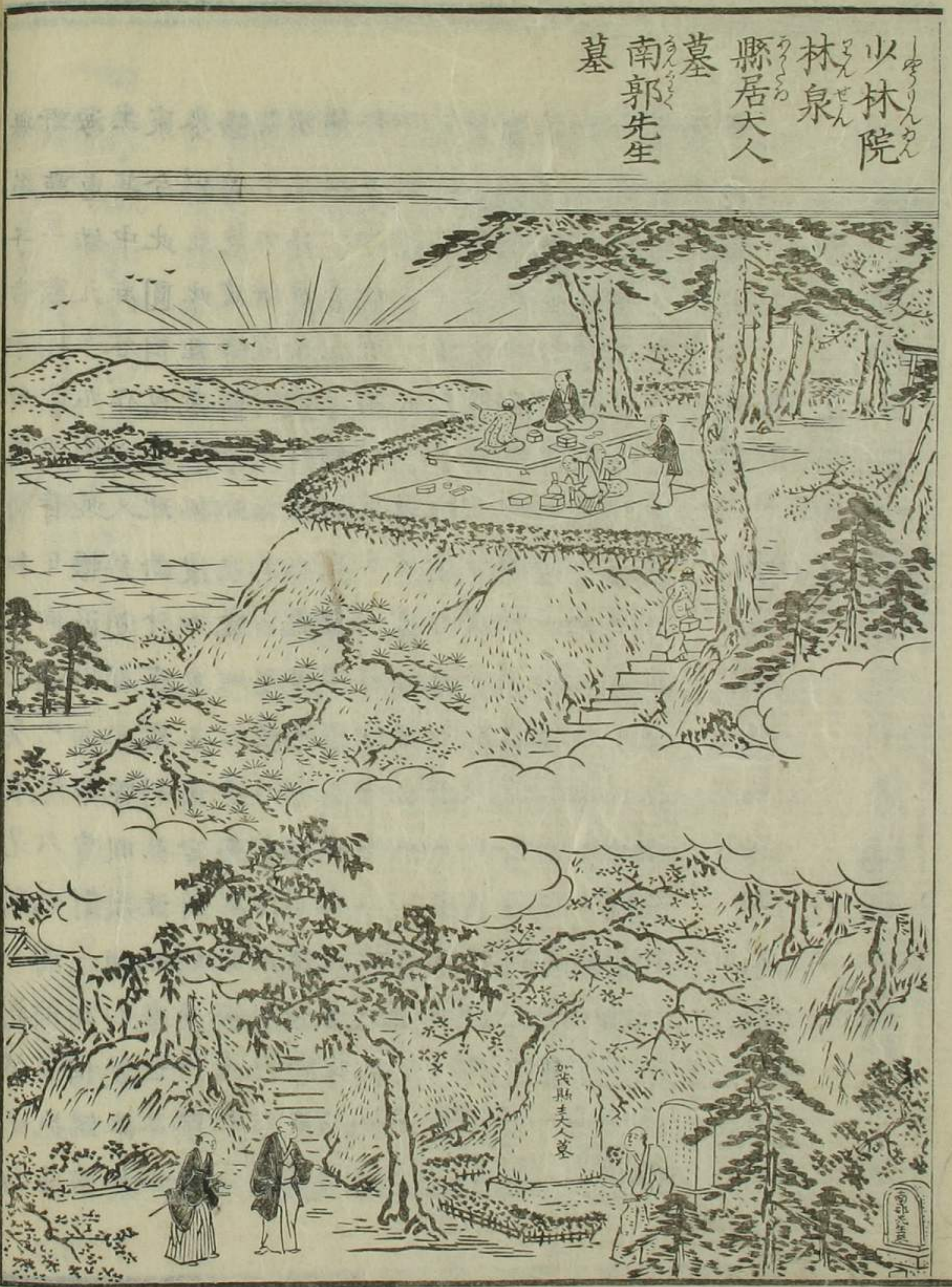
未果亦茲賈不揣已講習道義於乃為者莫若余也
於翁正孫然故不入日陋聊記蔓乙遂為之銘曰通
虛子十室世孫大鏡相輝現東門者大應圓鍊
經過其海室規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
道播四海中真眼覲古大鏡相輝現東門者大應圓鍊
一挈矩疊規海室規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
淵而才圓相湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
語機明矣湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
橫射峭峻矣湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
姑曰山峻矣湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
塔寂然裡峻矣湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
無寂來然裡峻矣湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
天覆地載來然裡峻矣湧中規空實踐方呈圓陀地且絕人稀
右泉興國南雲
大興國南雲
寶曆三年癸酉冬十二月十一日
山寶曆三年癸酉冬十二月十一日
東曆三年癸酉冬十二月十一日
海曆三年癸酉冬十二月十一日
禪寺慈蔭塔下二月十一日
現住閑田義問併拜書

開山澤庵和尚影像一幅
贊南語の南宗精舎の藏せり讚よ云く
正保二年乙酉師歳七十三畫工よ余
圓相と作りし親ら一畫を其中
二軸一八則當寺に置一八則

無名一子告予曰邈昔日和尚之真展見則一圓相也
野重錄九點十即書曰邈昔日和尚之真展見則一圓相也
海坐其此圓麻谷作九箇蛙軒泥沙元無瑕劃圓相龍
家似豆此圓麻谷作九箇蛙軒泥沙元無瑕劃圓相龍
修十籬色彼此圓麻谷作九箇蛙軒泥沙元無瑕劃圓相龍
些王法方薩全埋詩麟衆包地人無外窮塵利無瑕劃圓相龍
彌勒不募身薩全埋詩麟衆包地人無外窮塵利無瑕劃圓相龍
呼多却增慕前全體顯諸宿此决龍如外窮塵利無瑕劃圓相龍
飲衣蒲童聲子聲來釋迦阿難我羅漢出雲是列門邊如秦
添茶下童聲子聲來釋迦阿難我羅漢出雲是列門邊如秦
爹氣請方童聲子聲來釋迦阿難我羅漢出雲是列門邊如秦
生猶乘勢看聞課湯菓不窺王難起寶蓋嗟迦葉尊文架不為後主亦藝起如秦
萬般治喜奈縛羅我老得禪以聖者我引不尊文架不為後主亦藝起如秦
所捨無已野乘勢看聞課湯菓不窺王難起寶蓋嗟迦葉尊文架不為後主亦藝起如秦
前絕等嫌底藥病相任落順邪佛經祖傳錄方噫此點檢
將來空裡乙酉前住大德見東海比丘某老齡七十三
正保二年乙酉師歳七十三畫工よ余
圓相と作りし親ら一畫を其中
二軸一八則當寺に置一八則

海屋
あゝ人の影を拜
天下
東海
比丘
某老
齡七十三

少林院
林泉
縣居大人
墓
南郭先生
墓

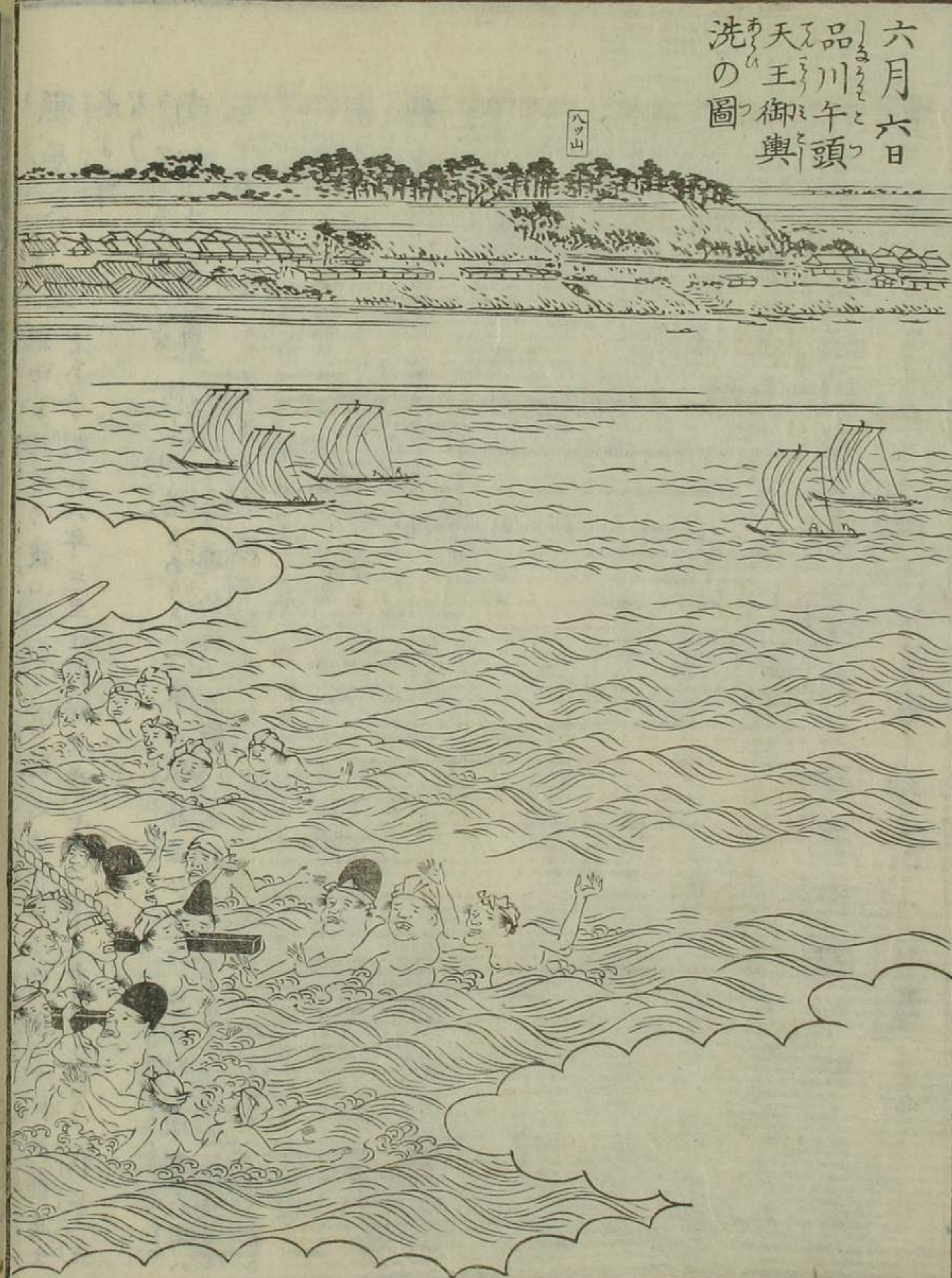
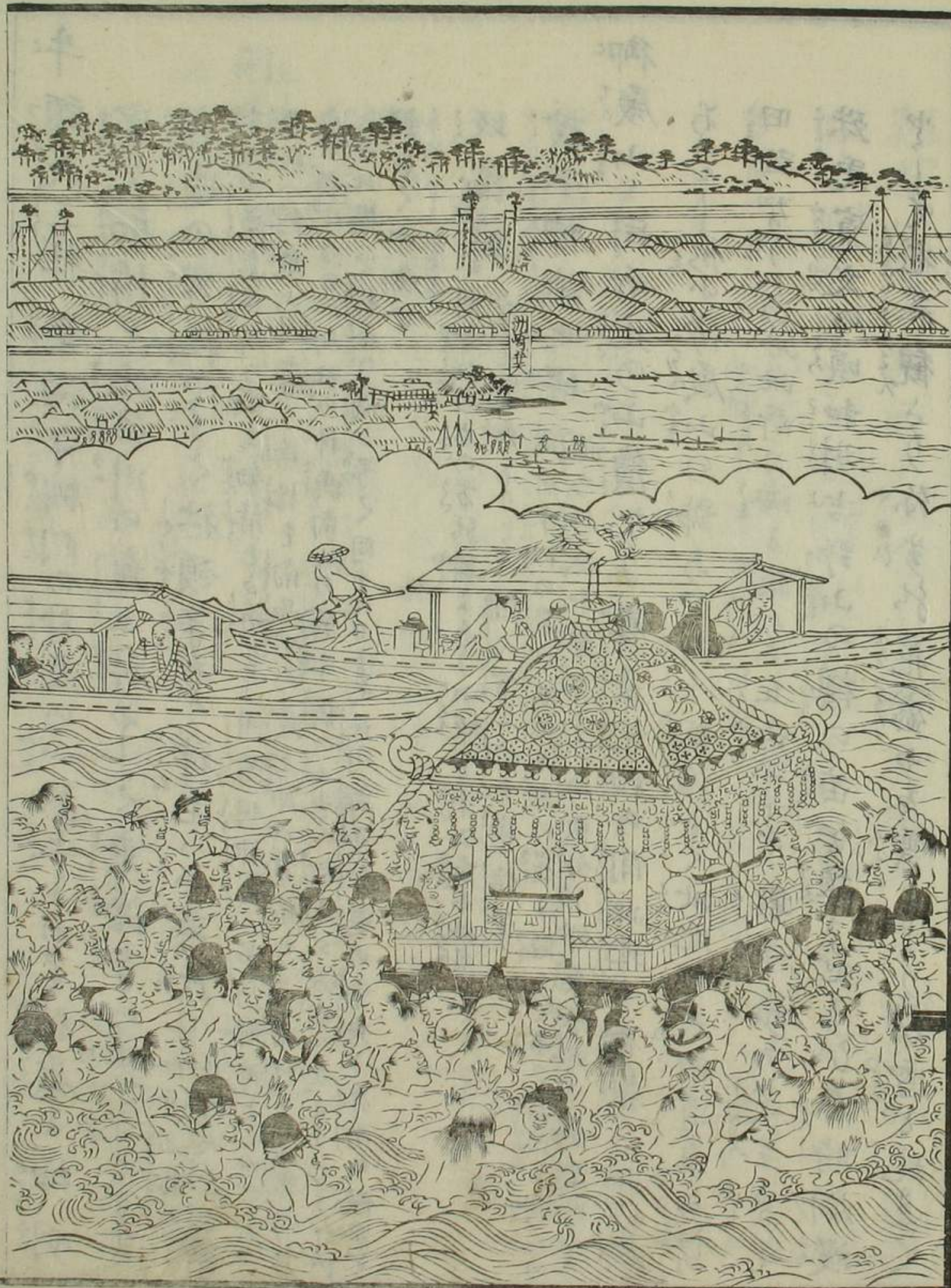


縣居大人墓 塔中少林院の後山あり 當院過去帳に玄珠院真淵義龍居士
とあり 明和六年己丑十月晦日歳七十三にて身終るなり 後并壹
卷よ詳なり

南郭先生之墓 同柳塔あり 一家の墳墓並び建り 先生姓ハ服部氏講ハ
島七黨の一や 曾祖父某越中國高島に徙る父の諱を元矩とのみ京師に移る
母ハ山本氏なり 天和三年癸亥生る 歳十四江戸に來り 祖徠先世の業を受凌三年
柳澤侯に仕入 後十八年致仕 宝曆九年己卯夏六月廿一日卒 以壽七十七の
墓碑の銘文ハ 小畧を其碑陰に後四位下侍後源頼順撰 臣高元碩謹書とあり
鎌倉權五郎景政靈祠 同所春雨庵の後の山あり 津由知ハ此卷ハ

己巳より同九年壬申に至る迄羽州上の山に講せられ
項の草蘆春雨庵と移されり 此寺ハ品川の勝區や 門前の緑水を潺湲と云 品川乃
流海口を通を屋後青山崔嵬と云 祇植の祠松間ハ聳ゆ
茂林脩竹風帆沙鳥の勝覽筆の乃ふ所あり 以珠更方
文の林泉を小堀遠州侯の差図や 庭作の規範ハ京都
満地青松丹楓枝葉と交へ 晩秋の奇觀錦繡と晒りや 常に
寂々寥々として 實ハ禪心と云ふ一巨藍と云

寂々寥々として 實ハ禪心と云ふ一巨藍と云



六月六日
品川午頭
天王御輿
洗の圖

ハツ山

牛頭天王社 東海寺柵門の外左の山に上りあり相殿は神明

宮を勧請を北品川の産土神なり東海寺の鎮守とせし

官造の宮社なり社領等あり神主は小泉氏也

中太田道真品川の城は勸請を所なり洲崎明神或は品川明神ともいふあり

祭礼は例歳六月七日は修行を南品川の産土神ハ貴船なり當社ハ由緒あるあり

此祭礼の日ハ両社の神輿南北の驛中橋の上より行進又左右へ立ちしりまわら

備けく神輿と

坂指荷 同本社の方と奥あり小坂を下り此名

御殿山 同所北の山積なり慶長元和の間此地は省耕の御殿

田趾なりとの此所ハ海に臨り丘山ありて數千歩の芝生なり

殊更寛文の頃和州吉野山の櫻の苗を植ふせあり春時爛熳

やしく尤莊觀より弥生花盛なり雲と霧よりハ雪と乱して

花香ハ遠く浦風ハ吹送る磯菜摘海人の袂を襲ふ山樽の

前ハ酔を進むる春風ハ枝を鳴る鶯の轉りも大平を奏

さる小似たり 寛永十七年九月十六日大樹此地は遊獵ありせられ頃

夕々れと情をよむ木の開りやさしの海鏡有 澤庵

月の光その清杯よりつりくるは松一首と 上意あり前の日雨の降り

其日ハ此く空曠よりありしやハ

樽もの今日の時とやる那老と清杯ハ此のハあり

享保の頃楹を多く植ふむ晩秋の紅葉ハ又一奇觀なり

鑄鐘松 増上寺の鐘鐘を鑄る地あり其地の

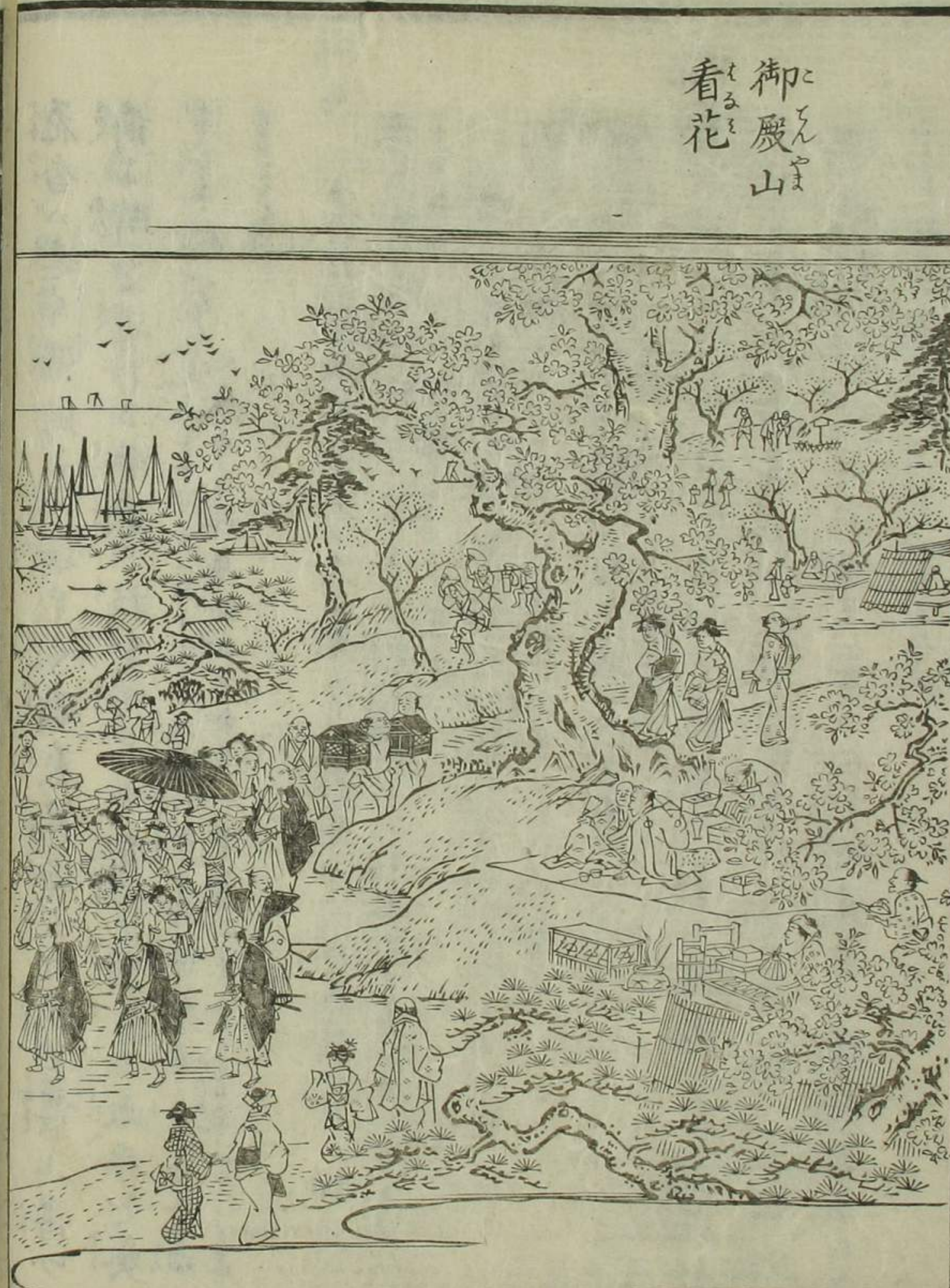
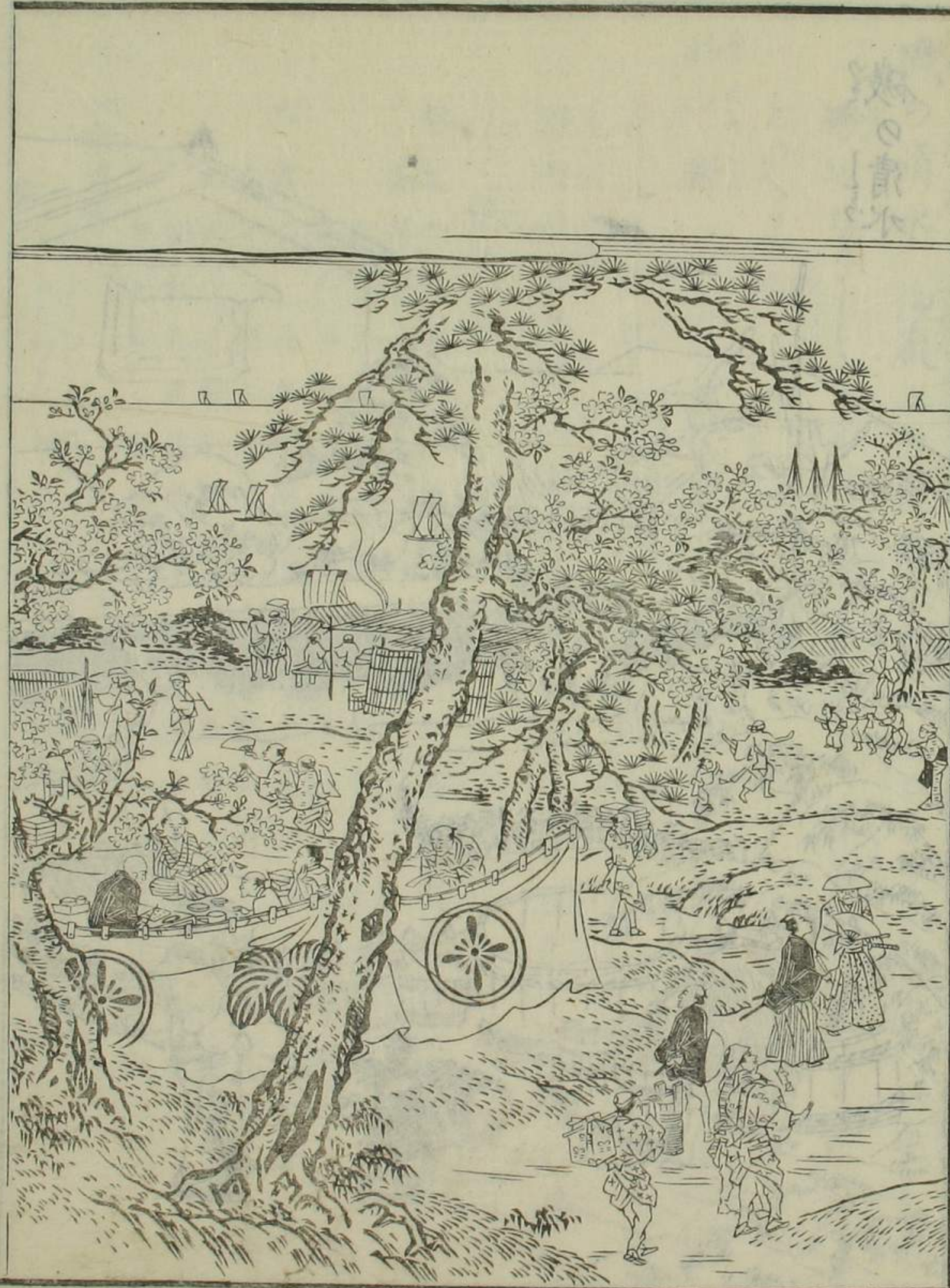
問答河岸 又舟船雁木ともいふ新宿の東の海岸なる相傳入

寛永の頃 大樹東海寺へ至らせあり頃津塚より此時

澤庵和尚津後を見送るなり此所迫来り 津問答あり

故ハ此唱ありしなり

御慶山
看花



磯の清水



磯の清水

涉殿山の麓清水横町と云ふあり往古ハ此辺まで

磯辺

なりしと云ふ此井清泉中々早魁も涸る事なり

品川驛

江府の喉口中々東海道五十三驛の首なり日本橋

品川驛

より二里南北と分つ東海寺の南に傍る貴船の社の側を流る川を堺と

旅舎数百軒端を連ね常々賑々々往來の旅客絡繹と

梅花

法華無盡藏云曰品川注云隔五十町有江戸城多

同書

蓮紅二層兼一層別小春二子細看來滿口氷之岐軒

之途

城中濱而見六七小舟二艘又河之土蓋為塗江

重城

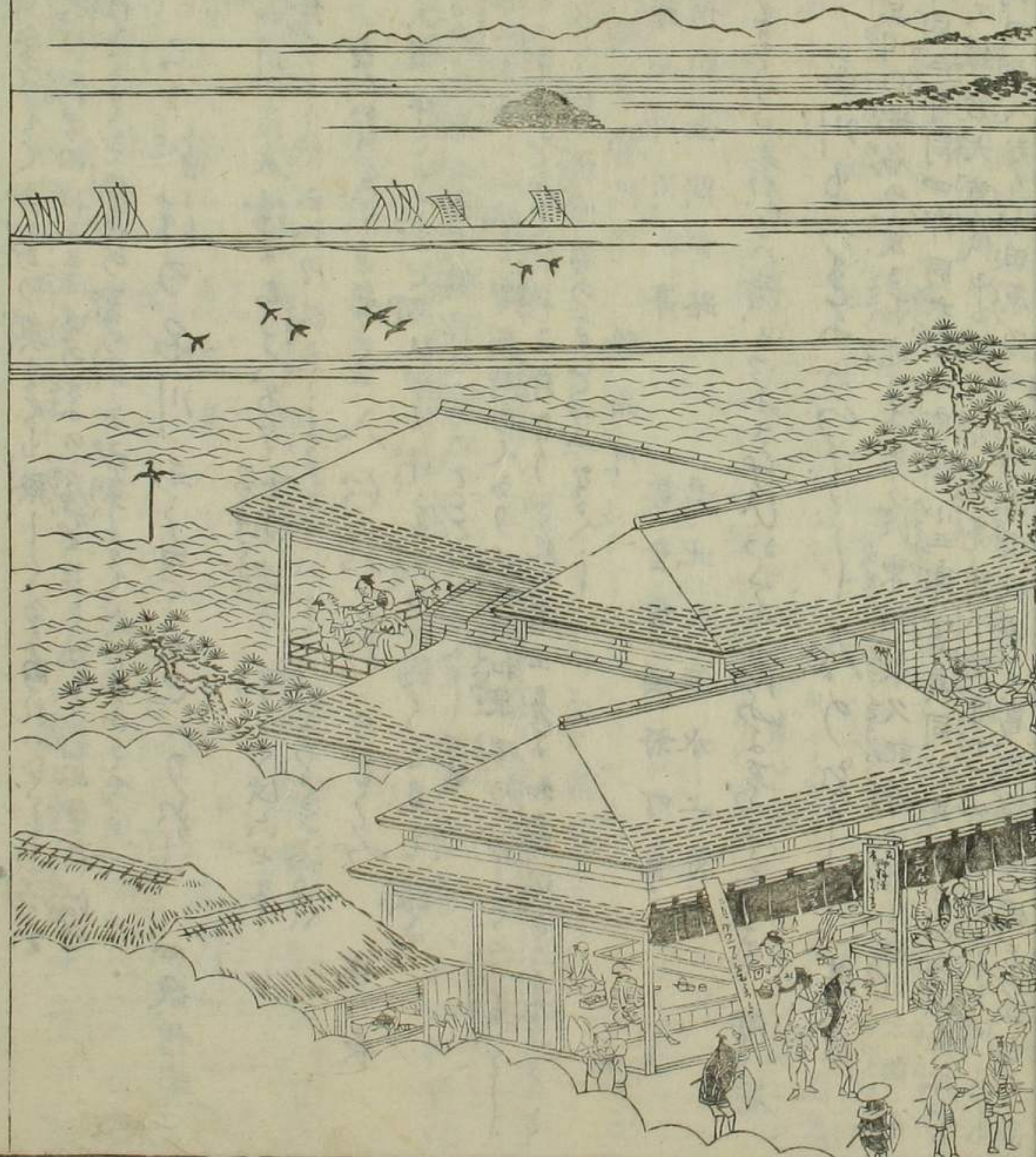
潮氣日勤塗壁及舟楫無地不紛然詩

心敬僧都記

品川と云ふは世の物なり

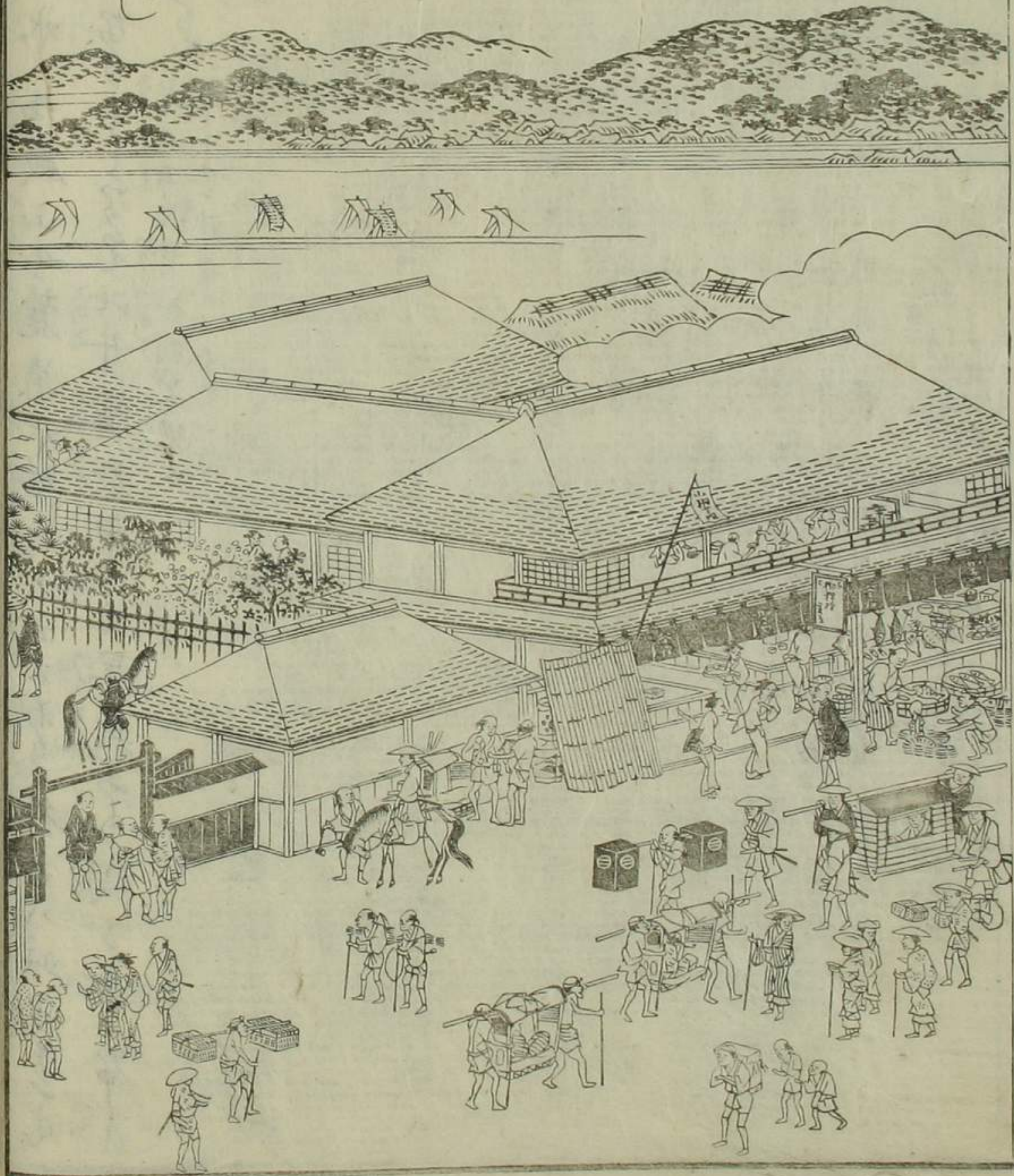
其角

か
し
北

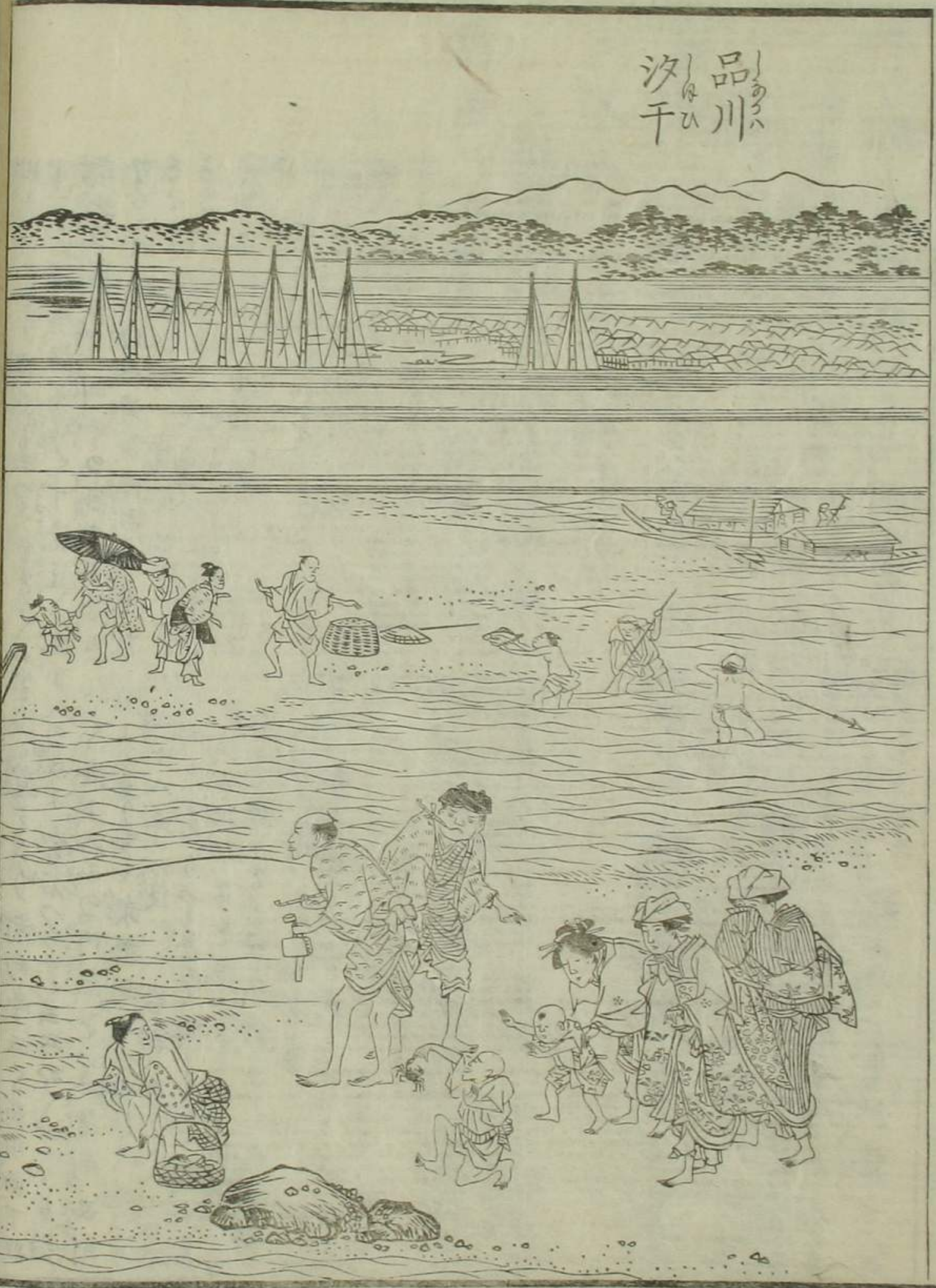


品川驛
あまのうら

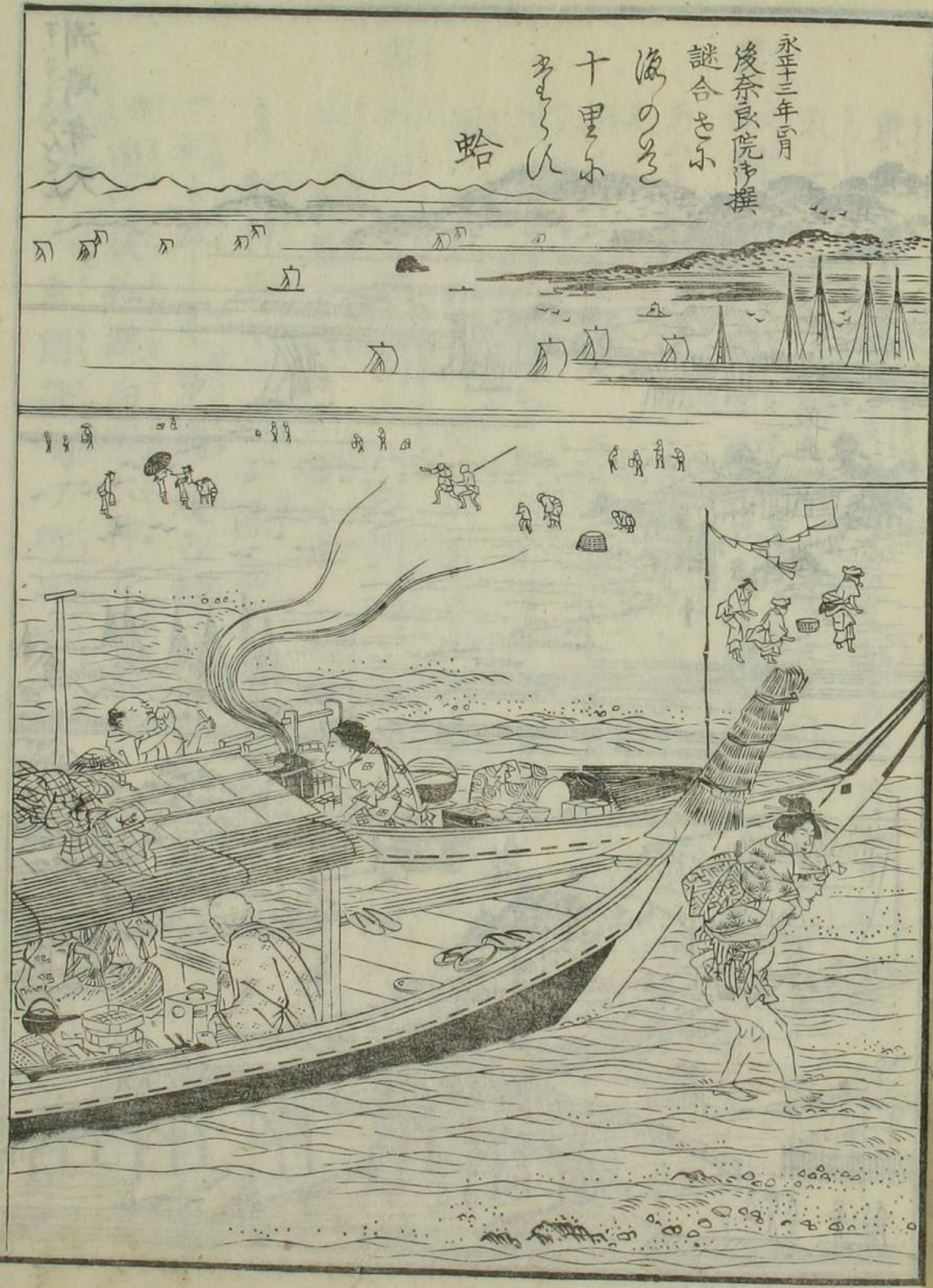
品川
は
な



品川
汐干



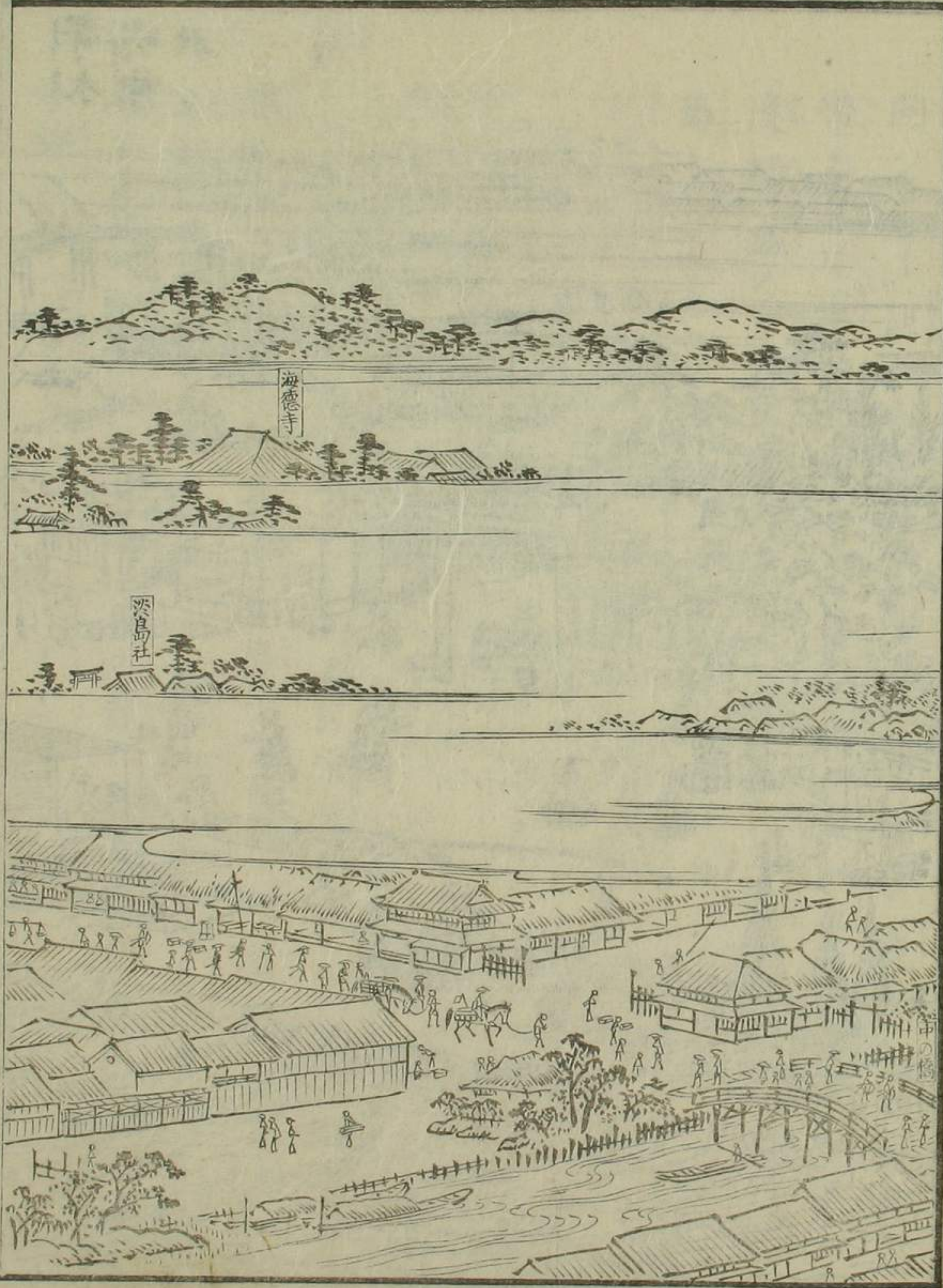
永平三年月
後奈良院御撰
謎合もふ
海のもの
十里ふ
あまの
蛤



洲崎弁天



東流するものも則品川なり毎歳六月七日祭の時ハ南北牛頭
 天王此神輿此橋上より行違ふる依り又里俗行違の橋も唱へり
 貴船明神社 驛舎南北品川の境中の橋の南岸海道より右より
 あり相殿は神明と牛頭天王を合祭也南品川の産土神なり
 毎歳六月七日ハ天王の祭礼也其前神輿を海中より昇入り
 後驛中は假屋を假けかゝる神幸祭なり貴布祢の祭
 例ハ九月九日神明ハ同月の十五日なり 神主鈴木氏奉祀也
 寄本明神社 南品川の洲崎はあり相傳ふ神代の昔弟橘媛
 日本武尊と共に王船に乗し此海上を渡りあり頃覆りたり
 その船材所々の浦は漂泊し此地也し流しより入りし土人
 一社に奉りて弟橘媛の靈を祭りて寄本明神と号する又寄
 作 遙の後船魂西宮大神を合殿とて往古源義家朝臣奥州
 征伐の為東國發向の時此地に馬を止め漁人より當社の来由を



寄木明神社



向しせまの漁人先の神傳を吞へたりしハ義家朝臣自親奉幣ありて軍の勝利ありん事を祈るるハ奥羽の逆乱平治の後歸路の日再び當社に詣てられ兜を取らぬ故に此地を兜島と号するを

往古ハ今の伊殿山の麓より南北宿の辺ハ一面の洲あり川の流れあり今この南に又橋の形あり此の流を以て一社ハ洲の崎あり細く海中に此の形あり似たり共なるか

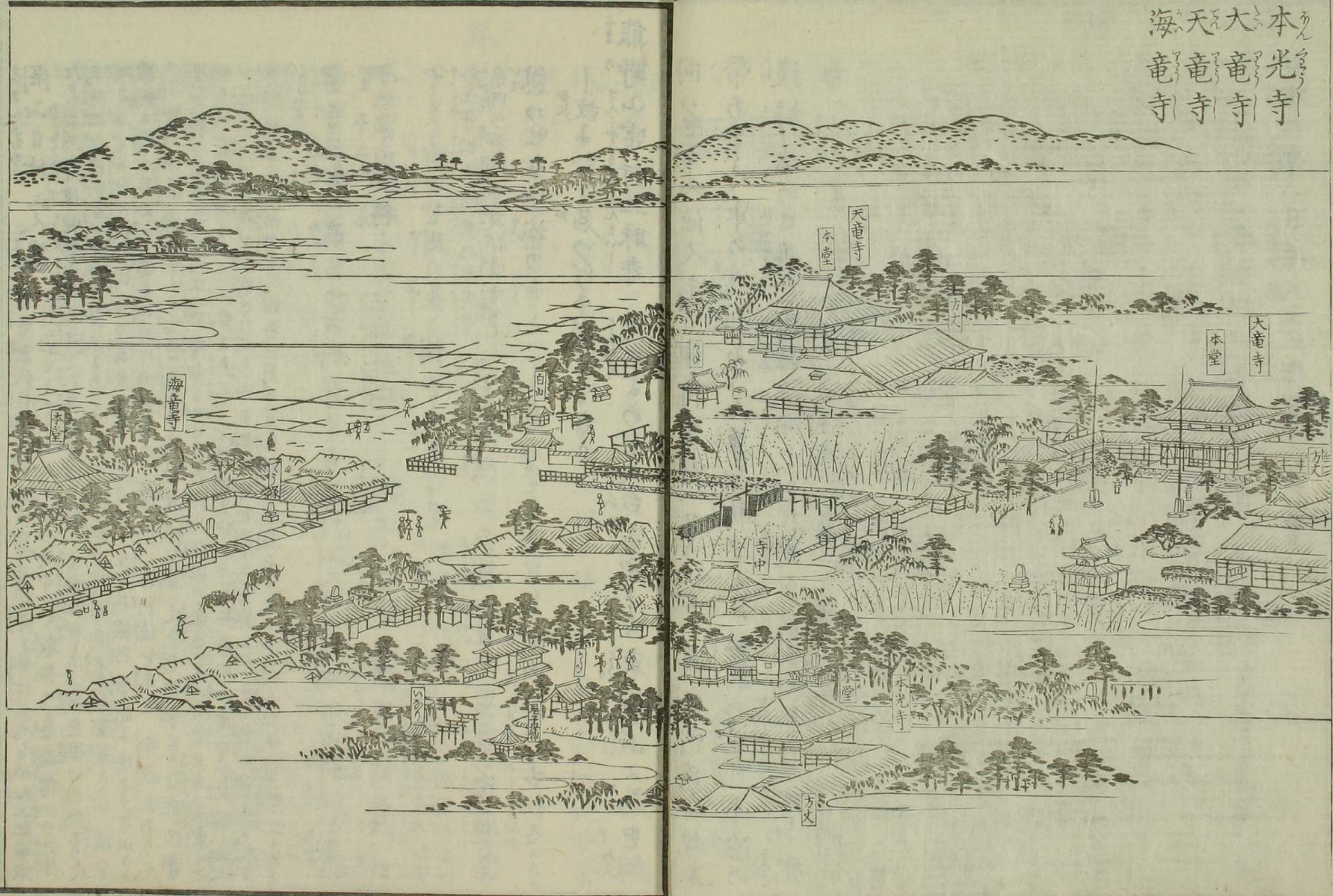
一社ハ洲の崎あり細く海中に此の形あり似たり共なるか

兼方明神といひ誤る此社ハ今引く妙國寺の鎮守と云ふ也

附此洲崎の地ハ往古より往還の舟を改し所なく遠見の番所と居置北条又山内上杉の家々の制札数箇の條目を注せり今も從此地何某の家は傳へり

經 王山本光寺 南番場あり日蓮の宗流也之京師妙満寺派の觸頭江戸三箇寺の一室より永徳二年壬戌二位権僧都日什上人草創の佛刹也之則上人を以て開山祖と稱せ中興ハ日鏡上人あり本尊釋迦如来宗祖日蓮大士の像ハ作者詳ならず又境内鬼子母神の像ハ日蓮大士の作なりといへり

本光寺
大龍寺
天龍寺
海龍寺



岡山日什上人墓

當寺累代住持の如塔の内、並に建日什上人を祀り、三年甲寅三月十七日、其徳十方、痛く玄妙法印の、後思惟の志趣ありて、殊法相應の宗立、蓮師の弘法、ありて、宗門の利益を奏せ、帝尊感ありて、鳳雛朝、昇殿も鷹司中侍の傳、奏ゆり、謹て宗門の利益を奏せ、帝尊感ありて、二条攝政源義満公と、宝祚延長の、清行、精誠を、拙く、其年、關東は、意を賜り、同年七月、正二位、僧都に、任せり、浴内弘宗の、勅、勉を、其年、關東は、起き、同二年、為國、至り、此家、本光寺を、草建せ、同三年、癸亥、京師妙満寺を、開創し、其年、關東は、を、導き、大に、法義を、弘通せり、又、京師在、在、年、月を、経、明徳三年、壬申、再、開創し、其年、關東は、奥州會津の妙法寺に入、同年二月廿八日、化寂あり、歳七十九と云、以上法華靈塔記より

當寺往古ハ真言の古刹なり、日什上人の時蓮師の弘法を慕ひ

今の宗風ヲ轉シテ法華道場トシ、則上人創建の體用六箇寺此一負

ゆゑ當寺を用ひ長と稱せざる是なり、六箇寺ハ、所、謂、奥州會津の妙法

妙立寺相州鎌倉の本興寺、慶安の頃、大樹此地、遊獵の頃、當寺ハ

京師の妙満寺及び當寺也、上意ありしとなり、境内昔ハ古松多かり

一故、かく名つけありしなり、

熊野山常行三昧寺、同所あり、天台宗中、東叡山は、屬を相

傳入、仁明天皇の嘉祥元年戊辰、慈覺大師常行三昧を修

行、あひ、白跡中、則當寺の開祖と稱せり、本多阿弥陀如来も

同大師彫造なりといへり、

鳳凰山天妙國寺、常行寺の南海道の右あり、日蓮大士の弘法ハ

一、京師妙満寺の觸頭、江戸三箇寺の隨一なり、

本堂日蓮大士像、天月上人授与の靈佛なり、五層塔、建安年間

多寶塔、造營、詠訪明神祠、當寺の獲法神なり、此祠ハ先記

時、明神と稱せ、後世誤り、洲の、唱へ、詠訪明神祠、神ハ、稱、竟、

十八丁四方ありしと云、二王、左、右、靈剛、密跡、の二王の像を、置、運、慶、

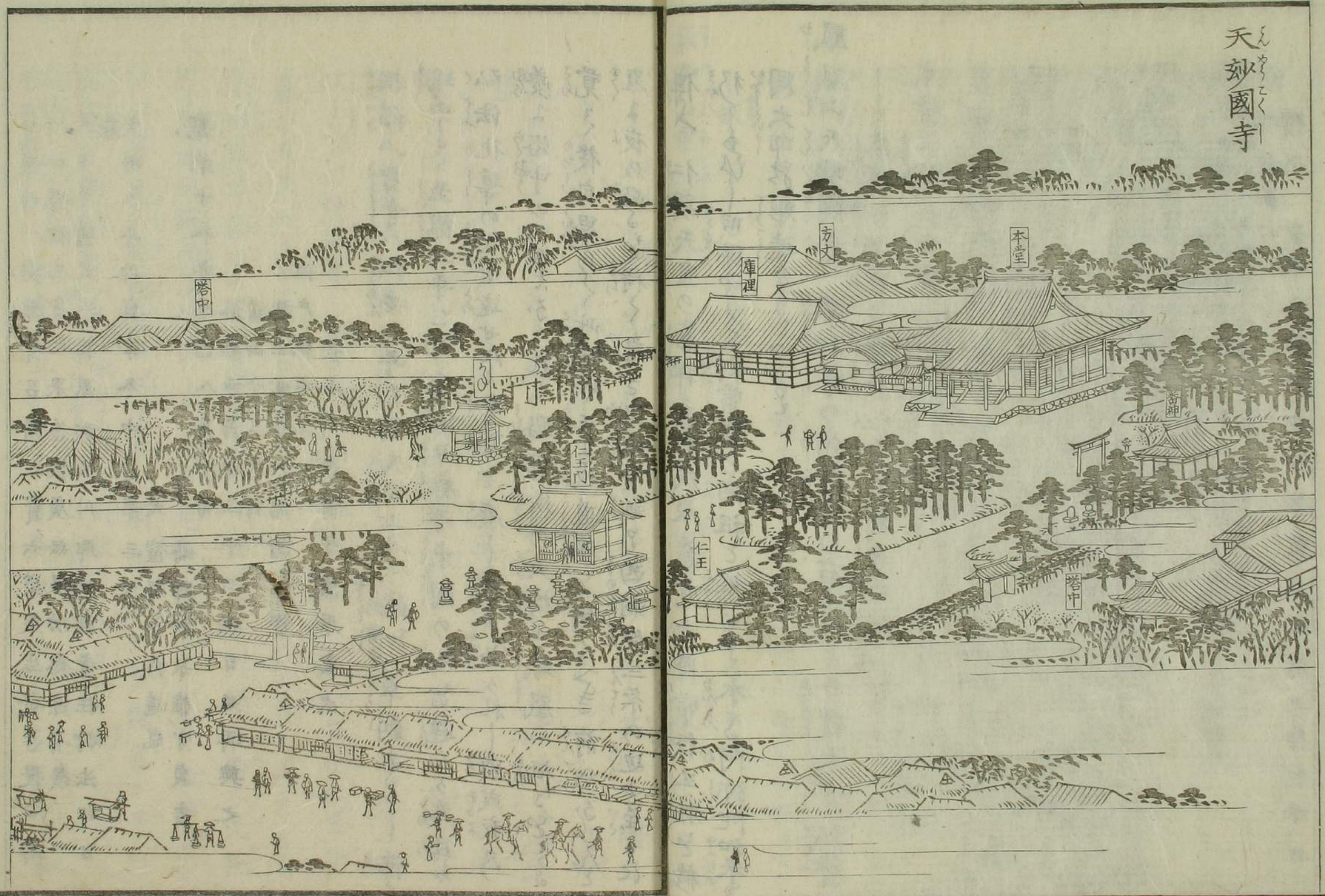
山王宮の二王、ありしとあり、山王宮、東叡山へ、總門、東海道、名所記、云、妙國寺

駿河大納言殿、屋敷の赤成門を、建、

鯨鐘、鐘、文、安、中、鑄、治、せ、り、寛、永、十、八、年、鑄、改、め、り、と、云、

往代鐘銘曰、聖衆之影向、宛如華散、風結縁之得脱、亦似

天妙國寺



日傾西一聽鐘聲召請三寶六道衆生發菩提心鑄
一口鐘祈三身之果善根廣無功德遍有幾
大日本國武州荏原郡品川郷妙國寺住持法印日
文安三年丙寅季冬中旬第三天
鑄師和泉權守貞吉

寛永十八年辛巳八月下旬
鑄師和泉權守貞吉

洛陽妙滿寺三代目
鑄師和泉權守貞吉
江戶住持
長谷川豊前守藤原重次

相傳ふ當寺ハ弘安八年乙酉天目上人中老僧の草創あり佛
場中々至徳二年乙丑寺主日叡師東國の乱を避んる為且
弘法化導の志を達せんと寺院を廢し京に赴くれ頃或夜乃
夢よ洛中つくとふれと路傍柳の大樹ハ鳳凰の栖ると
覺る後自思らく此瑞や正は我道場を開くべき前兆あらんと
直よ夜の隙を待て急き洛中を廻り西洞院三条の辺小至るに

果しく大樹の柳の茂るあり則夢兆應なりと其地を闢き
一字を宮と鳳凰山青柳寺と号し日蓮大士より天目上人へ附屬
の大曼荼羅を安置し廣く妙經の法を弘む其旧跡ハ花洛西洞院
名井の中柳の水と
三條の南より今都
りハ則其旧跡なり嘉慶元年丁卯天下疫疾流行を後小松帝
詔あり師を以て此災を除くむ依奇験の料とて康應元年南北四丁
東西二丁此地を賜り然とて其寺院ハ明徳の大乱に廢せらる
故に寺を妙滿寺と撮む彼大曼陀羅并蓮師親筆の
一部一卷の妙徑ハ妙滿寺ハ寄ル其後旧里を
慕ひ又武州に至り天目上人の靈蹟を興起し舊貫を復さんとて
其頃熊野鈴木の後孫沙弥道印鐘銘道胤品川領主鈴木光純
等叡師の誦演を信伏し七堂建立の財をなせ叡師小力と
をありせ文安年間彼旧地を象し則鳳凰山妙國寺と号け
當寺を開創す此地安永亨の年号前後せり永亨六年既ハ妙國寺へ
先立り九十有餘
朝不審とせ永亨六年前の將軍義教公の執り上杉憲泰

先境の由緒を奉此地の四至を定めらる其外数通の判形の
書ありて其後天正十八年當國寺打入の時
大神君當寺に入らせし止宿ありし時後寺領を
賜ふべく朱章を添らる江戸寺社領を附し又寛永十一年伊奈
半左衛門を奉初とて諸堂を營建あさしめひ院主日延を
し中興開山たゞし旨命せられ此時より紫衣を免さる以て
永規とす

上杉憲泰

宛り武州荏原郡南岳川之端芝原地より

右依佛地之不望永代八郎三郎之所補任之仍四至境
東南八大道塚西八田塚北荒居道ヲ陽堀塚
以之竹本可調植者也仍宛状如件

永亨六年甲丑五月十三日

憲泰判在

妙國寺別當沙坊

同 寄進武州荏原郡南岳川妙國寺地より

右彼地此間七字不分明南者四波堀塚西者大々道塚北者
塔中塚彼内畠同勢阿弥作畠一段并四所寄進地
より寺家之内在之此外常金可作畠一段同東者海塚
南者觀音堂垣塚西者大々道塚北者大堀塚為金澤
智光院勿沙菩提并為南小路雲光沙菩提永代彼寺
令寄進處之然間至子孫於此寄進不者不可有異後
仍寄附之状如件

永亨十年戊午七月十八日

憲泰判在

足利持氏將軍

武藏國荏原郡南岳川妙國寺之為附預之状如件

亨德二年五月八日

後四位下判

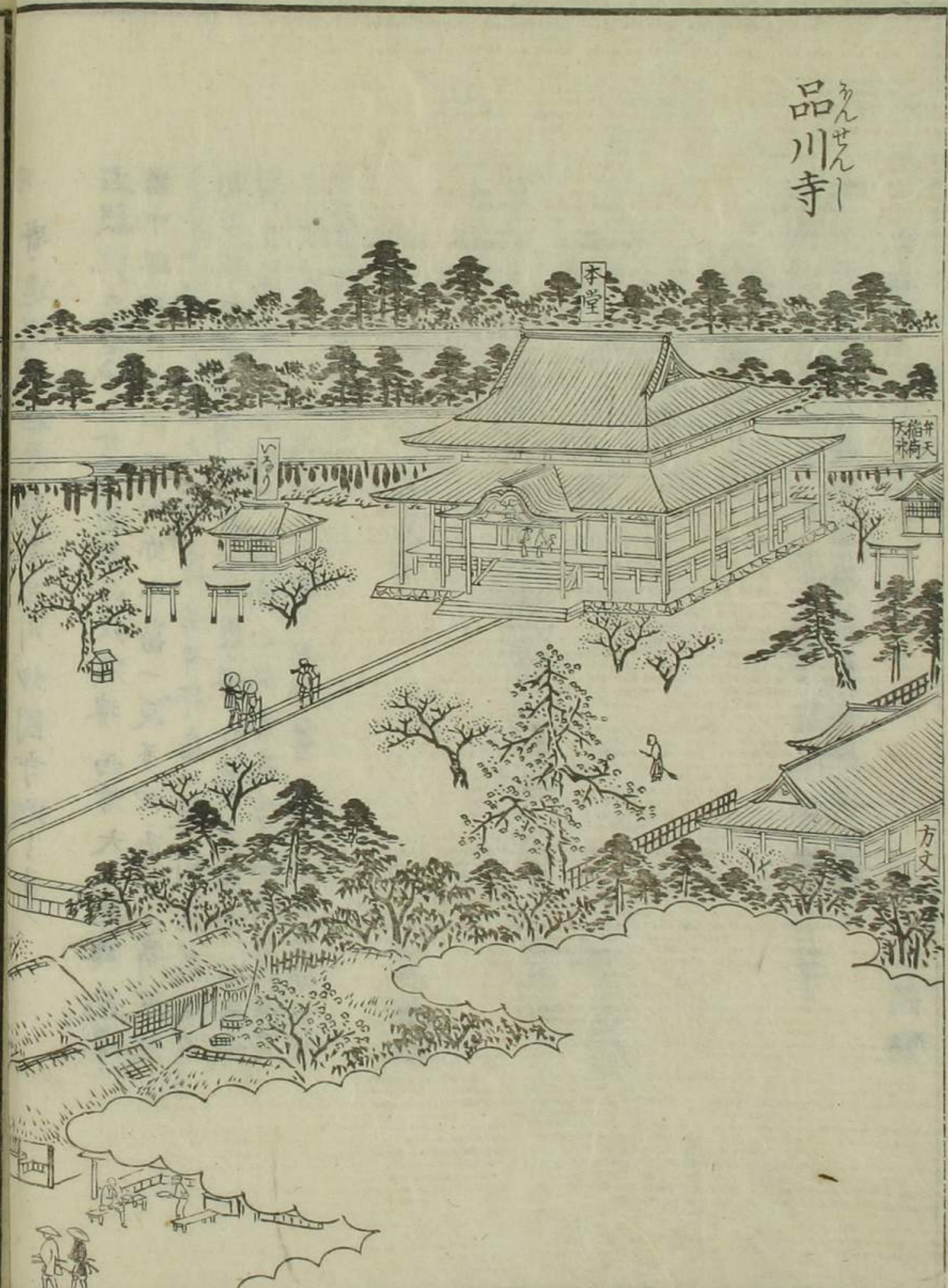
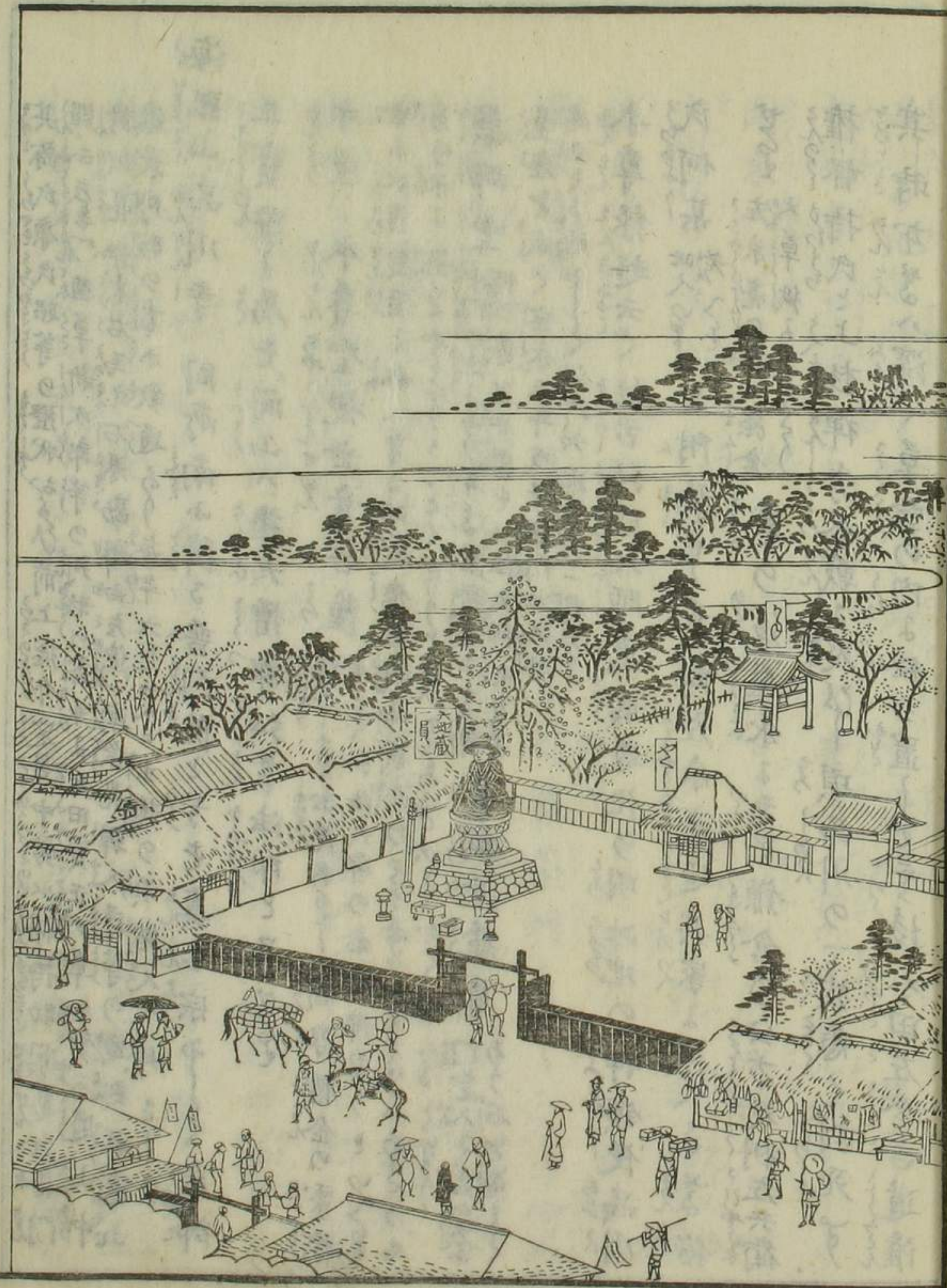
當寺別當

制札妙國寺

右於高寺為守軍勢甲乙人等盤妨狼藉之章
停止之若至于違犯軍者之處罪科状如件

大永四年正月十二日

氏綱判在



品川寺

本堂

方丈

方丈

其餘氏康氏昭等の證狀あり前上徳介定景中務以補持助開善左衛門
彈正右衛門植草新次郎等の辨形の書并太田資正大草加賀入道山沖
修景判形の書お教通あり毎年六月廿八日由掃の頃諸人へ拜進し
海照山品川寺 同所南隣る普門院と号を真言宗や〜京師

三寶院は屬を岡山ハ權大僧都弘法印と号せり

本堂 本尊聖觀世音菩薩 海中より出現あり一圓淨檀金の靈像

世よ水月觀音と稱へざる此靈像の利益感應のせりなりハわたりも

藥師堂 持の像を安置せし法大師作なり 紫銅地藏尊 門を左の方

本尊縁起云く往古弘法大師東國遊化の頃此地の押領使品川

氏何某 此人の名は附屬せり同左京亮迄其家は傳へり信

推督持氏と上杉禪秀合戦及び一頃品川の一族悉く討死す

其時おさるハ深く草堂の内は秘り置しとて後太田左金吾道灌

品川の地を領せし頃深く此本を崇信一字を建立し

大圓寺と号し夫より後又後倉管領上杉の両家不和ゆり

關東大亂る依り諸の寺社破滅せり少かり永祿九年

小田原の北条氏政今川家へ加勢あり信玄と戦ふ時信玄武

藏の北の方より不意に押寄せ江戸地より品川を追捕し氏

家を焼拂ふ此時甲州方の中より竹森蔭村といふ二人の侍品

川觀音の御堂を焼く本を奪ひ甲州へ歸り其者大

狂亂し本を元の地へ遷せし旨威靈の示ありと武藏ハ

敵地なりハ其便をゆえ一人の乞食の聖を頼り元の地へ還

座なりまるといふ御堂も焼亡しこれハ其礎石の跡を

地を求め形をわりの草堂を營て造り安置なり

遙々年月隔り後兼應元年壬辰法印弘法堂宇を建立

し名を海照山品川寺普門院と号し今來日降普門示現の

千躰荒神堂



威力著く惠日の光煩惱の闇霧と破る感應の水月ハ長夜と

照しぬ按は妙國寺什室に存する所の永享十一年上杉憲泰寺境寄附の證文ハ南ハ觀音堂坂と界とをわたり別當寺の觀音のうと云なり

千體荒神堂 同所半町をわたり南同海道の右の方海雲寺也

のる禪林あり本荒神の靈像ハ毘首羯磨天の眞作也

昔九州肥後國天草荒神の原といふありと邪宗門一揆の

項邪徒等社と破却せ故ありと當寺に勸請せしむると靈驗

ありとく衆人常々系詣す毎月廿八日を以て縁日とを祭礼ハ

三月十一月共々廿八日なり

補陀山海晏寺 同所一町をわたり南海道の右にあり曹洞派の

禪宗あり三田の功運寺に屬せ北條相模守平時頼朝臣の

開基とく大覺禪師を開山と稱し古山和尚を弟二世ハ

天叟慶存和尚慶長元年丙辰當寺を再興し中興也



海晏寺

題海晏寺紅樹
 古刹楓林簇晚霞
 深深庭院駐年華
 那知秋後風霜色
 却勝江南二月花
 春臺



海晏寺
 紅葉見之圖



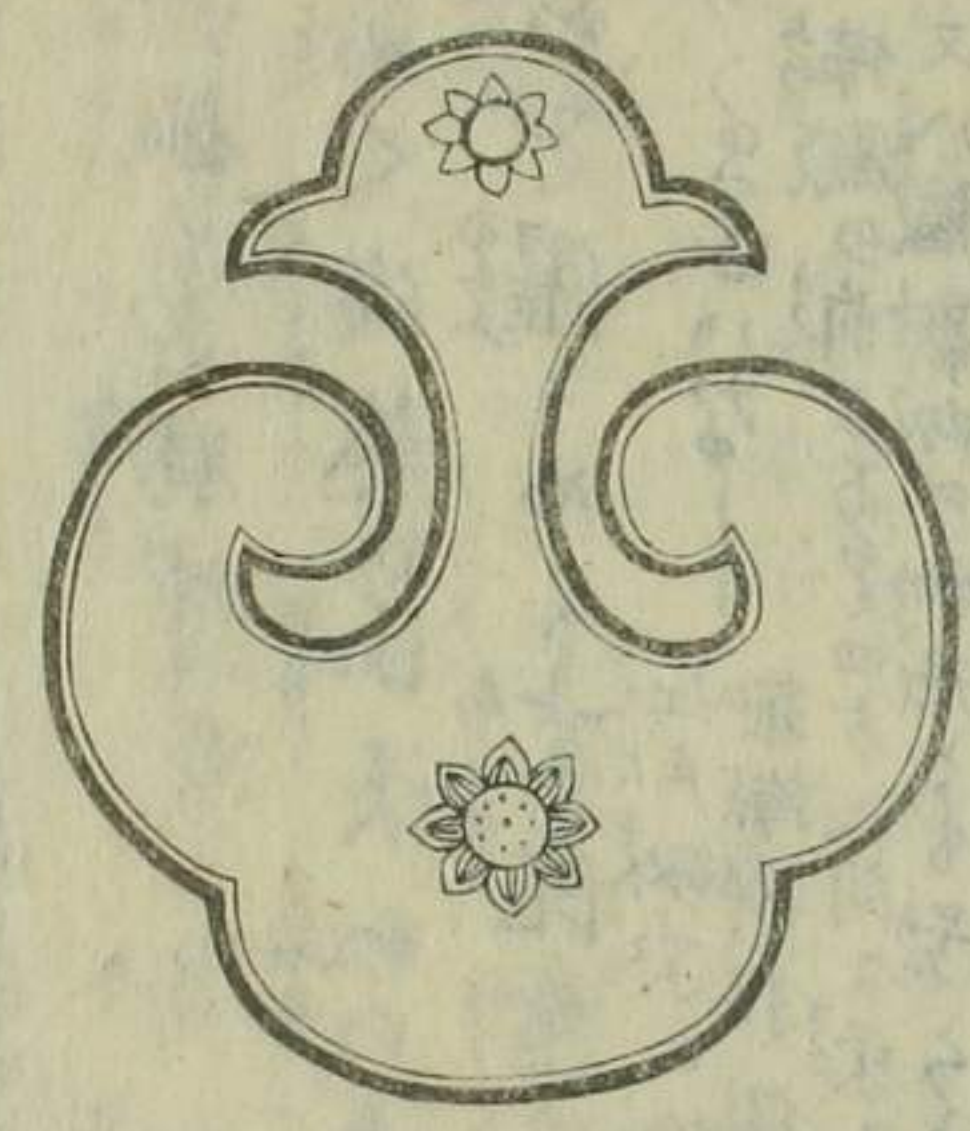
なる慶和尚ハ松平因幡守藤元の子なり天正御入國の頃三州より召さる當寺を賜ふ曰く臨濟宗なりしを此時より今のめく洞家と改められし

本堂本尊鮫頭觀世音
鐘樓 本堂の前左の方より元禄十五年當寺回録の災より罹り舊鐘焼損を依り宝永七年改鑄し往古の銘を其下に刻せり

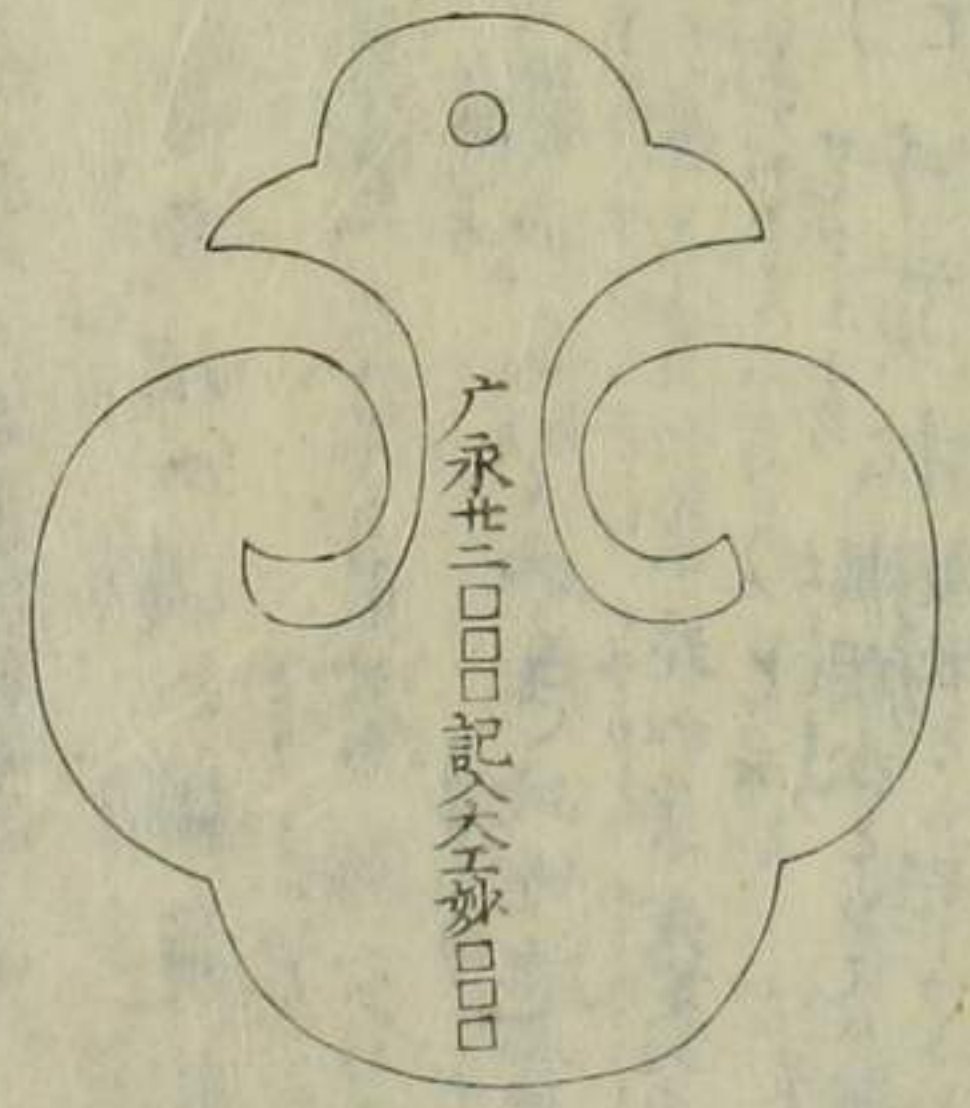
南膳部州大日本國關東道武藏州荏原郡品川郷
補陀山海晏禪寺爰十方施主屢捨祥財聚銅金專
命良工鑄成佛器高掛層樓美哉堂々大器落々洪
音斯迺見色明心聞声悟道之因是故鳴鐘相念偈
願此鐘声超法界錢田幽暗悲皆聞塵清淨證圓
通一切衆生成正覺是以虎溪老拙厥銘曰
鳴氏炉鞴四海九根當陽掛起法音千鈞
色透碧落響徹刹塵募破睡夢忽性真
弘濟群類普結良臣法輪常轉佛日尚新
寶德三辛未仲夏下泝鑄師 佛日尚新
且越道琳現住存紹代鑄師 定吉
寶永七中夏上旬

雲版一口

高一尺二分
横一尺二分
蓮花大
二寸四分



背



元永三〇〇〇記大五〇〇〇

北條相模守時頼朝臣石塔 本堂の前右の方あり碑面ハ最明寺殿
廿二日正五位下行相模守平元帥時頼と彫付てあり

按小東鑑弘長三年十一月二十二日松岡過去帳成列入道正五位下行相模守
平朝臣時頼三十七歳明寺の比事ゆき卒すまゝあり今鎌倉山内ハある所此
禪興寺といふ寺院ハ街古最明寺の旧地なる由鎌倉志ハ云々あり當寺に
ある所の石塔ハ其摸一なる石碑の形後世のものと相合し

二階堂出羽守石塔 本堂の後の山腹あり往古あり當寺の門前ハ鎌倉
北条家迄ハ執権の中より關門の守護と大森の辺ハ屋形を建てる官人を
置れしなり故に此出羽守も其項品川の守護と云々此地ハありしなり
當寺を香花院と改めし二階堂出羽守三人とあり一ハ左衛門尉正五位下出羽守行義八道道空

行藤正安三年八月出家... 道曉と号し... 卒八二八同後五位上出羽守... 七三八同從五位下出羽守入道道蘊吉野城攻の大將なり... 寺僧相傳へく二階堂出羽守行氏... 守は住し弘長三年十月出家... 一歳少く卒

梶原平三景時石塔 同所小並み景時謀叛を企て... 北条左京権大夫平時宗石塔 同所小並み... 室光寺殿道果大禪定門と号す... 楓樹江戸丹楓の名勝ゆゑ一奇觀とて晩秋の頃ハ満庭錦

映しつゝ又紅を濯ぐめく書院僧房も其色よからぬ... 千貫牡丹 佛殿の前はあまの四方八間は榮え... 龍淵庭前の池をいふ... 梶原屋敷 梶原家の石地蔵の私法大師... 権現御手洗池 延命水... 明神森 山王社 八幡宮

寺晏海

總門額 二階堂出羽守 行氏筆

寺記云後深草帝御宇建長三年辛亥五月七日此地乃海... 中より敷一口漁夫の網よからんて揚れを腹中より正觀音の... 靈像を得し此より鑑倉へ聞えし久し頼朝臣希代は... 淨土なれはとて補陀山と号し四海安平の義よりて海晏... 六年の春緒堂落成し翌る七年入佛供養を修行を

地を鯨頭嶽と云ふ海の方（百八十間余）又時頼朝臣南北十二町東西十町の地を寄捨あり五箇の僧坊は百八十貫文を附せらる八十宇の房舎ハ巍然とて其覺をなす又天竺の靈鷲山ハ準へ南紀の高野山ハ擬し多しハ有信の華ハ月牌を置石塔を建（私安五年ハ北条時宗願主として堂塔重修）殊更重罪の華たりとも當寺ハ入者ハ其罪を免許せしめ則を定め山庫僧供ハ四方十里の間頭陀の免許ありと云ふ（住古當寺開創の頃松樹各二十株を植洲崎ハ八幡三社を營建其松の枝葉仍踏を履ひて繁茂せし其頃彌童の唄ハ西川浦ハ名所なり海晏寺前のまうと松樹代もさうとてゆくと視ハ一となり鄙言擧ふ堪とせしむと云々）

鯨頭明神祠

砂水の海濱あり祭神詳なく土俗傳へ云往古此地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

上古海道

呂川より池上へ行道大井あり北の方東海寺南門は向の岱往古の呂川の驛路なり

矢口と云ふきし終り（今も八景あり）西南地上へ行道ハ昔の一里塚の標一標式大井驛傳馬の證と云ふ

延喜式曰 諸國驛傳馬 中略 武藏國驛馬 店屋 小高

海賞山來福寺

砂水御林町あり真言宗中より本尊ハ地藏菩薩を安置し弘法大師の作（師丈九寸八分）なり梶原氏の草創也

則此地ハ其宅地なりと云ふ縁起云此本尊ハ梶原氏代々其家小相傳く尤靈威なり然元亨の頃智辨と云沙門眼疾を患ひ

此本尊ハ祈念し不日ハ本快を得り其後世の中大ハ乱るハ本尊の所在をれりハ文龜年間梅巖阿闍梨當寺より四五町

西の方徑塚と云ふ地やこれを感得せしとなり

徑塚の來由ハ

住なるん或冊子云く此所ハ佐美津川と云細き流の瀬と交らるし佐美津

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

此の地ハ文餘の鯨の揚るあり其頃此地大疫疾流行せり

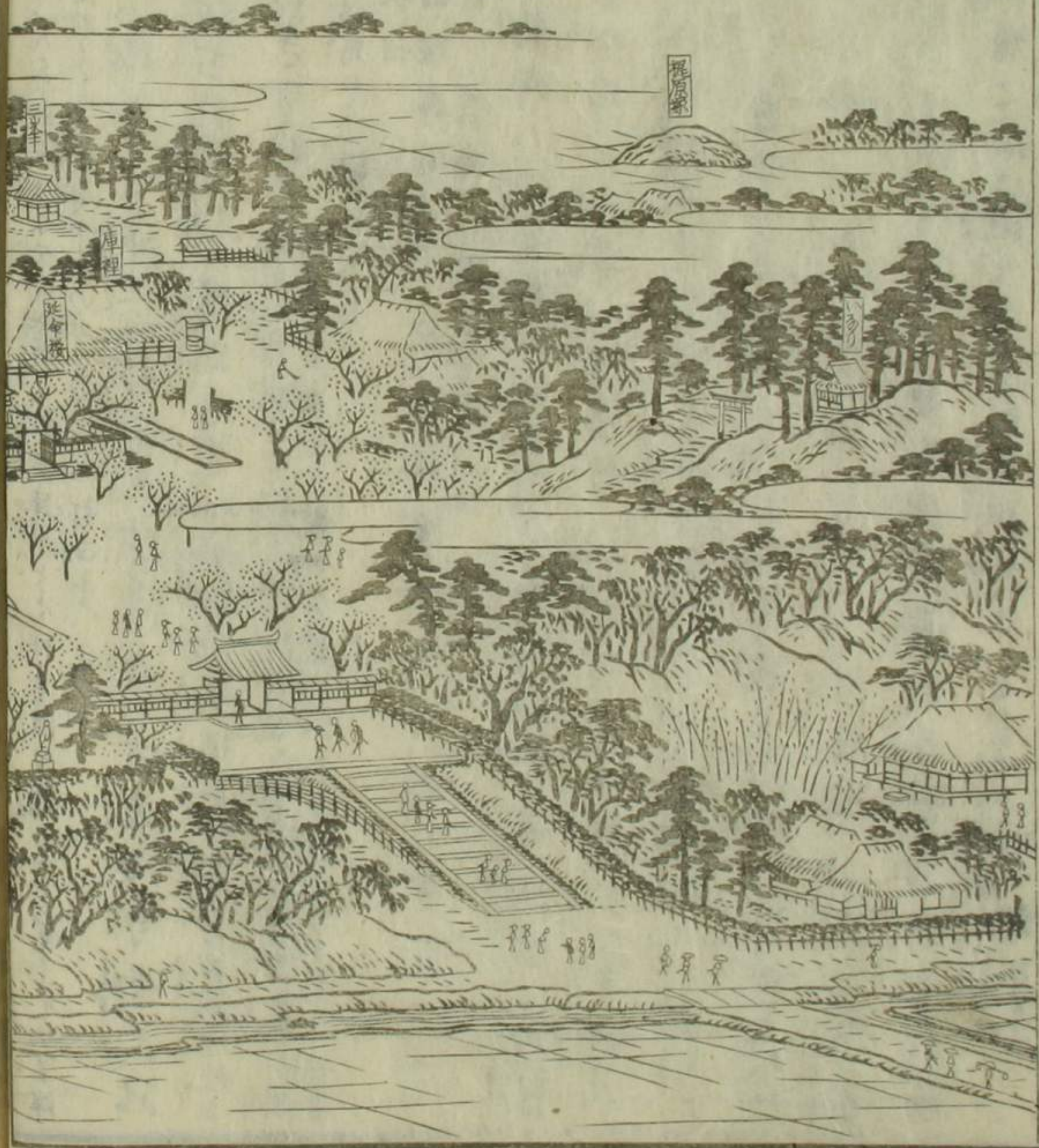
雪中菴
夢太

そ
く



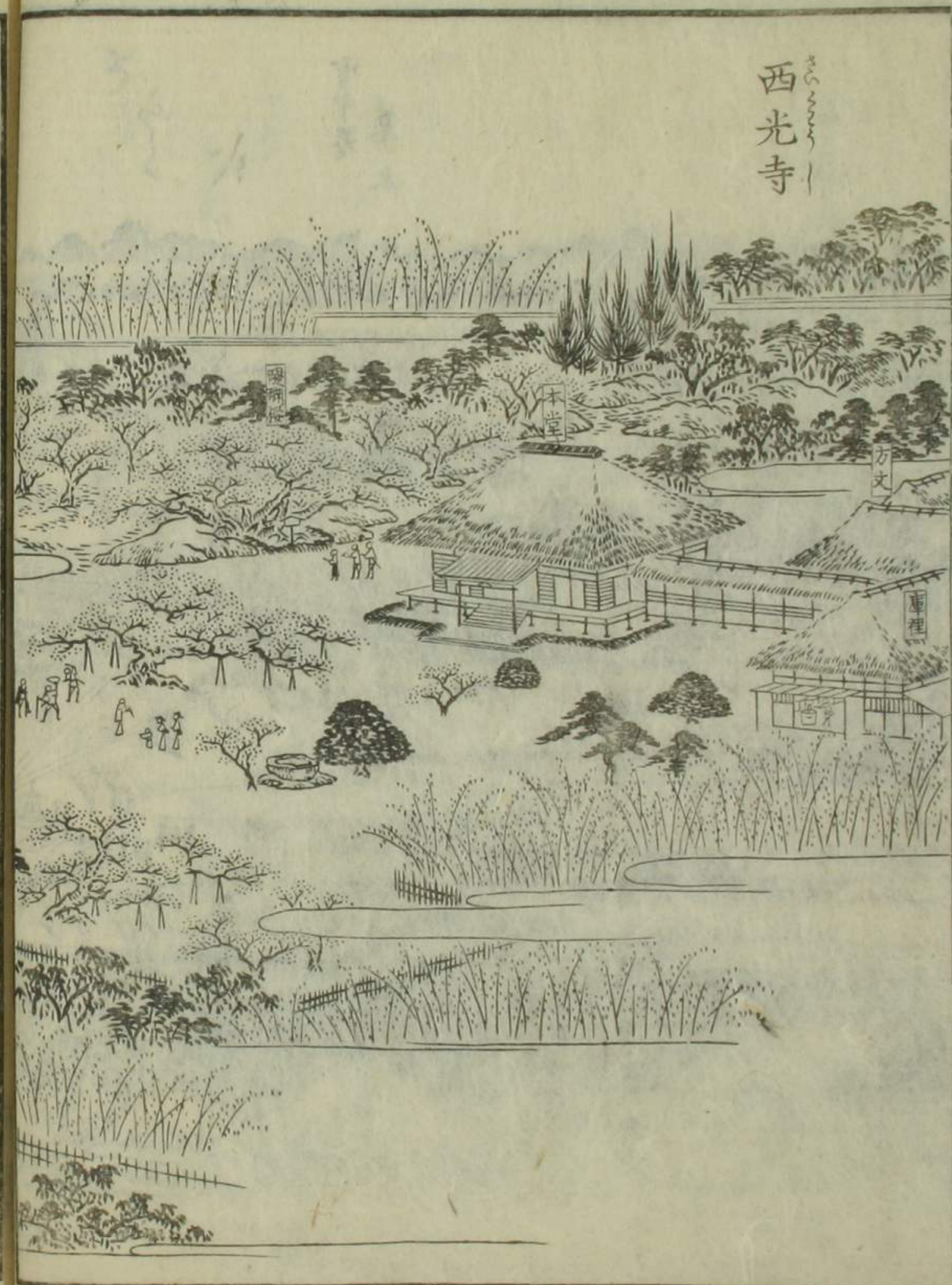
来福寺

世の
中
三々
る





西光寺



按は當寺開基梶原氏と稱するもの、小田原北条家の幕下たり。梶原
 日向守なる一永祿二年の頃六郷内新井宿の地を領せしむ。北条家所領
 役帳よるに是より考ふるに此所日向守の采邑の地中又其宅は
 此所ありしと思はれ、土民お侍つく其宅の跡に來福寺ありしハ砂水
 松平土佐侯の別荘の地なりと云へり

延命 櫻 本堂の左の方 梶原松 同所あり 梶原氏 梶原塚 寺の後
 あり塚上は杉を植へり此辺農氏の構の中あり梶原塚と号するものあり是ハ
 其氏族の墓所なり其族の石塔當寺あり

當寺 境内櫻樹數株ありき悉く品を領てり 弥生の花盛
 わハ遠近薰を慕ひてあふ遊賞もる人少りす

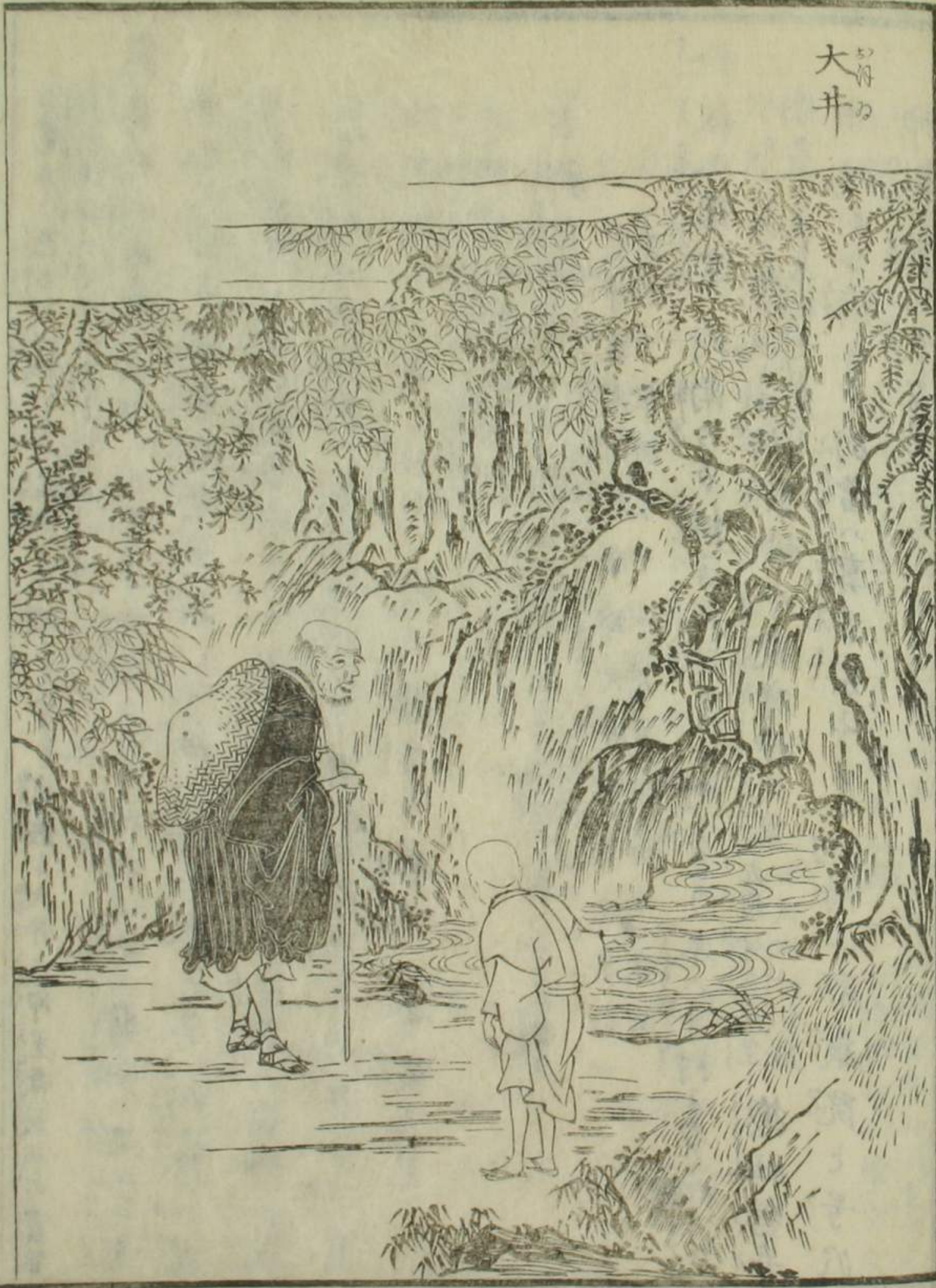
納経塚 來福寺より六町を西あり相傳へ往古右大將
 頼朝卿佛經を書寫なし此地は収りてり來福寺本
 尊地藏菩薩此所より出現し頃土中にて夜なく
 讀經ししと云へり故に來福寺を世に
 經讀地藏尊と稱せり

松榮山西光寺 同所二町を南あり弘安九年の開創を
 とりて往古八天台宗中にて榮順律師開山たりと云へり其後

弘福寺



大井おおい



親鸞上人弘法の道場と當寺十五世を空善と号し芳賀入道
禪可より十四世芳賀伯耆守後五位上清原真人元則の長子小
して俗稱ハ武藏五郎西光又幼名を伯玉丸と号し今當寺を西
光寺と号す此西光の名を摘み号けたる寺寶に
武田信玄の陣羽織と称するものを収む庭前醍醐櫻と名
する老樹あり花ハ單瓣やまゝ立春より七十日目の頃より開
きむ其餘却て人の櫻の老樹教株あり満花の節ハ奇觀
あり此地第一花の名所なり

大井山弘福寺 西光寺より一丁をかり西南にあり當寺も鸞師の
弘法ゆゑ本尊阿彌陀如来の像ハ聖德太子の作なりや
と云ふ此地ハ麻布山善福寺の中奥了海上人誕生の旧跡なり
兼三卷麻布善福當寺も櫻の老樹あり春時奇觀なり
寺の下ニ詳なり 櫻の園はあり少くありの岳の下あり横穴の泉あり
了海上人產生湯井 寺の後園はあり少くありの岳の下あり横穴の泉あり
横へ入り深しと云ふ也

鹿島大明神社 同所一丁とあり西南あり社記云く當社ハ安和二年
同三郎等の名あり何れ此地より遷りて東鑑に大井本郎長同次郎實春

己巳九月十九日常陸國鹿島の御神を遷し奉ると云く別當也尔現

山常林寺と号は天台宗なり東叡山に属せり本尊ハ藥師如来
慈覺大師作開基ハ尊榮法印なり貞和三年丁亥再興す了覺

阿闍梨を中興と稱せり境内櫻多く春時一奇觀たり
本地堂 智燈大師の作ありとあり

古鷄口 別當常林寺に收む松女歌白とある上の文字よむは按よ
奉寄進 武州荏原郡大井郷鹿島宮鷄口
寛正二年癸未十一月日福松女歌白

鈴森八幡宮 同南の方繩を隔て十町あり不入斗村あり
号きよののハ和名抄ハ所謂 祭神中殿應神天皇 左殿仲哀天皇 不入斗と
餘戸とありの則是あり 祭神中殿應神天皇 右殿神功皇后 總社盤井

神社とも稱せり別當ハ真言宗中々ハ幡山密嚴院と号は
神主ハ森田氏なり

武蔵國風土記殘編云 圭田三十六東二字
武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六東二字
田敏達天皇二年癸巳八月所祭大己貴命也社
邊有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水變之
味事正直則知水土俗曰藥水云云 祈病者取之服之
其功驗如神土俗曰藥水云云

三 貞觀元年冬十月七日己丑幾内幾外諸國遣使
斑幣於天神地祇去九月己丑無風雨之災誠有感
於歲以有年仍賽之武蔵國從五位下磐井神列

鈴石 當社あり相傳ハ他の石と云くを撃ハ其石鈴の音ありと當社
傳記ハ此靈石ハより此地の名を鈴石森と云ハ後中畧してまのり
云ハ此の石ハ賊の爲ニ棄つたりと云

鳥石 社地ハ左の角あり四五尺とあり石中ハ黒漆を以て畫りて天然ハ
鳥の形を顯ハせり石の左の角ハ南朝光聖の銘あり鳥石葛辰是を鷄
舊麻布の古川町より三田の方へ移すの三也とありと後此地へ遷すとあり書

古篆なり

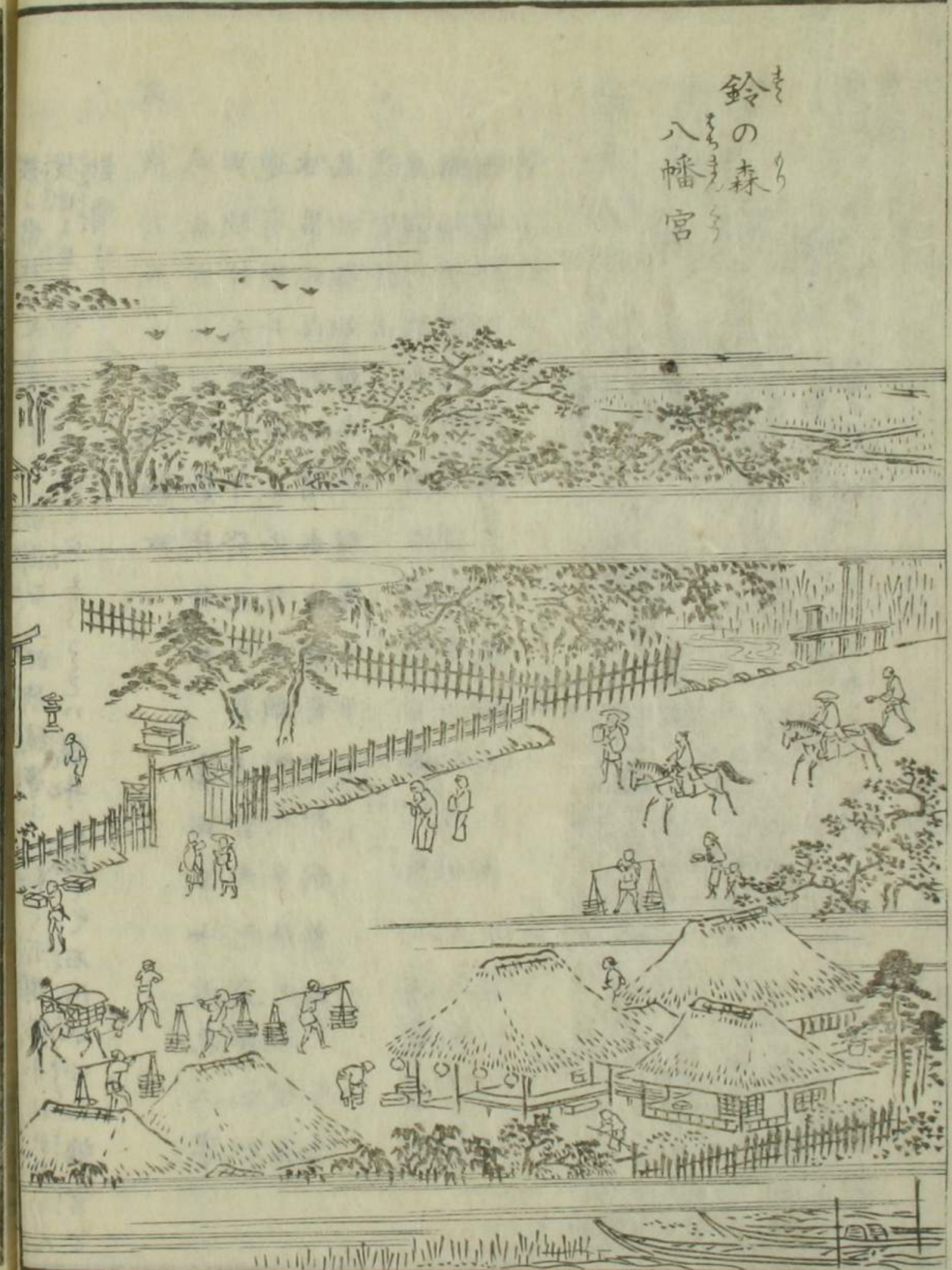
按ハ當社ハ延喜式に當國風土記殘編等ハ載る所謂磐井神社是ハ
後世に至り祭す所の神也定ありとハ磐井ハ因る石清水云ハ幡宮を
勸清せりあり

武蔵國風土記殘編云 圭田三十六東二字
武蔵國荏原郡磐井神社 圭田三十六東二字
田敏達天皇二年癸巳八月所祭大己貴命也社
邊有磐井祈事土俗有妄願則御手洗井水變之
味事正直則知水土俗曰藥水云云 祈病者取之服之
其功驗如神土俗曰藥水云云



色
新
四
本
松
社

鈴
の
森
宮
八
幡



匪星島石而歸不黃羅旨魯味所到死而祠出

額 鳥石 阿野公繼卿筆 鳥居額 鳥石祠 吉田二位兼隆卿筆

聯 鳥石 龍秋の珠の島雨 梅小路三位參議定福卿

傳降蒼海欽森風

中一首

石華表 六七町東の方今海面とわり中音の項迄ハ石の鳥居の柱の礎は

俄の鳥居の項迄海道度々ハ社地の中を往還の道路と云ふ

社記曰往古神功皇后三韓沙征伐の時長門國豊浦の津より

沙船よりをれんと其海邊にて合珠の神石を得る則石青く

雞卵のや石中鈴の音ありと鑄たると故に鈴石と稱を異賊征

伐の後香推の宮小蔵ありと欽明天皇御宇八幡大神始て筑

前宇佐宮鎮座の日靈示ありと此寶石を宇佐宮遷

させし其後聖武天皇御宇文章博士沙史大夫正二位文部

神祇伯勳十二等石川朝臣年足宇佐宮の奉幣使たり

時八幡大神再ひ靈告あり依之此靈石を年足の家に移し

崇信より嫡孫中宮大夫從四位中納言豊人卿桓武天皇の

延暦年中武蔵守に任せし當國は下向に在る原郡に在り

頃終に此地を封し當社を經營し神石を鎮座なり

當社は是れ故に宮地を鈴石森と云其後清和天皇御宇貞觀

年間八幡宮宇佐宮より山城國石清水に鎮座在り

餘州國毎に總社八幡宮を擇定賜み依り武蔵國に於てハ

當社を以て總社とせし

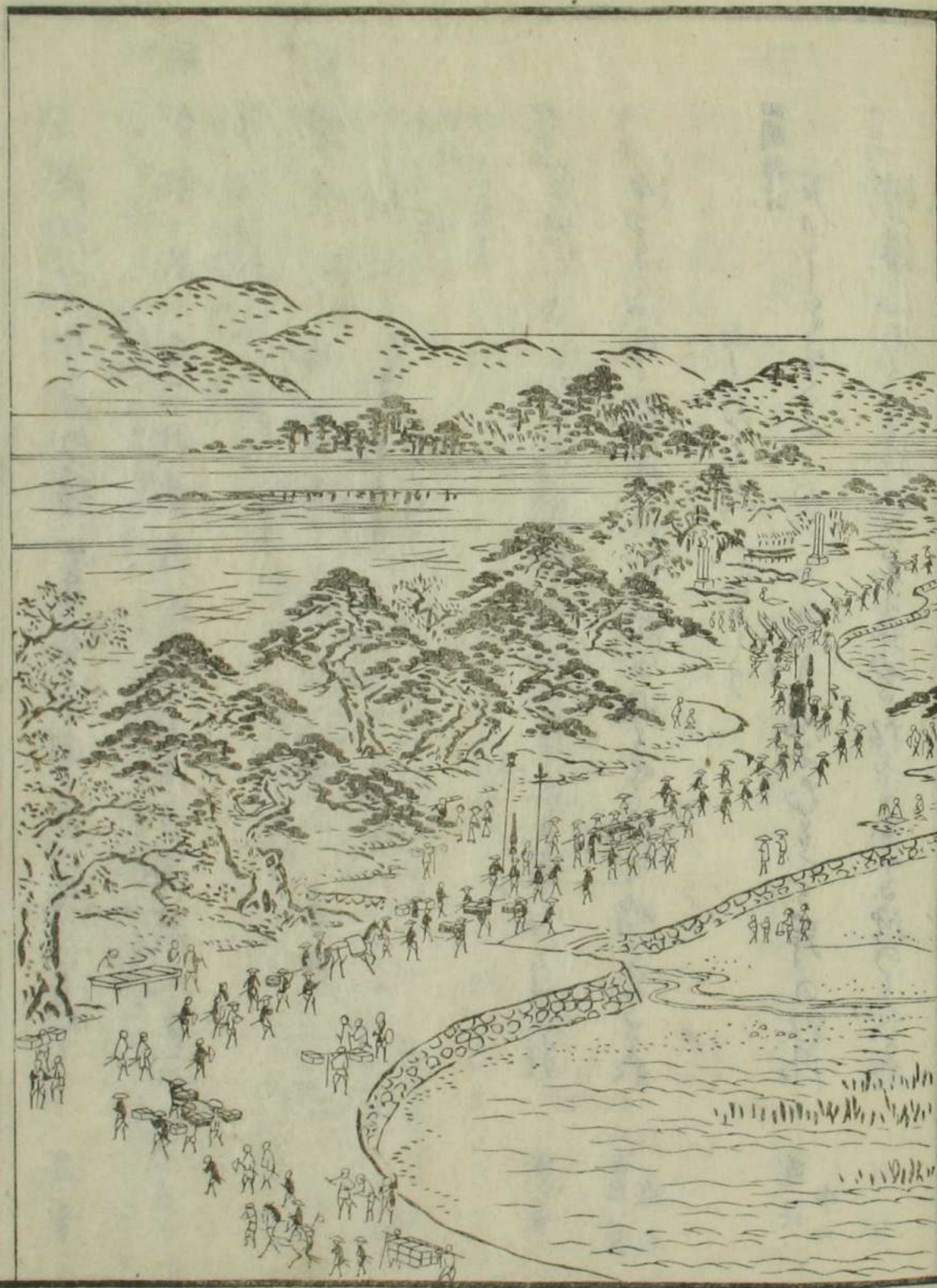
笠島 鈴森の地を以て八幡宮の境内左の方ハ笠島神社と

稱せしものあれと定あり祭る神六前豊宇賀姫藤田彦

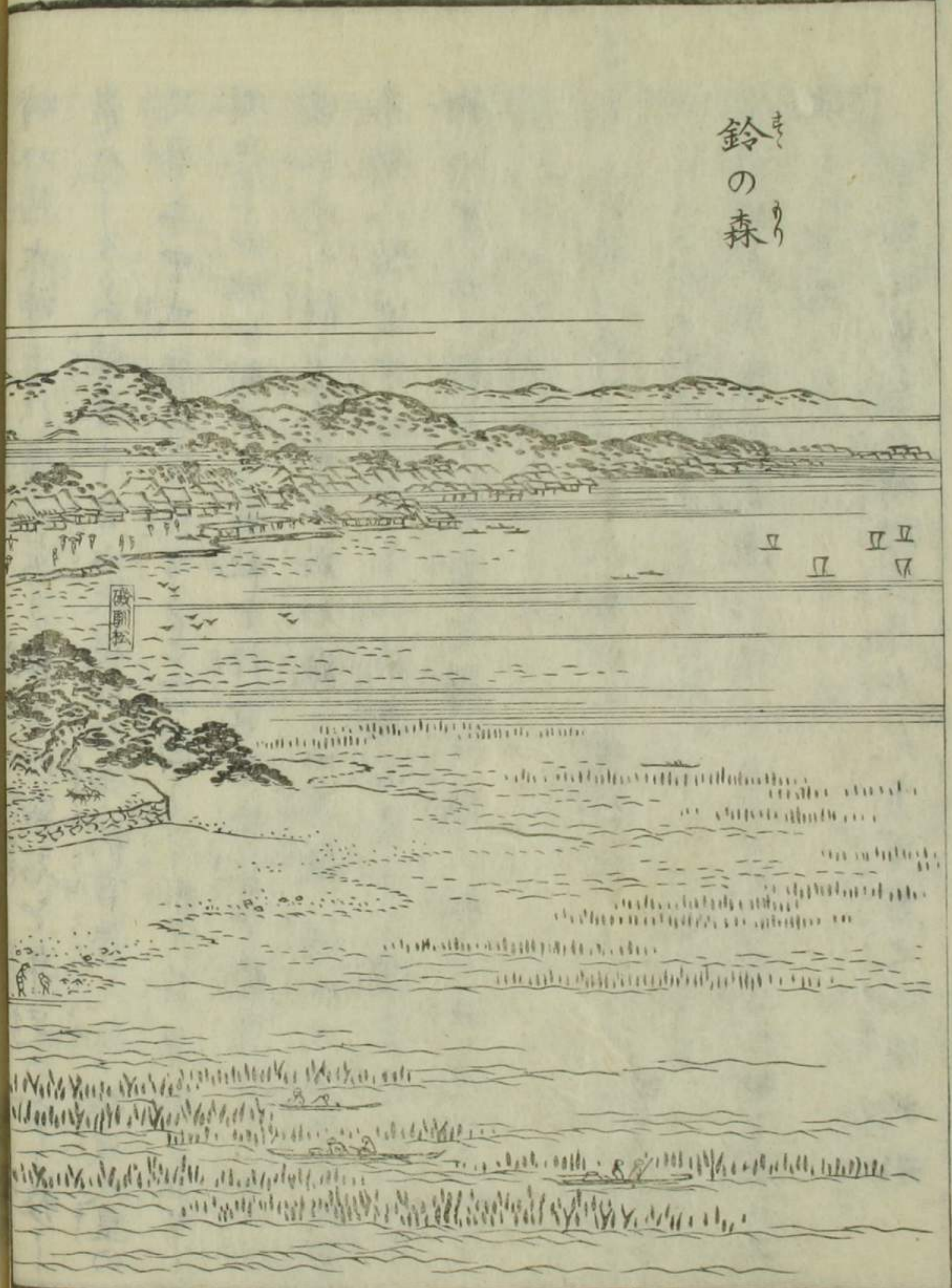
菊理姫天満宮淡島鹿島等なり奥州笠島の神と等き故

未これと考へし

草陰之荒蘭之埼乃笠島乎見乍可君之山道將越



鈴
の
森



秋の松花あつねの松の生るをさし物さ月ハさあけしなり 為家

磯馴松 鈴の森の社前海道より左の方海濱人家の前よりあり

當社の神木と稱せ

荒蘭崎 同く鈴森の邊とも或ハ云木原山ハ景坂とも藻汐草に

荒蘭磯とあり 北条家の所領後帳は梶原日向守六郷内新井宿を領

此地も古の海道なり

白波のあつねの松は磯馴松をさしぬきのくそつれ見 家長

夫木 沖津浪あつねの松は磯馴松をさしぬきのくそつれ見 今出川院 近衛

わつねとつねをさしぬ

四國雜記 芦きしをさるあつねの松は磯馴松をさしぬきのくそつれ見 道真 准后

千五百番 沖津浪あつねの松は磯馴松をさしぬきのくそつれ見

沖津浪あつねの松は磯馴松をさしぬきのくそつれ見 信實

鏡懸松 ハ景坂よりあり往古ハ幡太郎義家朝臣奥州征伐の時

此松ハ鏡を懸らせしなりと云傳ハ高と六七丈そのを大と牛をさし

枝葉柳條のゆく垂下りて地を離るる其間ハ四五尺ハ過せ

尤比類なき古松あり一ハ荒磯松磯馴松とも呼ば或ハ震松とも

号く 枝葉共ハ動揺をさしぬ 此地より望めハ海上眼下よりありて美

景の地なり 土俗ハ景を誤りて やん坂と唱へしなり

八幡山行慶寺 大崎より東海寺裏の方戸越村よりあり文祿元年起

立淨土宗中々岡山念誓上人戸越八幡兼帯なり願成院と号は

梶原氏什室 ありと云ふ

戸越八幡 戸越村鎮守なり天文年間鎮座ありとのみ御正躰は

聖徳太子の作本地佛阿弥陀如来の像ハ春日の作なり當社



やけん
八景坂
鑑掛松



境内の小石を庖瘡の守とて靈驗ありとて土人は是を拾ひ取
 歸る九月廿八日相撲あり
分限帳太田新六郎所領の中
 六郷内戸越ハ梶原分云

木原山 同後の丘山とつり木原氏の領地なり
祖先を伊豫の河野の一族といふを誤る

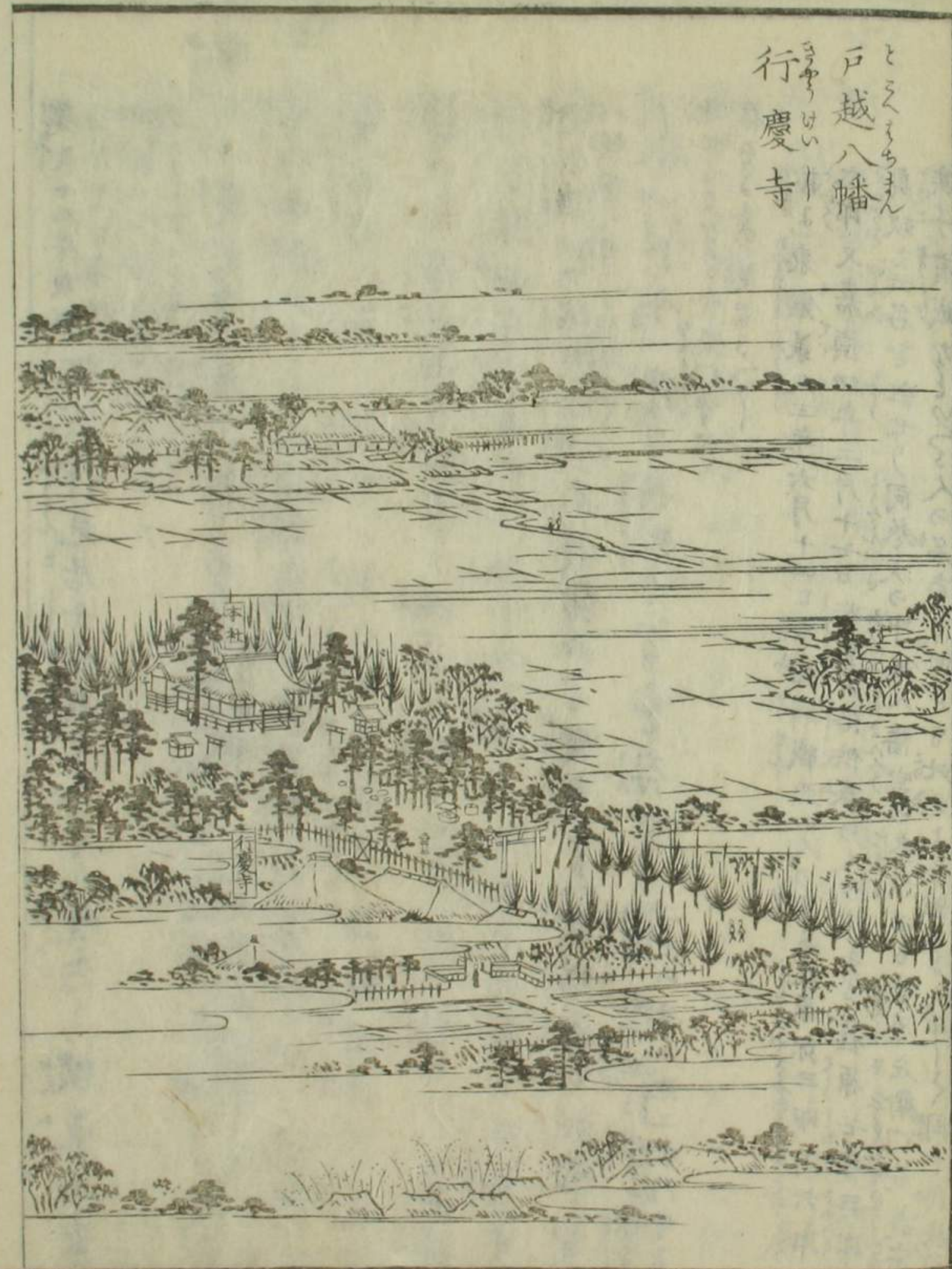
木原氏の系圖を歴觀せ云く木原氏姓ハ穂積祖先と鈴木掃部介吉行といふ
 四代の後同苗平兵衛吉頼 御當家ト仕へたり 遠州山名郡木原にて五貫文の
 地を賜り其子と七郎兵衛吉次と号し其米邑木原ト任じり 亦普請方と勤む
 然天正三年二月十八日 台命あり 在名とつり 鈴木氏を改め木原と号す
 桐十八年江戸淺打入の時武州荏原郡 此山頂ハ上古の相模街道ゆく
 新井宿村ゆく四百四十石をたす云云

荒蘭宿といひ地なりと古奇ありぬの崎ハ釜釜と見つ
 又池の中島ハ辨財天の叢祠なりとある 則此所のつりなる一熊野社
此宮を土民小野小町
 の宮なりといふ其地

醫福山桃雲寺 同所山際あり徳門ハ東向ゆく海ハ相對す
此寺龍崖下の耕田昔ハ海あり此崖下迄浪を打寄

眺望八景坂不同
此寺龍崖下の耕田昔ハ海あり此崖下迄浪を打寄
 當寺ハ曹洞派の禪林ゆく中古此地の領主木原氏の祖
木原十郎
 左衛門吉次

戸越八幡
 行慶寺



慶長十五年庚戌 桃雲淨見居士中興せし境内に墳墓あり

福田山蓮花寺 蓮沼村あり 此地六郷に属す永禄二年の頃蓮田真言

宗の古刹中々荏原郡の地頭荏原兵部有治と云一人出家と

蓮沼坊と號し當寺を創立す本寺十一面觀世音菩薩の

像ハ行基大士の作なり往古ハ巍々たり巨藍ありしが地頭

行方彈正忠日蓮の弘法を崇信し他宗の寺院を滅却す

行方彈正の宅北六郷其頃當寺も焼亡す堂塔悉く灰燼とす

華

女塚 女塚村農民太左衛門の地あり相傳往昔竹澤右京亮新田

義典を害せん為都より官方の御所の少將殿と申上臈の女房

年十六七計なる美女を呼下し義典に奪ふ又其後九月十三夜

義典を己う宅に迎へんと謀し小彼女凶兆ありとて是をどしむ

因り竹澤其事にたつと怒り良等も余一件の女を此所迄

透し半殺害せし故に土民あそれとて亡骸を隠し一堆の塚を

築りてとせされとも其名のあはれとて女塚との唱へ來侍

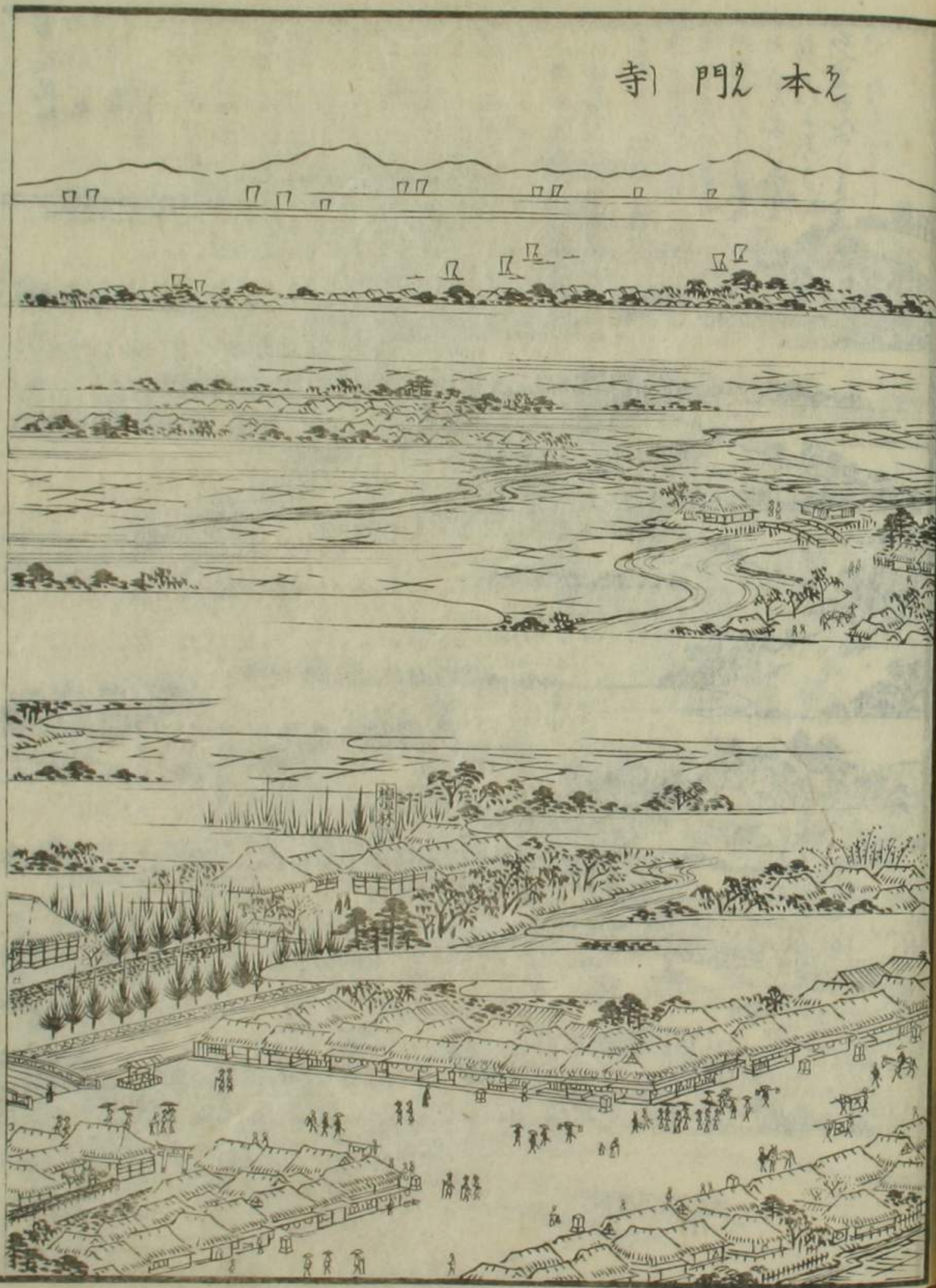
長榮山本門寺 大國院と号し池上邑あり日蓮大士弘法の

一本寺中々三頭と稱する一員あり 甲州身延山總州正中山

當寺日蓮大士終焉の古跡なり弘安年間の開創なり 佛の出世

小湊なり得道ハ滯燈あり積法禪ハ身延入り涅槃ハ池上なり 則宗祖

寺門本



大士を以て開山祖とて文保元年丁巳六老僧弟二位日朗上人
 當寺を修造して大刹とせしめ於諸門徒推て開基と稱す
 日朗上人ハ筑後公正法院大國阿闍梨と云姓ハ源父ハ新羅三郎義光の子南總
 平賀の住人次郎盛義四世の孫平賀有國の子なり十歳中出家文永八年大士
 後平賀の龍口の土軍一筆り同九年佐州に至り弘安元年上足の弟二と成り文保
 二年北條時宗の命を受時印と共花圓漫録と云法義を論ずる者昔ハ下駄草履
 二月廿日池上ニ寂せ世壽七十八 柳花圓漫録云玄關の上の廊下下駄草履
 禪宗の古風と云云 今池上本門寺をかくの
 祖師堂 忍鹿子室永七年寅十月十三日炎上と云云 弘安三年渡辺幸庵老人對話
 右馬頭頭李一揆を起すの時此本門寺諸堂 日蓮大士像 弘安五年十月十三日
 同録及及り 同河上人再建す 其側あり 又和漢三才圖會ニ當寺
 宗祖大士の本像ハ大士在の日に街上人其側あり 題目堂 同樓門の左あり
 額 祖師堂 太虚庵 光悦筆 釋迦堂 當山弟二十五世日朗上人の
 秘藏 釋迦如来母ハ四菩薩の 額 釋王殿 伏見親王真跡 轉輪藏
 像ハ共ニ運慶の作なり 鐘樓 同題目堂の 題目堂 同樓門の左あり 常ニ法華
 祖師堂の後あり 鐘樓 同題目堂の 題目堂 同樓門の左あり 常ニ法華
 一切經を安置す 妙見堂 樓門 行基菩薩の作なり 今池上本門寺をかくの
 鬼子母神 妙見堂 樓門 行基菩薩の作なり 今池上本門寺をかくの

其二



身延記行
万治二年

深草隱士
元政法師

やうなれ八足先
くちては上へ
移てらう修
志のふたは又
あつて書院
あつてふ外
ぬれねふん
をててま
移れねふん
をてて

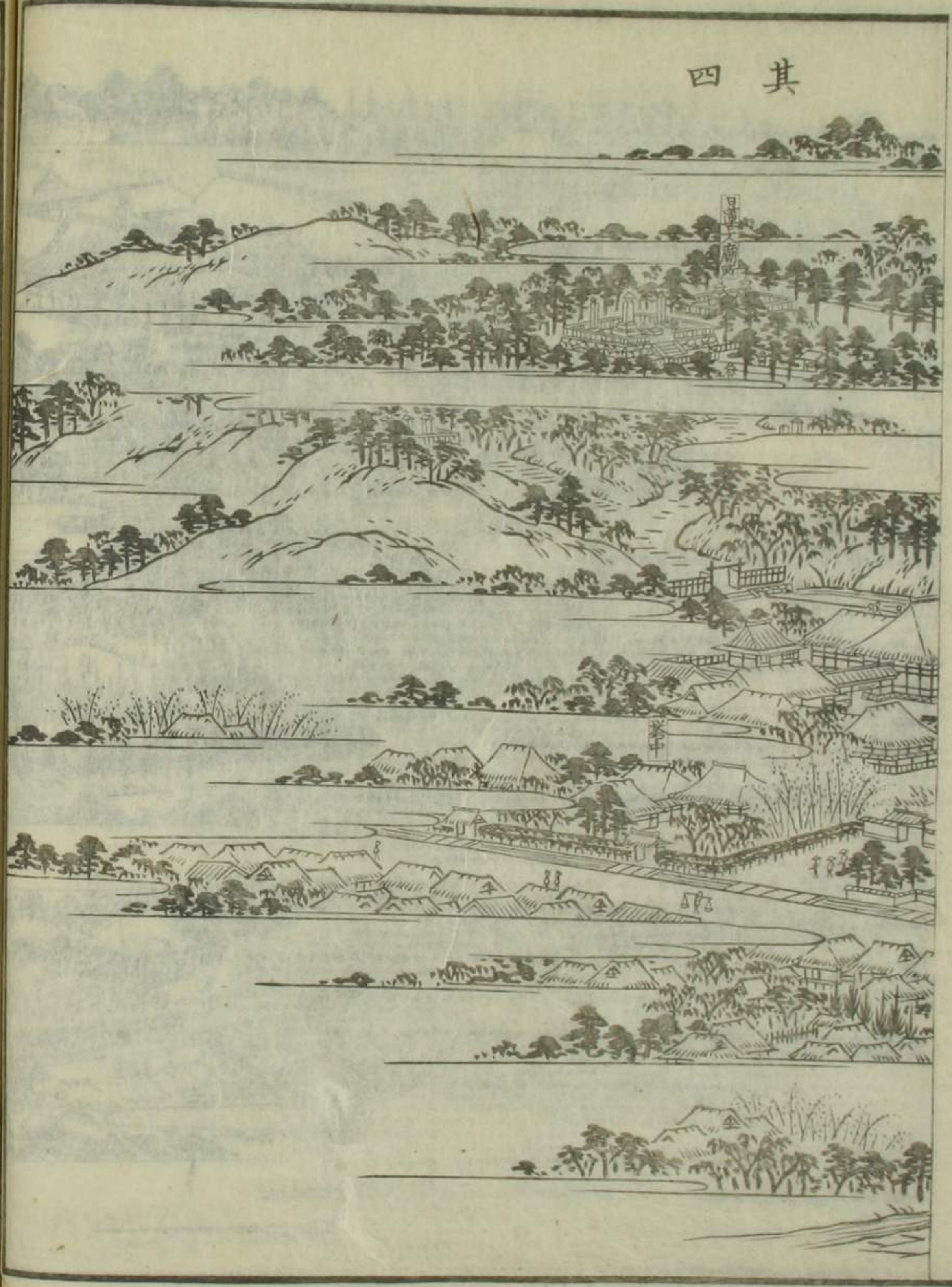
人世少智音追師斯再尋
今宵池上月依舊照天心

手紙とて録る遺子
序者堂を移るも
肉つきのあつても
はつたあつても
わらんわらん生
現乃よありと
受とあんのまへ
とたつと





其四



額 長榮山光悦筆 五層塔 七面堂 宝蔵 客殿の後

檀所 南谷檀林と云ひて 日蓮大士茶毗所 同所の山際あり

草堂を 狩野探幽法印の墓碑 同所あり 狩野家歴世の墓碑 一字の

日蓮大士終焉旧跡 本堂あり 西の法あり 大士入寂の後宗仲居士を

九老僧日澄上人の附屬 一字 長崇山本行寺 日蓮大士鏡浄影當院を

弘安五年九月宗祖大士宗仲居士宅に在り 寂し臨み 項如是未曾有の大導師

涙止く悲歎のあまり 影を遺さむを求む上人夫婦の深信黙止く

終に託し自姿を鏡より彫刻あり 宗仲居士あり 大士宗仲居士宅に在り 寂し

同臨滅度時 影堂の拜殿あり 大士宗仲居士宅に在り 寂し

硯井 洞庭前絶壁の下あり 冷泉中より甘美あり 弘安五年九月

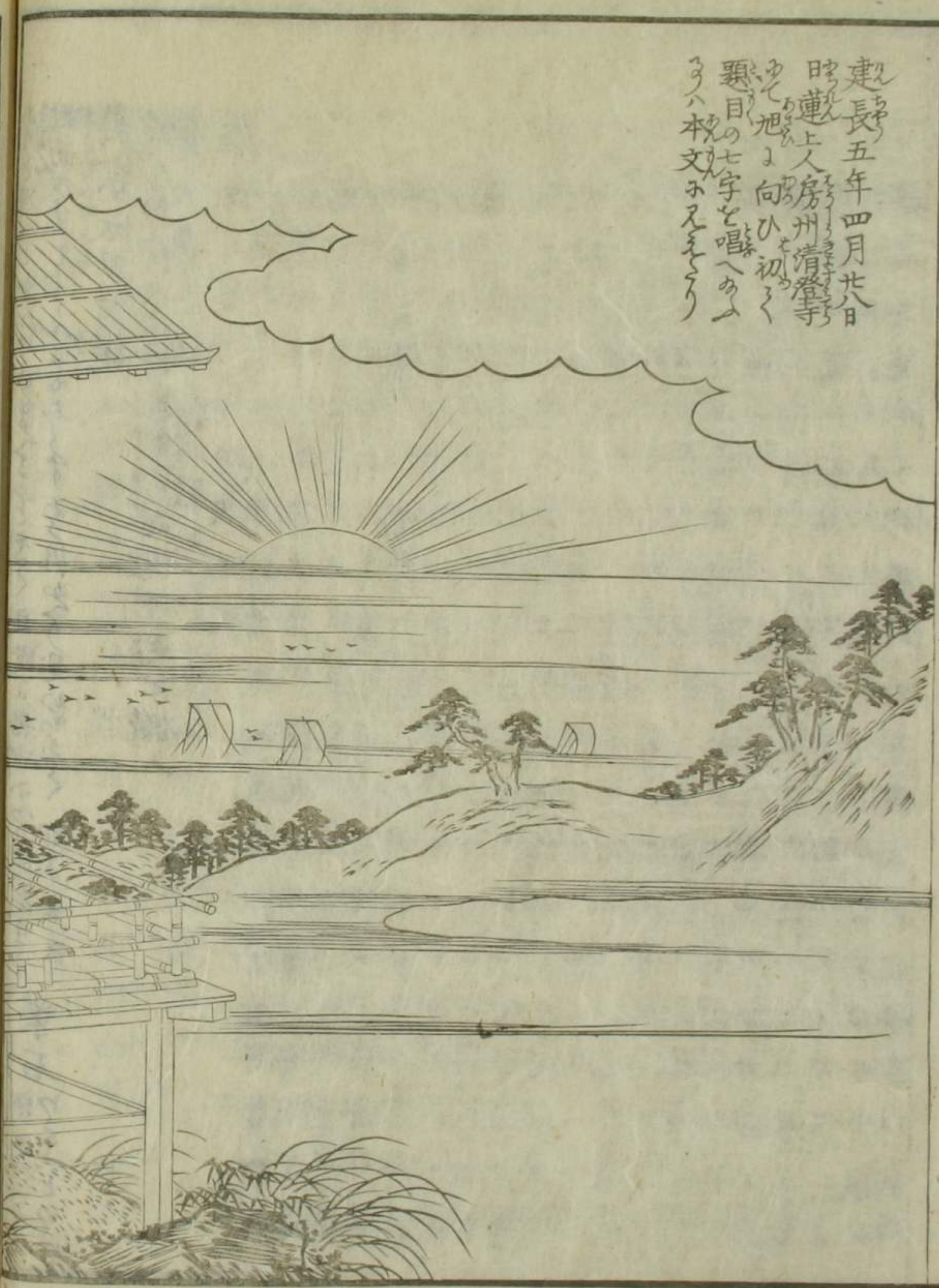
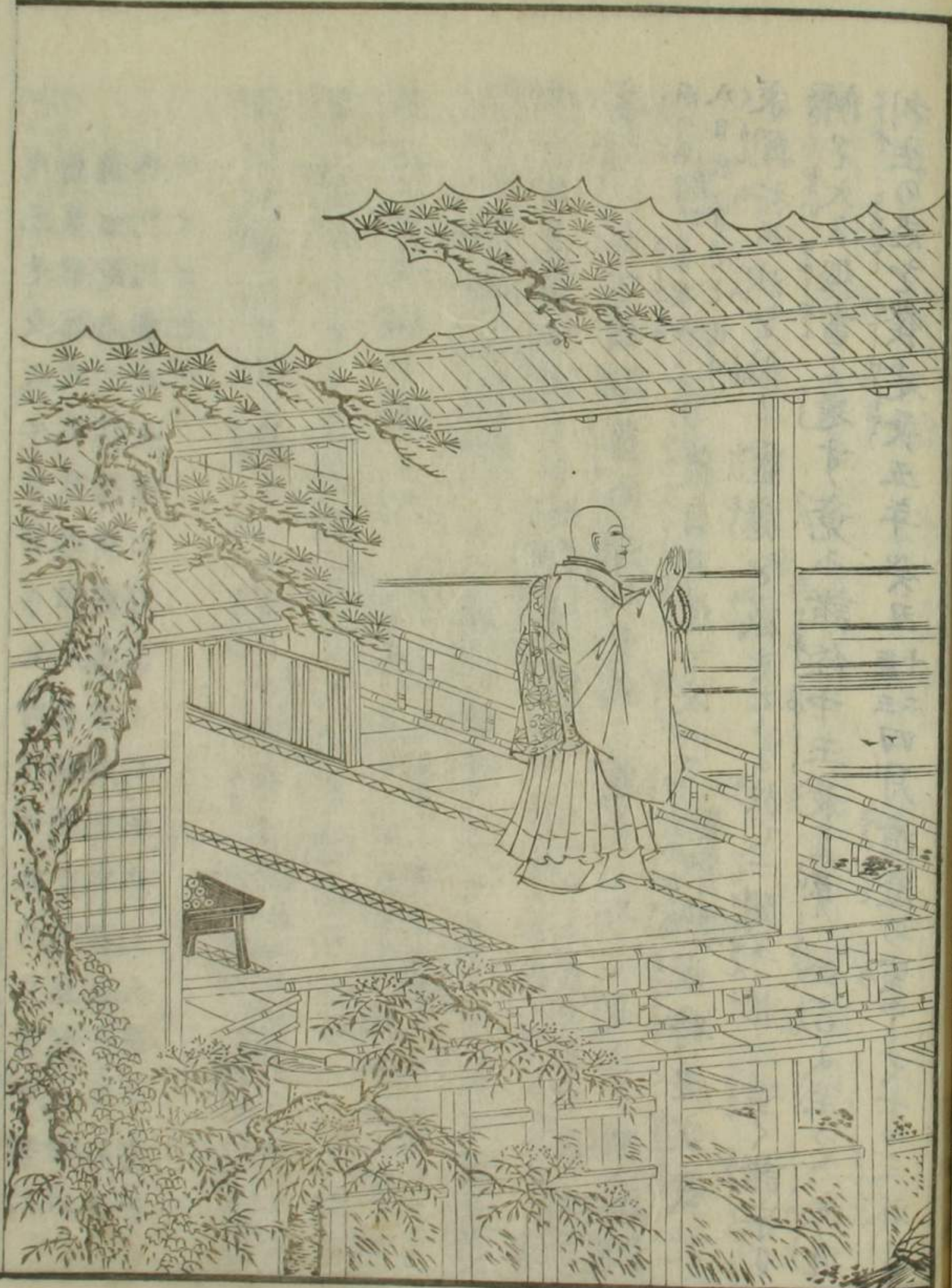
講一畢 我臨終の期 硯水と臨滅度時の影を彫く 佛像経卷等と集り 國論を

祖師一代の妙符の秘記を著し 旅立御影を彫く 此池上より十月十三日此地に

大老僧等 其項宗仲居士の像を造立せんとす 宗祖日蓮大士石塔 左の方

規則 上人是を其項宗仲居士の像を造立せんとす 宗祖日蓮大士石塔 左の方

頂の池 上右 佛門大志 宗仲墳墓 同所右の側 朗賢院日宗聖人弘安



建長五年四月廿八日
時蓮上人房州清澄寺
少旭日向ひ初
題目の七字と唱へ
多八校文ふるまへり

民況是長久之世昇平之時因茲乃今普叩檀門
廣募樂施正欲報佛祖之德酬國家之恩諸人傾誠
萬方致志一振鶴樹寥重與祇林衰微人々入清
本門同樂於長遠之壽箇々到彼池上共遊乎清涼
之日者也

宗祖日蓮大士姓ハ藤原父ハ貫名次郎重忠三國氏トモ重忠ハ遠州刺史

母ハ清原氏あり一ハ昌山の氏族トモ山崎貞應元年壬午二月十六日

房州長狹郡小湊左近衛五位兼良の嫡子トモ生る

創立大士降誕の地ハ一字を十二歳清澄寺胎ニ託すと夢とて後發む故ハ善日曆と各つく入て真言の業と道善小

學び名を藥王曆と云宗要抄天福元年癸巳五月十二日初て寺ハ入とあり清

嘉禎三年丁酉歲六落飾漆衣受戒蓮長ト号シ是生ト唱ム道善

八日出家宗要抄ハ十月のちのち後自日蓮と改む又靈夢の應ハ或時虚空蔵此

求聞持の法を修靈應を感モ於て一蹴千悟普く諸宗ハ

濟大ニ徑書ハ通ス竟ハ諸經中王最爲第一金言ハ至大道

利生の志を發建長五年癸丑十歳三四月清澄の室中て七日三昧入

入同廿八日旭日對ハ掌を合せ始法華題目の七字唱ム

權輿後住同七年乙卯註法華經著

又文應元年庚申十九歳立正安國論を編

七月十六日宿屋左衛門光則就是を前相州平

時頼捧然一とも其書諸宗を誘是憍慢の文あるをゆ

是とと却て大士を豆州伊東ニ謫せむ時弘長元年

辛酉五月十二日なり

癸亥五月廿二日牒を下して大士を救を依て復鎌倉ニ歸る

同十一月十日同國小松原後を東衛左衛門平景信大士の化を惡む

手書の妙法一本を富士の巖中入又同六年己巳文永八年辛未早

兼倉靈山嶺至至雨を祈らんる題目をとく官議して云く日蓮事を佛

法は托して國家を乱さんと罪まらふ死の中よりと依く同年
九月十二日執權時宗頼綱は數百の兵士を添く松葉谷を發向せしめ
大士をわらめ捕り又日朗等まへく六人の輩を地牢に入其夜龍口を於て
大士の頸を刎んとせしむ 固懸村寂光山龍口寺其田跡なり此時一老嫗あり爵を
世俗の口碑に傳へて其口説は 靈威あるを以て 執權時宗大に驚死を宥め
此老嫗は稻荷の神也と云ふ
佐州の謫を 鎌倉より高祖を免すの使者と龍の口より怪異を告んとする使者
又同十三日本間重連の依智の家に至り其夜辰星庭前の梅樹の上は降る光を
越つ其靈と旗し星極山妙典寺と云同十月二十八日佐州松崎は着船あり其海上
角田の水面中へ高祖掉をわらし経題を畫し少くは文字の象皮間は微く自ら龍
蛇を動するの勢ありて呼んで波の題目と云ふ又同年十月朔日大士佐州大野の
家原の祠堂に入霜雪を犯し翌年五月十六日信越を以て大士向答を 同十一年甲戌 十三再ハ靈威は
るありあり 遂に執權時宗大士を赦を依三月二十六日鎌倉に入
同五月十二日甲州身延山に隱栖せんと鎌倉を發し同十七日かこふ
移り草庵に入 其先同年五月二日王府より護法の牒を下し又其項
大士石和川ありて徑石を水底に投し鶴齋の鬼を化せ
其地幽邃なりとて四方歡ひ慕ひく来り集る者雲の如し

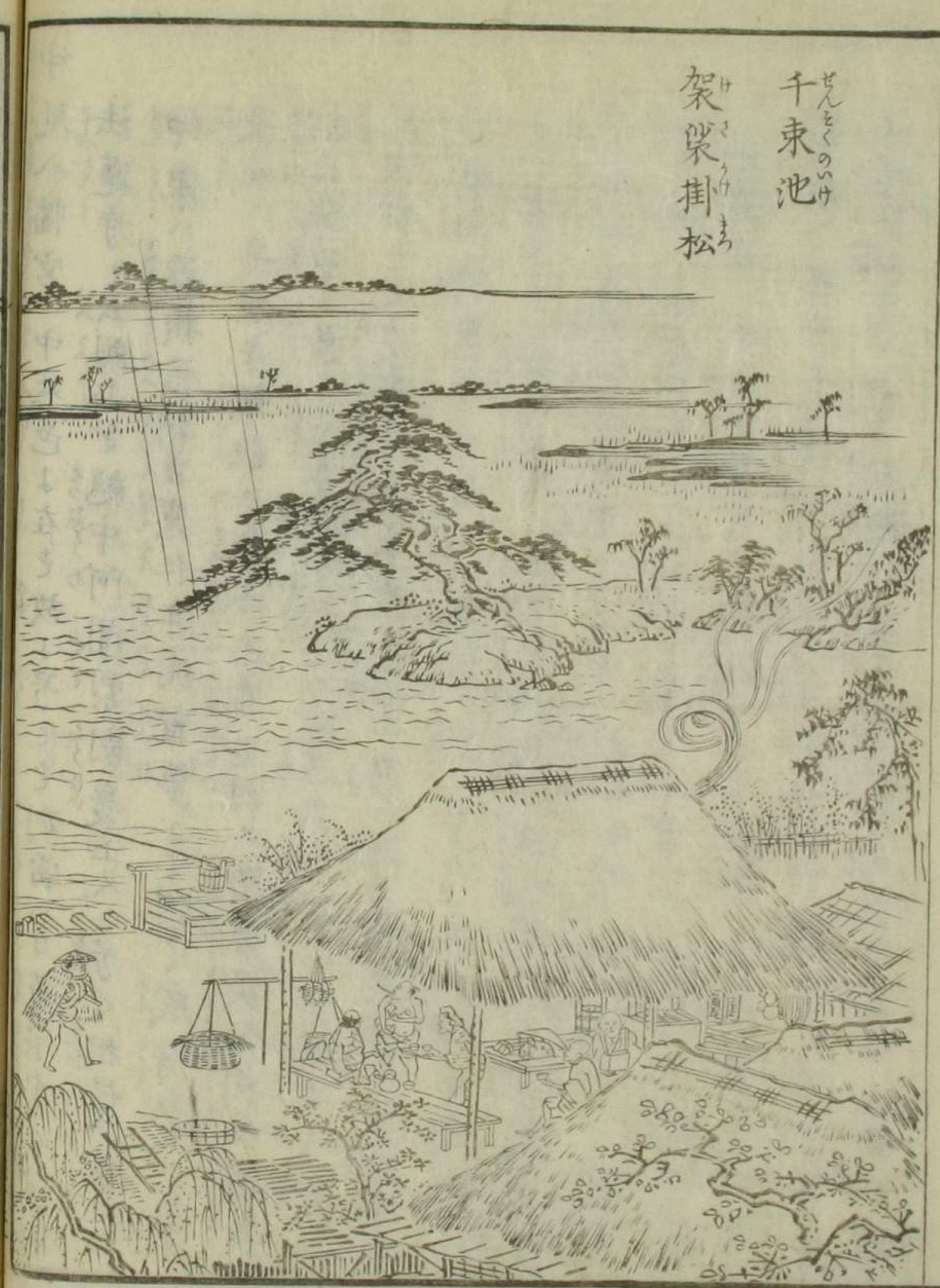
故に其室狹くして衆を容るるありあつてを依別の一室を建て身延
山久遠寺と云誦經觀念十年一日のゆ 其項七面の神一女と化し来り
如道を守護せん事を誓ふ
弘安五年壬午宗祖齡六十一其秋微疾を患ふ思ふ旨ありとて
同九月八日身延澤を去り同十八日此池上の地に移り右衛門大夫
宗仲の宅に入 宗仲は後家と云
寺を今の太坊と云 同廿五日より安國論を講しあり
講畢るの後衆は告て云く吾三七日の中は化せんとも悉達太子を
技提河の辺わく八十歳の時涅槃に入らみ我も又當國田波河の辺
ゆき滅せし若地震せば是其期ありとあつて又日朗は語て曰く
吾入滅の後墓所ハ必身延山に築へしと云嘗て十月三日親ら
本迹大要を書し立像佛 弘長元年大士豆州瀨居の項和田房室より
居る身延の項主伊東八郎左衛門尉朝高居士より
附隔せる所の立像の釋迦なり世に隨身佛と稱せ此年安國論官牒二本を
海中より出現する附屬書注釋は詳なり今洛の本國精舎あり 安國論官牒二本を
併せり日朗は授与あり 官牒二通いま考へて按て文永十一年二月十四日勅氣
赦免の状と同年五月二日護法の状とをみるありん
同八日上行附屬の法門を弘めん為る六萬恒沙の眷屬は像り正しく

上足六人を定め、所謂時持日興且衆も命して云く吾没
後六子を見るも猶吾を見る如くせよとわたり同十二日諸子問訊せ
遺訓傳々然り既中侍者をもく自ら筆を所の大曼荼
羅を懸し焚香散花持誦愈つと十三日黎明地震諸
弟子皆来り集み大士衆と供し方便品を誦入佛知見道故の
句に至り睡りぬ寂を示し或人云く壽量品の伴に至り本門寺
其田地中往古の宗仲の宅地なり
世壽六十一法臘四十六華儀禮は遵ひ山中は閣維を林樹變衰
しく人を鶴林の想あつむ同十六日又二月遺骨を収め身延
山は送ると云以上宗祖傳の要を採り記す
の六士編述の書凡四十有余部
千束池 本門寺の西一里余を隔てあり長東西へ三丁をわたり中南
北へ五十歩をわたり土人云往古此池は毒蛇住り後七面を祭る
とのみ又池の側は日蓮上人の腰を懸ひいと称する古松一株
あり

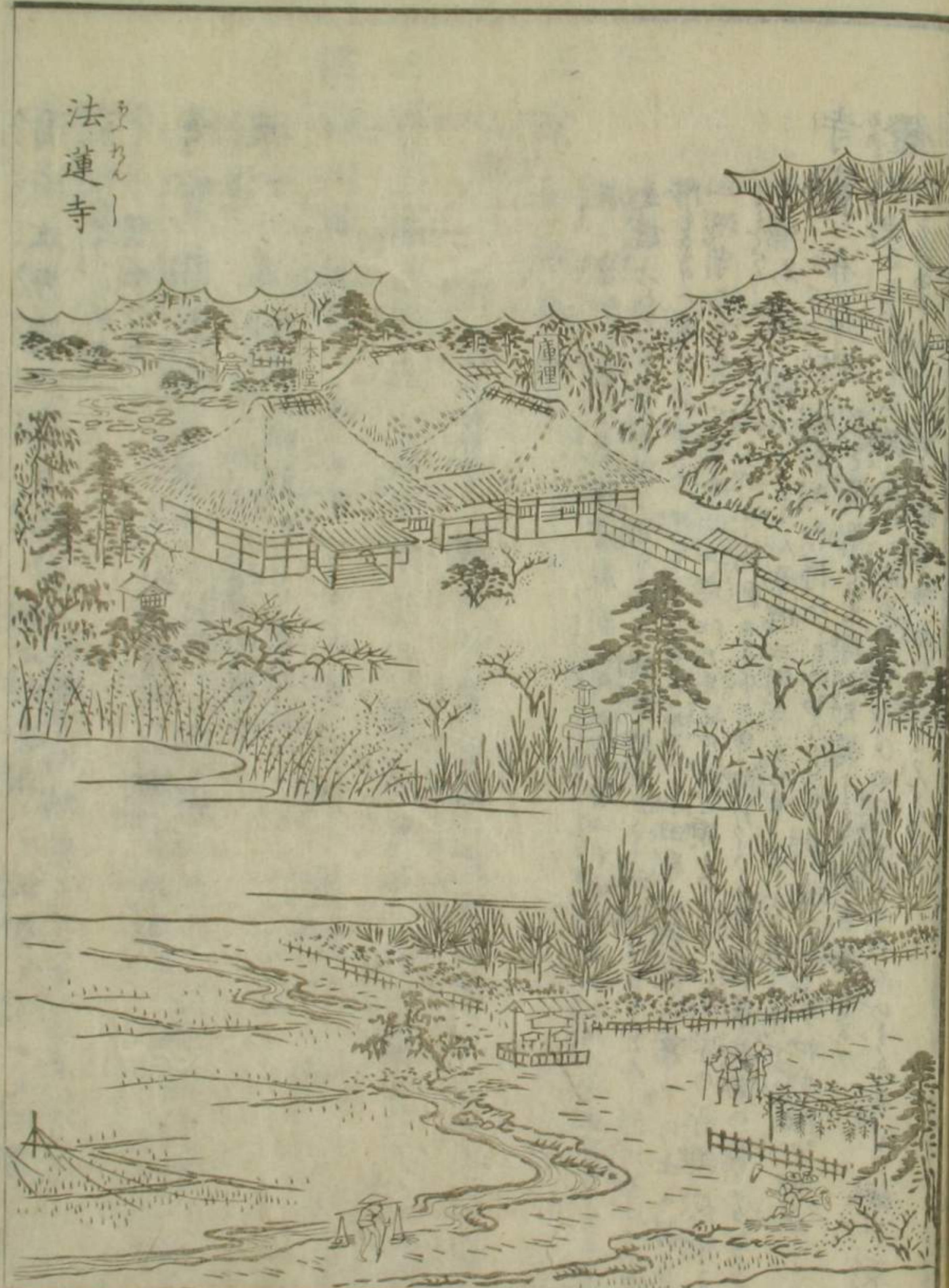
中延八幡宮 中延邑に在る故号とせ別當は日蓮宗にて八幡山
法蓮寺と云開山を越中阿闍梨朗慶上人と号く相傳ふ當社の
神像は源頼信朝臣寛仁年間靈夢よめり感得ありといひ
長元三年庚午朝敵千葉介忠常追討の時源頼信朝臣頼義
朝臣陣中に移り敵を亡し其後永承六年奥州安部頼良
乱を發し又清原武衡家衡反逆の時も共頼義朝臣義家朝臣
鎮守府將軍とて奥州へ發向し亡し此御神の衛護よ
ある所中々崇信浅く累世源家は相傳をく小荏原郡の領
主荏原左衛門尉義宗と云人あり姓八源中則八幡太郎
義家朝臣の遠裔代に此地を
祿を依りて中延を氏とし又此所は館せり康元元年丙辰鎌倉に於て
日蓮大士の宗化を聽直は檀越とあり其家は此神像を蔵む嘗
靈夢を感するの後文永年間日蓮大士を請し法華經に
法味を以て一社を勸請しなり自記を作して其子左衛門尉



千束池
架架掛松



法蓮寺



中延八幡宮



有成次男徳次郎と与ふ 徳次郎薨逝して朗慶と号く九老僧の一員化す則當寺の開祖 正中元年甲子二月二十日

寺寶頼義朝臣讓狀附屬あり 義家朝臣八幡宮の神像を 荏原左衛門尉

讓狀一通是れ同一神像を越中阿闍梨へ

慈眼山萬福寺 馬込村とありと曹洞派の禪林にして相州の徳翁

寺は屬を本尊ハ自然銅弥勒觀音勢至一光三尊なり中尊長二尺余左

相傳ハ當寺ハ梶原平藏景時創立の梵宇なりと云靈

牌并墳墓あり右ハ一尺を

按ハ靈牌の表ハ萬福寺殿前三州大守香山不捨大居士正治二年正月二十日と

疑ハ少くも後世造り所あり鎌倉時世法益ありをあり大居士と云

附ハ三河守と云あり又梶原助五郎江戶馬込の地を領せり北条家の幕下の士ハ梶原

寺僧あり證ハ傳ハるハ三河守景時三河守に任せり古書ハ所見ナシ

寺寶布袋鞍 梶原氏所持の物なりと云前論ハ布袋鞍尚松を携がし

燈 今世ハころくと云燈ハ形ハ角ハ好禪ハ甚古物なり

陣貝 右大領頼朝卿富士の裾野ハ御狩

梶原氏肖像 座像ハ長一尺五寸と云鳥帽子を戴き大徳の如きを著せ

證文一通 右大領頼朝卿建久七年此地ハ放鷹あり時當寺

馬込八幡宮 同所より三丁と云坤の方也上道ハあり

梶原氏宅地 同所通を隔て向ハあり今農民の園中ハ入土俗

景時の館と云是れ三河守招ハ助五郎等の宅地なり

鳳来寺 峯の薬師 峯村とありと峯照山正善寺の持りて鳳来寺

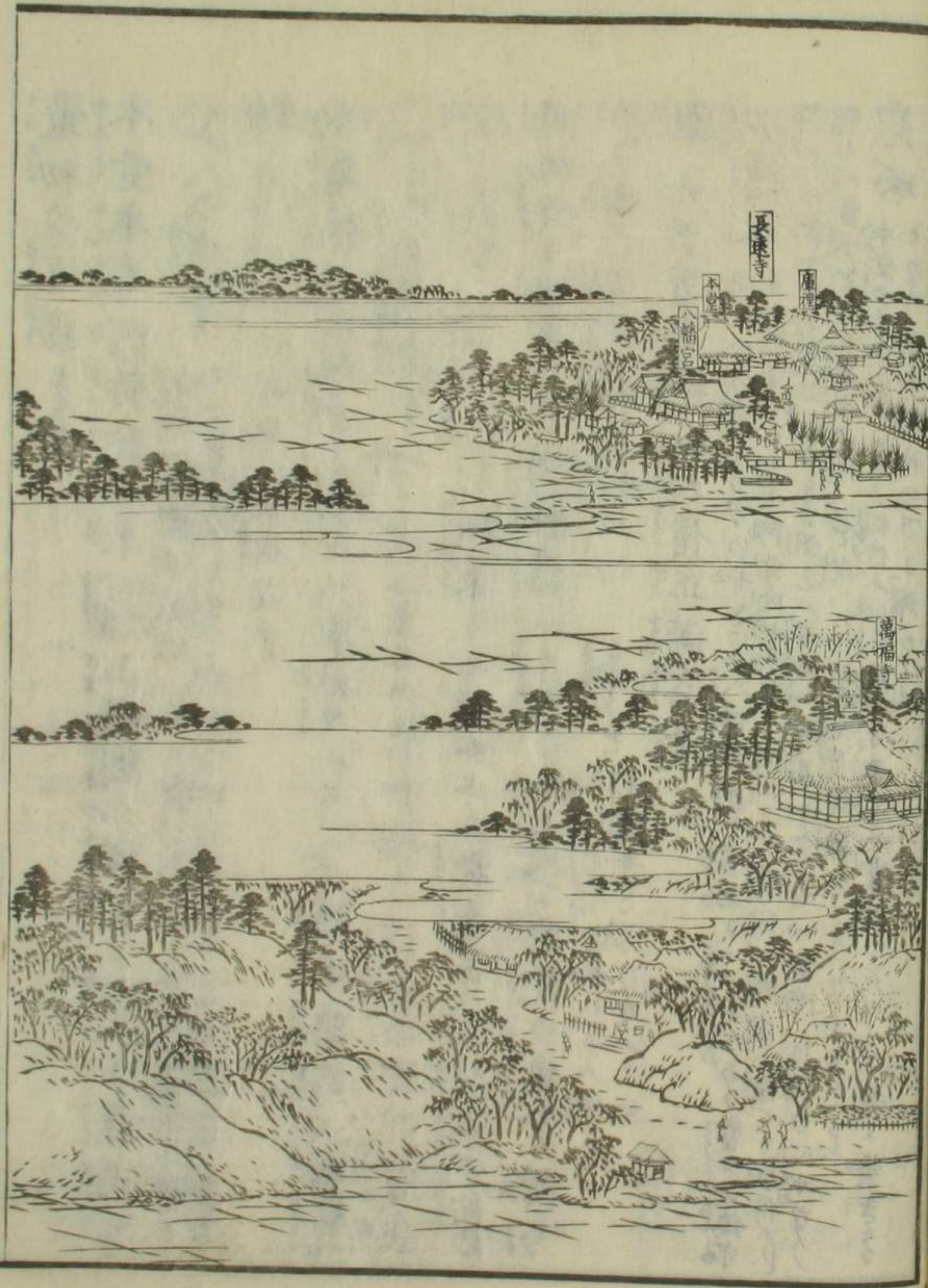
峯の薬師をうのせりと云

大金山光明寺 宝幢院と号を新田明神より五丁北此方

鶴本村とありと西山派の淨刹なり上古ハ真言宗 寛喜年間草創

中々開山ハ善慧上人弟二世ハ記主禪師良忠なり良忠ハ鎌倉時

仁治の間四年當寺ハ住を是より後鎮西ハ佐相續せむ 當寺ハ開東淨教勸寺の権輿念佛弘通



萬福寺
馬込八幡宮
梶原屋敷



最初の道場

本堂本尊阿弥陀如来 立像三尺山城國八幡村に住むる康尚と

人の作なり 康尚ハ美濃守康信のひひ人の二子にして八幡大菩薩の作現あり

額 大宝王 弘法大師 真跡なり

本尊縁起云閑山上人五十三歳此年六月九日鎌倉鶴岡八幡宮へ

一七日の間奉籠あり然り同十五日の夜社檀僧形の弥陀如来出

現しひ上人へ十念を相兼しひぬ上人歡喜ありて翌朝下向の

時社外に至られり異僧傍よりありて上人は弥陀の像を附与

あり依て武州鶴木村へ迂し系を 光明寺と号けり云

額 光明寶林 縁山大僧正満空筆

功德水 同本堂の前左の方の井の邊に八幡鎮座の靈地あり必名水あり當寺の鎮守

靈像を當寺の御堂に仰せ置る然り本堂阿弥陀如来なり閑山上人鶴岡八幡宮へ詣りて感得あり

荒塚 本堂の前左の方の相傳は江戸遠江守雷火は撃れて死せし塚に築き置る

觀音堂 同境内堂の右あり縁起云善惠上人津國四天王寺の聖靈院あり

善惠上人宇都宮實信坊は命じて此本堂を當寺とす又靈像を感得あり又靈像は任せ

堂と構置しは安置を北朝の延文四年新田左兵衛佐義興竹澤右京亮おひし

遠江守の謀計は降入り矢口の渡の舟中おいて一族良等と共に水中に溺死す

の跡なき雷火墮りてなり作澤江戶一族を悉く撃殺す殊は矢口の渡に雷火

異を免れんとす此本堂を祈念し雷火の難を道々の奇特を蒙りて其項を像の

故に土俗雷留觀音と稱す

當麻曼荼羅 本堂の後の壁上に糊を西山上人信は數敷の曼荼羅を圖繪し

寺に有る兼二とて西譽上人曼荼羅鈔に此曼荼羅の圖中品下生の蓮華青

蓮華となり三草計生あり人々奇異の思ひを起し道を諦み未だ是を拜す

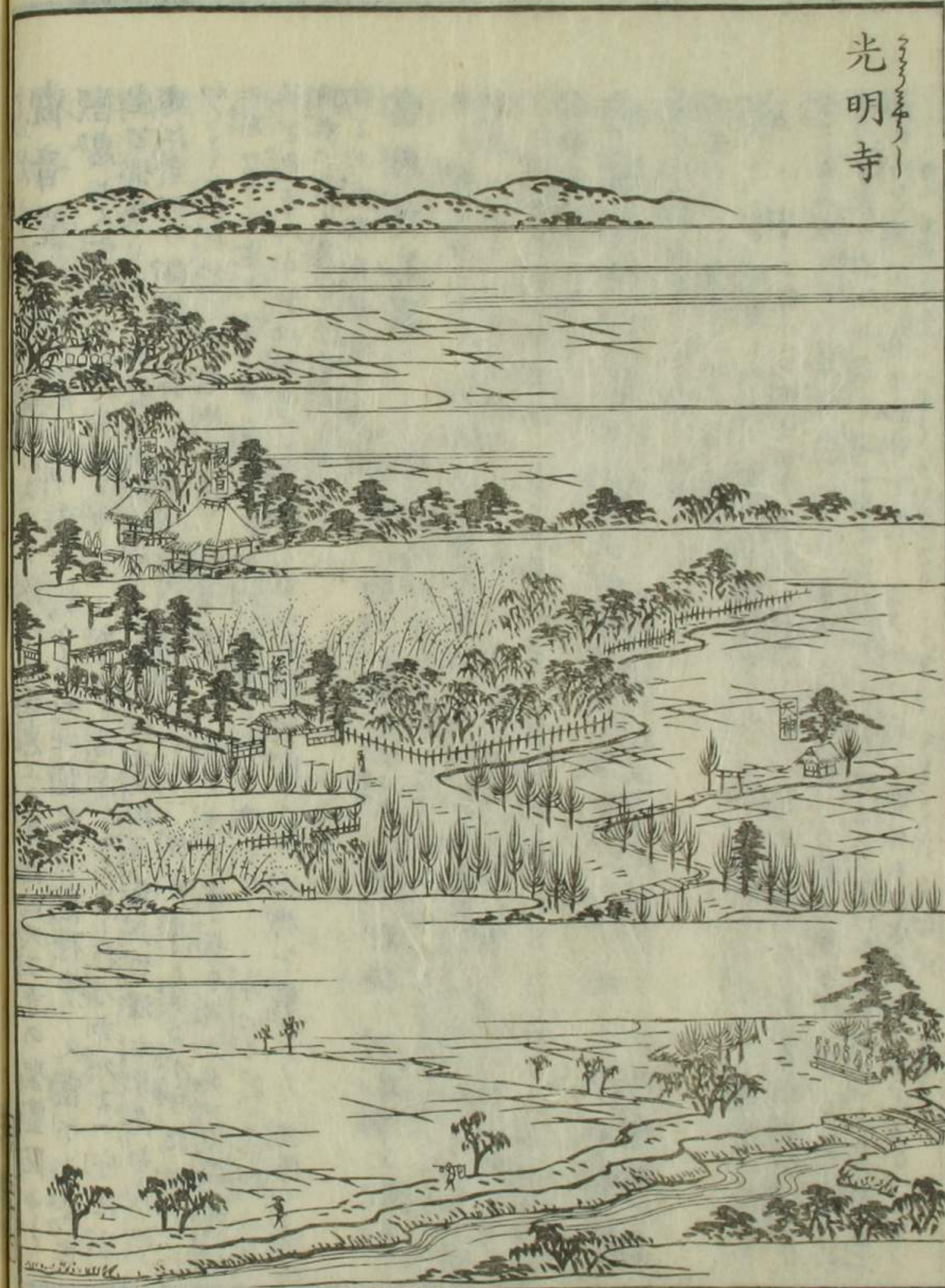
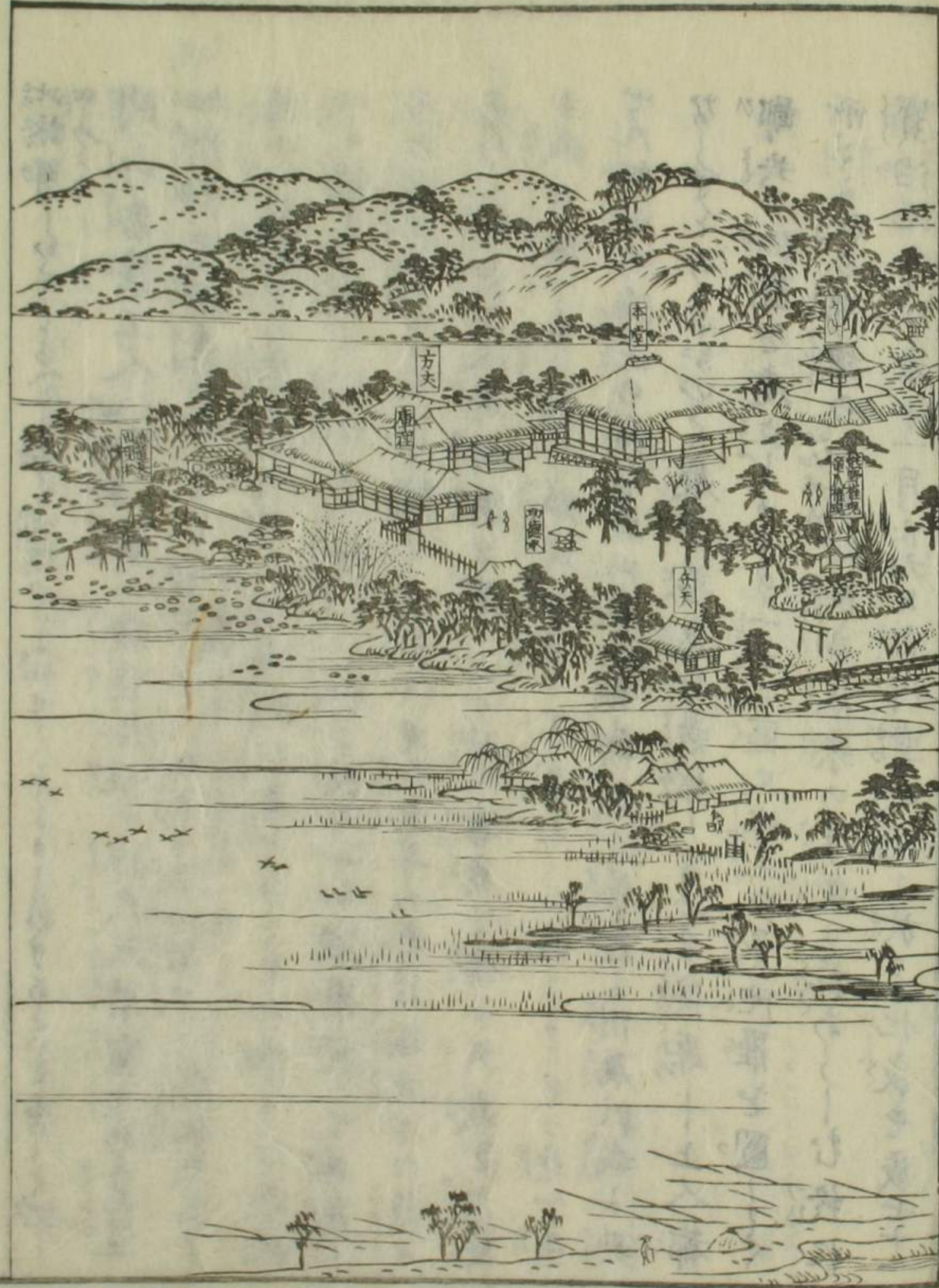
善導大師影像 青善導大師自木像二軀を作し海に投して云く有縁の地は

置を今猶存せり 御頭ハ此地に 漂流せしハ當寺に迂しなると云

扇一柄 善惠上人あり 宇都宮實信坊は与へられ扇なり天福元年善惠上人歳手

下りて然り上人實信の遺品ハ奥州に至るハ白川の淵を渡りて後色しハ光基不

見の心を謀り一首の和歌を持し入所の扇は書掛あり實信坊はあまひいとあり



光明寺

此詠解し... 古く云... 住せ... 記

開山善慧上人 初解脫 諱ハ證空俗姓ハ源氏天曆聖主の皇胤

加州刺史親季の子なり 證空と云ハ父親季の法名證玄と 治承元年丁

酉十一月九日誕生久我内大臣通親公養て子とを幼齡より菩提

心に住し故に吉水上人 源空の許に投て十四歳薙髮して善恵と

号を性俊逸中て一を聞て千悟に建久九年の春月輪殿下の請よ

よ月と源空上人選擇集を著し時にも善恵と偕に文義を考定

を或時殿下云く師の滅後此書不審あは誰よりて是を决

せん師云く浄土の奥旨又此書の要義悉く善恵に附属に我に異

ならずと云くおのく殿下善恵を崇信しあはる甚厚し上人都

鄙共は伽藍を建立しあはる一十二區又浄土の曼陀羅を圖し

所は収め佛經の印板を削き未來の學者に益あはるしむ終に

寶治元年丁未十一月廿六日白川遺迎院に於て化寂を歳七十一

西山善峯寺に居り盛に宗教を弘通あり故に世に西山人

と稱し其の... 浄宗西山派の大祖と稱せ

當寺往古ハ大伽藍中て關東の高野山と稱し衆人先亡并に逆

修等の石塔婆を建參詣の人も多かりし故に今も古き

石碑石佛の類ハ此所彼所ハ存在せり 寺の大門より六丁東の方

不浄の時に崇ありとて田畠耕作 護摩堂屋敷と號する地あり

光明寺池 光明寺の南に添み往古の矢口は川筋ありしと云り今ハ

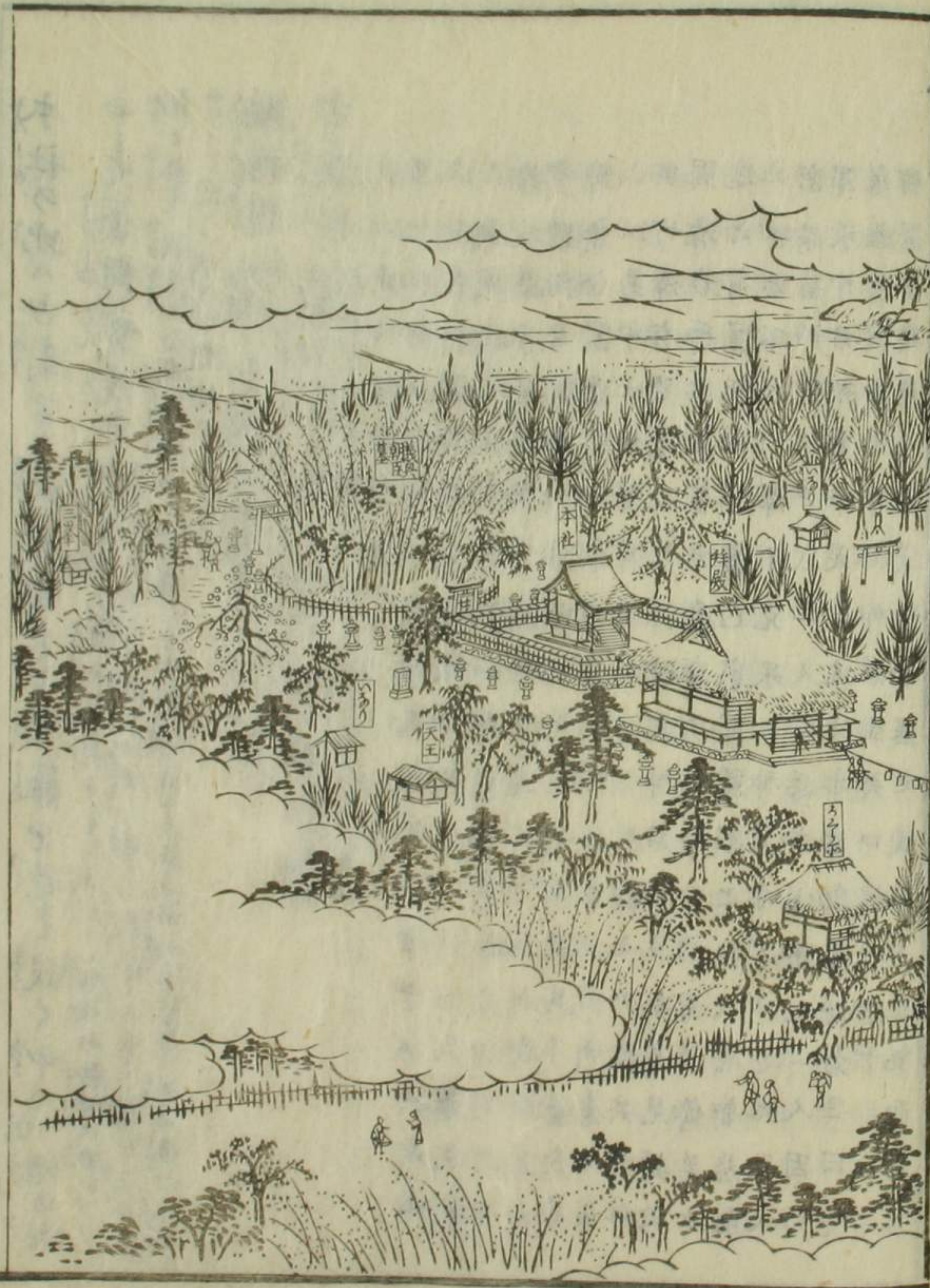
水流替りて南の方へ寄て流る池の長さ東西貳百余間幅ハ南北へ

五十間とありと云はる 里老傳云記主禪師當寺に住職たりし時

新田大明神社 光明寺より五丁南の方矢口邑にあを別當ハ古義の

真言宗ふして真福寺と号し高畑室幢院は属を祭る所の神ハ

新田左兵衛佐義興朝臣の靈あり十日を縁日とて拜殿のを徑堂に



新田明神社
真福寺



本社の地ハ古廟なり則其田々々々瑞籬を造り設く中ハ一堆の塚
わしく蒼樹繁茂也此ハ昔の奥州海道中往古ハ廟後の耕田の地なり
沼と称せ長凡三百間半横四十間或ハ三十間程ありとのみ土俗のそく題ハ昔の川筋
鞍掛榎社前あり至ての老樹あり
古廟碑社前あり至ての老樹あり

竹衆澤密止進國與山鑣帝將王北昔矢
澤難來請神有若得再際逐之澤嘗事清爲副是足延文卒其族新帝于京於
預襲使君山不麗既而事舊君願澤使所謂效神君曰圖之次使以族新帝于京於
與舟分納使江戶澤不克己果而因神害亦不猜二且人曰有竹又懼女於
人謀卒是氏二人人比焉勸逐之倉且人曰有竹又懼女於
舟神三二人人比焉勸逐之倉且人曰有竹又懼女於
而君人比焉勸逐之倉且人曰有竹又懼女於
塞至比焉勸逐之倉且人曰有竹又懼女於
使口焉勸逐之倉且人曰有竹又懼女於
待津勸逐之倉且人曰有竹又懼女於
于從襲逐之倉且人曰有竹又懼女於
岸者錄之倉且人曰有竹又懼女於
既十倉且人曰有竹又懼女於
而三且人曰有竹又懼女於
神人曰有竹又懼女於

陰去其人衆焉而中流舟人伴失墜船具於水沒岸而求之
噪而腸君而而君悟既不可爲乃怒呼曰吾爲厲報女自
屠其腸君而而君悟既不可爲乃怒呼曰吾爲厲報女自
冥其神君而而君悟既不可爲乃怒呼曰吾爲厲報女自
祀其神君而而君悟既不可爲乃怒呼曰吾爲厲報女自
年寬保甲子今四皆餘人見猶懼已威靈不取書篆額乃
又使元喬擡子守山叙其源賴寬遣使立碑自送其辭曰
霹靂激兮電揚光龍車驚兮玄雲翔兮神之至兮欲亡
常儼如兮在兮燿兮中央被犀甲兮張彫弓兮怒兮奮
鬼雄仇且殪兮懟兮未窮將以儆兮茲壽宮蒸有醴兮
米蘭蕙潔余祀兮神無儻兮茲壽宮蒸有醴兮
兮永不替水澹兮神無儻兮茲壽宮蒸有醴兮
和兮天門霽顧余降兮清以之往又來兮羗可齋良辰
延享三年春三月守山源賴寬篆平安服元喬撰
烏石葛辰書

新田左兵衛佐義興書簡一通

先度以內書仕仰出ゆと丁寧申通沙幸色異
于他にむらひ仍為内感申使一交治了可補申下
跡を以て下知の内面同く九州へ候你申申忠良

作後おぼはるる為の要の終焉細く是三夜寺東
貴可令侍達路のりて洋々

十月十一日

波多能若もな

義興判

其の兵器古陶器の類ひ寺室にありて是を略す
太平記云 新田左兵衛佐義興ハ 義貞の妾服の子也 上野國小居より
家志あるは上野の兵也 此義興と大将は取立三万余騎あり 共々鎌倉を責落し
吉野へありて先帝威感あり 義貞の家を興せし器なり 是は義貞の
名を徳壽丸と申せし元服せし新田左兵衛佐義興と召れし器なり 是は
智謀衆は秀丸ハ公平七年むす野合戦あり 鎌倉の軍や大敵を破り万卒ハ
當り古今 父左中将戦死の後ハ越後國にありて 武藏下野の國
獨歩なり 中あく新田家は志を寄る輩竊に音信を通しこれハ兩國の間
其勢漸く萌せり然も此の鎌倉へ聞えられハ管領足利左馬頭基氏
畠山太夫入道道誓大に驚き義興の所在を尋く度く勢を向ると
之も義興事とせしむて打破り千變万化まて人の態あはれ

故も是をくあり道誓潜り竹澤右京亮と謀り竹澤を義興
小下りめ夫より後種々の毒計を用ひ義興を討んとせれども未時
至らむ 竹澤右京亮ハ曰義興むす野合戦の項其の屬は忠ありこれと
竟も美女をくく心をもて無二の味方と思はるる迫ありてハ
竹澤偽り鎌倉を亡さん謀を運り大に義興をせりてハ義興
其意は随ひ延文三年十月十日の晩に後僅に十三人忍んでこぼれ
發向を既も矢口の渡り至り船に乗せ竹澤先謀をもちて故も
渡守諺て櫓楫を取落し是を採んとし偽り水中不入兼く鑿
置りり船底なる二川の穴を塞し水を抜られハ河水注き入り其
船沈むとむる時向の岸なる江戸遠江守に伏兵河辺に起り関をひく
る小たき義興初其謀を察し大に忿て自ら腰掻切ても失ふハ井
彈も續ひく自殺し其後世良田右馬助大島周防守ありハ由良
兵庫助同新左衛門尉等ハ引組て差違ひ又ハ互に首を撥落し



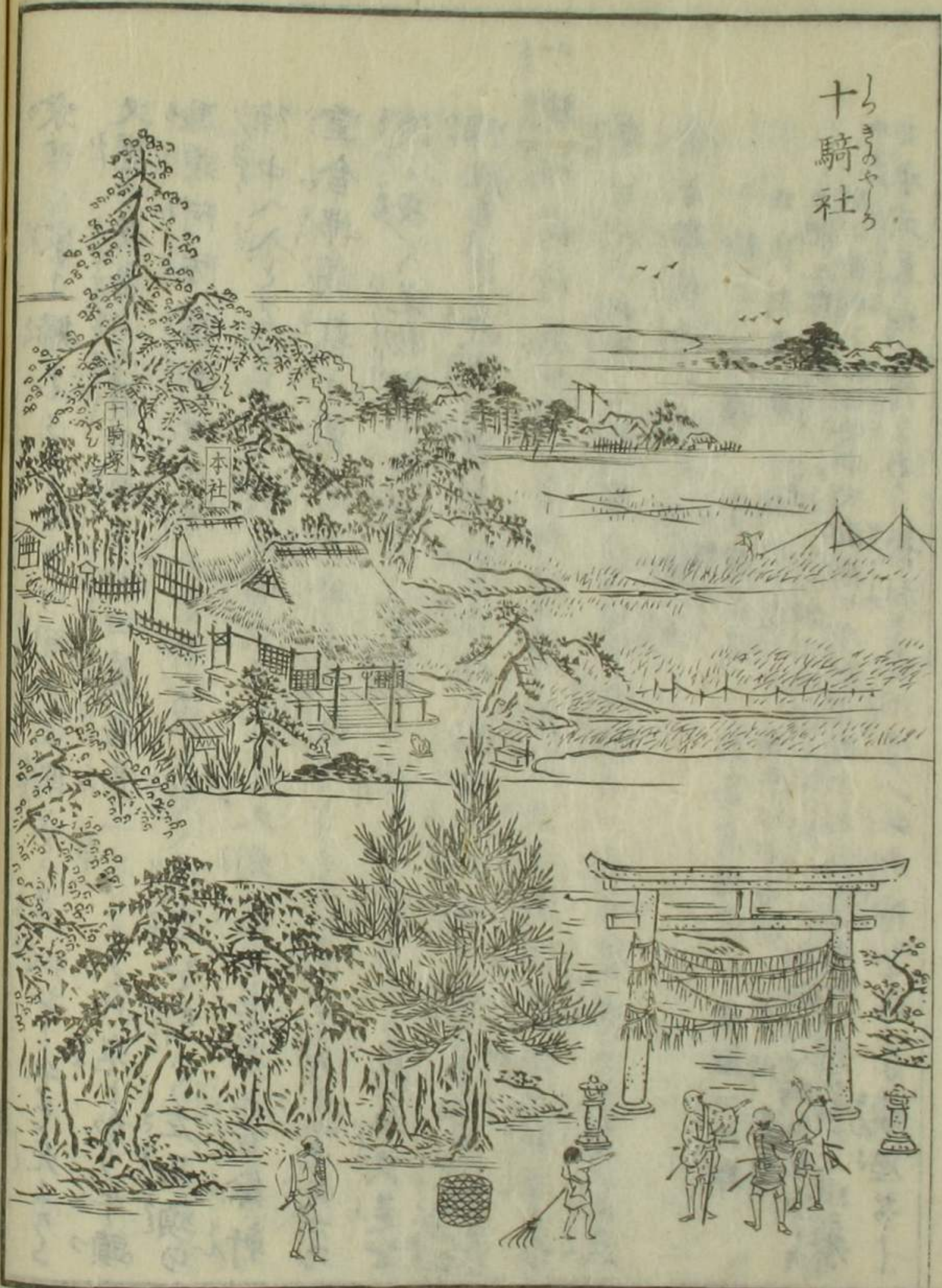
ヤムチのこ
矢口古事



てそ死しらるる土肥三郎左衛門南瀬口六郎市河五郎三人ハ
水底を潜ひそりて向むかひの岸きに上あり敵三百騎てきよりありあひ終つひに
主後十三人しゅご太平記たいへいきの書しよに討死うちしの人ひと主後十三人しゅごとあれと義興ぎきうと共ともに討死うちしを
其後竹澤及あひ江戸の両士等りやうしとうこりこり其首級しゆけいを尋出たづね入いる間河
なる基氏の陣ちんへ馳参ちしんし實驗じけんを入いる其後同十月廿三日遠江守ハ
今度賜たまはる恩賞おんしょうの地ちへ下くだるむと日暮ひぐれ及あひ矢口やぐちの渡わたりたる所
雷らい頻ひん々々鳴なる雷らいききられハ懼おそる馬うまを走はせとある辻堂つじだうに入いらんとす
此この辻堂つじだうと云ハ鶴木光明寺つるぎくわうみやうじ折をり黒雲くろぐも一ひとむ江戶えどの頭かぶの上うへに落おつとす雷
觀音堂くわんおんだうのみありとす折をり黒雲くろぐも一ひとむ江戶えどの頭かぶの上うへに落おつとす雷
電でん耳みみの邊へに鳴なる閃せん々々れハ餘あまり怖おそる後ごを吃くと顧くる義興ぎきう
火ひ城じやうの鎧よろいハ龍頭りゆうづつの五枚ごまい甲かの緒おと縮ちぢむ白栗しろぐり毛けなる馬うまの額ひん角かく比
生あたふ小乘せうじやう鞭むちと志し打うつ遠江守えんかうしを弓手きゆての物ものは好この燈とうの鼻はな落おつ
下くだりて七寸しちすん計けいなる馬うま俣はとてくわひるひよを乳ちの下したへかけぬ
と射通しやうつうとと思おもひく馬うまより倒たふれ落おつて河絶かぜつとて從者じゆしや共興ともきうし

乗のせく家いへは歸かへりて七日ななひの間水あひは溺おぼれ真似まねとて死しらるる
又また翌あつの夜よ畠山はたけやま入道にやうだうの夢ゆめは新田あらた義興ぎきう長二丈ながにぢやうとあり鬼おにとあり牛頭ぎゆうだう
馬頭ばだう阿防あぼう羅利らり共十餘人じゆじゆじんを前後ぜんごに隨まへ火車ひやうしやを引ひく左馬頭さまのづの
陣中ちんちゆうへ入いるとんくると其日そのひ雷火らいひはかると入間河いりまがわの在家さいか三百餘軒さんひやくじゆけん
堂舍だうしや佛閣ぶつかく數十箇すうじゆかん所ところ一時ひとときは灰燼はいせんとなると是こゝのやうす矢口やぐちの
渡わたり夜よ光物ひかりものゆき往來かうらいの人ひとを惱おこす種しゆ々の祟たたかりたりハ土民とみん是こゝと
怖おそれあひて義興ぎきうの靈たまをい社やしろ奉祀ほうしし新田あらた大明神だいめいじんと崇あがると云いハ以上いじやう太平記たいへいき
十騎じゆしき社やしろ同所道どうじやうだうを隔へて向むかひあり新田あらた左兵衛さへいゑ佐義興さぎきうの家臣けしん十人じゆじんの
靈たまを祀まつる此所こゝも拜殿らいでんのまとて本社ほんしやハ一堆いっすいの荒塚あらいづかのまかり土民とみん
登のぼり瀨明神せめいじんと称なづけ事こと實じつハ先まづ
十騎じゆしきとハ所謂すゐご井彈いだん正忠せいしゆう大島周防守おほしましゆうぼうし南瀬口六郎なんせいぐちろくろう
由良兵庫助ゆらへいこすけ同新左衛門どうしんざゑもん世良田右馬助せらだえますけ市川五郎いちがわごろう
土肥三郎左衛門とへさんざゑもん必上かならずあ八人の名やちひんが平記へいきにあり其その餘あまり今いまも考かうへ
然しかる異本いほんハ松田まつだ市兵衛しへいゑ道みち七しち塚づか壹政いちせい権守けんしゆ進藤しんどう孫六まろむ左衛門ざゑもん等らうの名なあり其その考かう
日本武尊祠やまとむすねのみや傍かたりあり攝社しやくしやとて相傳あひたづふ此所こゝ神かみをある鎮座ちんざなり

十騎社



奉るのハ尤久しとや此地上古ハ奥州への街道や日本武も東

夷征伐の時爰ゆく矢合せあり曰此なりとの

六郷の川を隔て縮毛の地は矢向と云邑名あり

古川薬師如来堂 古川村あり新田明神より東南の方二十丁を

と隔つ醫王山世尊院 安養寺と号し新義の真言宗や

高畑村の宝幢院は属を上古ハ東光坊と号せとなり本堂の額醫

王山の三大字ハ黄檗高泉の筆なり

本堂本尊薬師如来 五尺左右弥陀釋迦二各五尺三寸脇檀十

二神将及び四天王の像も共に行基菩薩の作なり

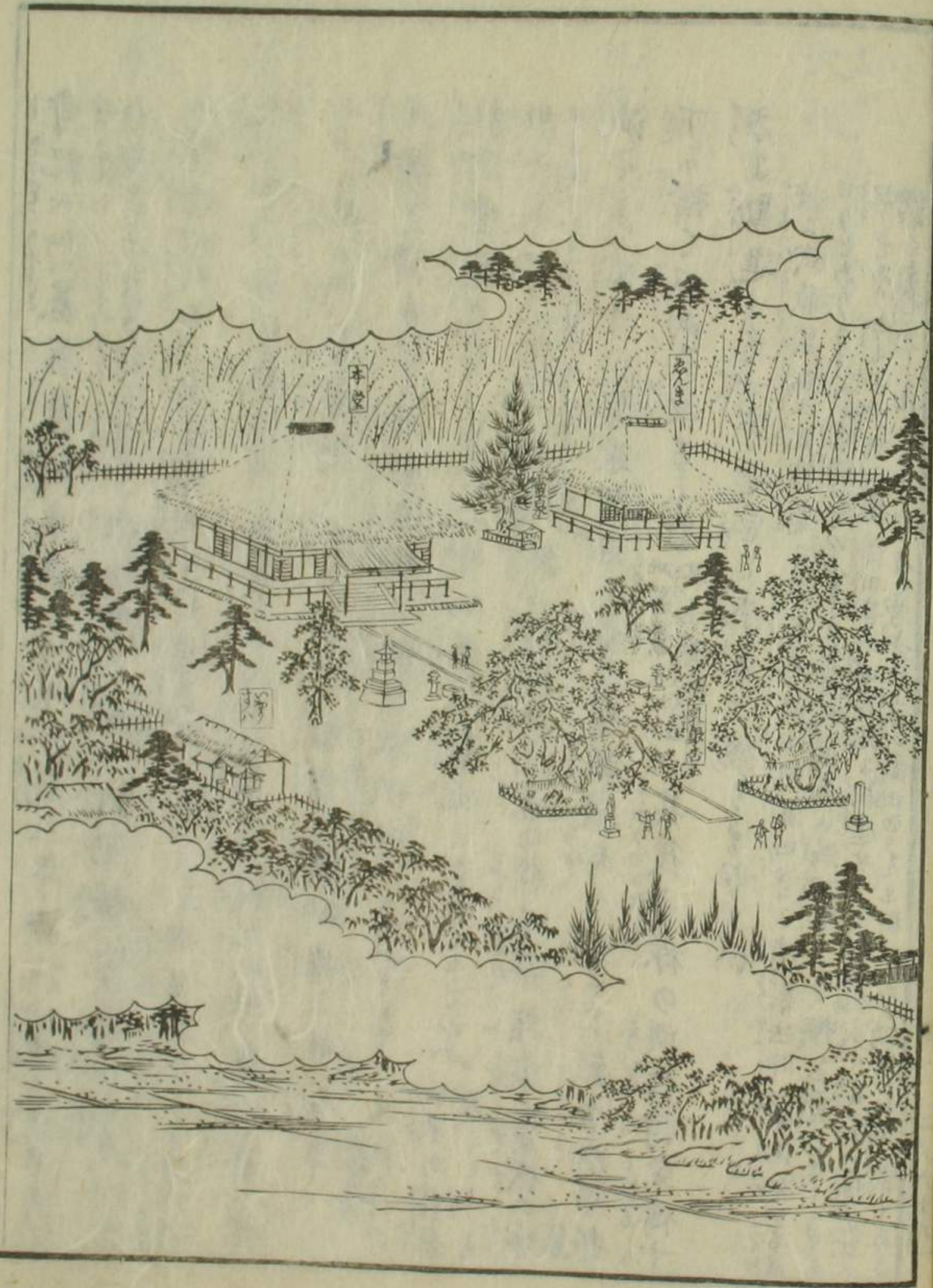
瑞光を現を依く彼本を

以て像材とせり

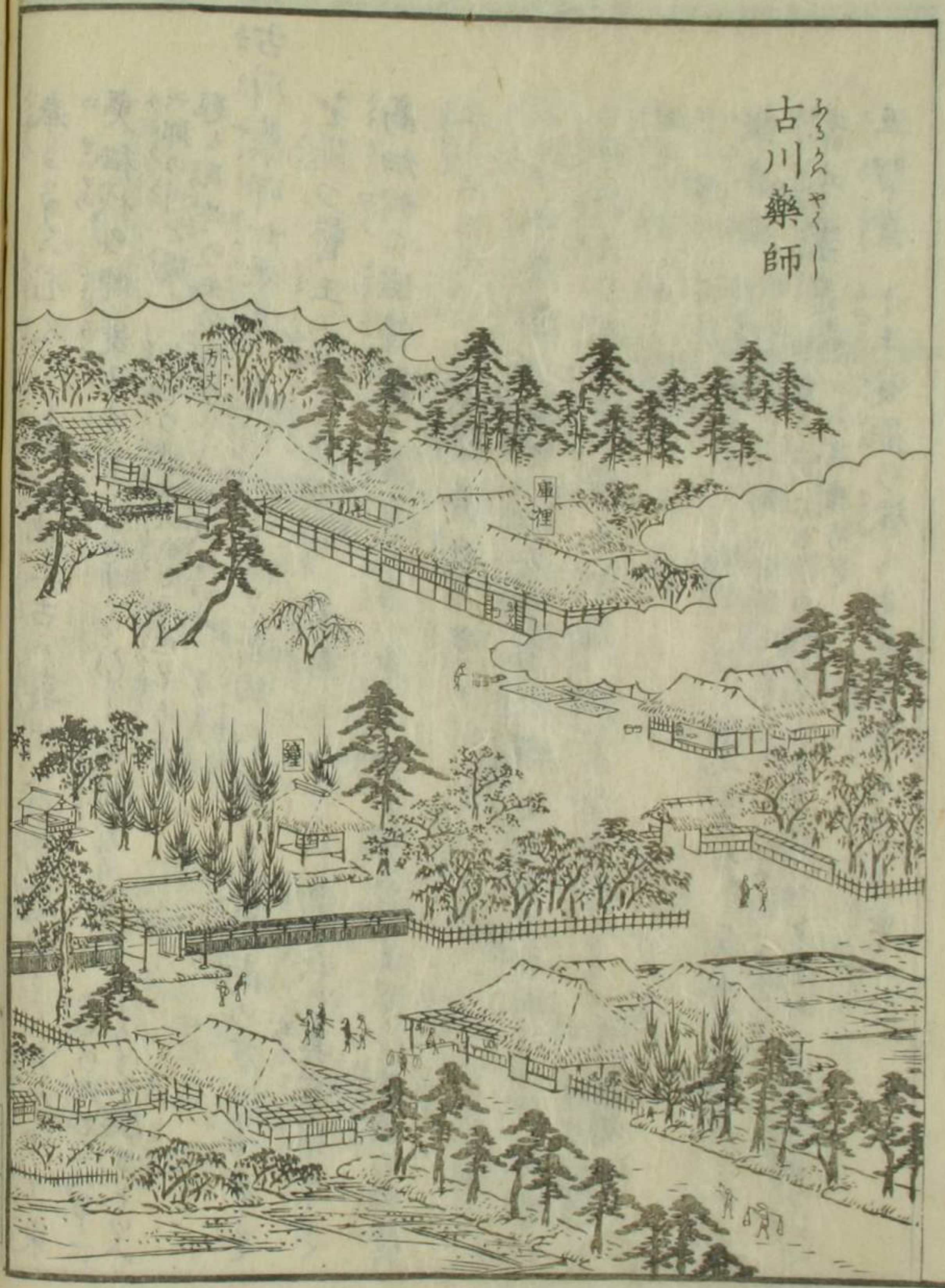
銀杏樹 本堂の前左右に二樹並立し諸人乳のあきもの祈るに驗ありとて此靈

杉本靈泉 本堂の前右の方の椀の下あり眼疾を患ゆる者此靈水を以て

五智堂 十王愛染の像あり本堂の右に並み



古川薬師



寺記云行基菩薩関東遊化の頃和銅三年庚戌此地に至り
今安置せしむる処の本寺薬師佛并脇士弥陀釋迦の両如来及び十
二神將四天王二玉の像共々自造立せしむる安置ありしは遙の後
天平五年癸酉春三月 聖武帝の后王子沙誕生の頃乳味盡させ
あゆみ故に行基菩薩の奏より當寺の薬師佛は祈誓まりく
其験を得る一頃銀杏樹二株を奉納なりしなり又同年の
秋浄堂造立なりし頃七堂伽藍の靈地となれり
婦人乳の必きとの至心祈請ありしは遙の後此地の領主某諸宗貴伏の宗
派ゆへに當寺の繁栄を深く如き堂塔破却し其銀杏樹の根
下は捨て風雨に浸さしむる其罪業よかりて其後永祿の頃住持栄傳十
方勧進し一宇を營み本寺を移ししなり
按武蔵國風土記殘篇に在る原郡満田郷満田寺は清宗法師薬師佛を安置
せりとありし頃八當寺といふなり又同書に満田郷より梅を貢とせしむるも
記しありし今古川村大森蒲田等の辺其地は相應せしむる梅樹多し其根を採りて都下
齋に用ふる者多し其根を考れば上世の満田郷に梅の根ありし梅の根を採りて都下齋に用ふる者多し

なつらん

大綱山光明寺 高畑村あり宝幢院と号し新義の真言宗なり
本寺は大日如来惠心僧都の作なり當寺は保元年間創立なり
厩山を行観上人と号せり

大森 鈴の森は南不入計村に隣り小田原北条家の所領役帳に
淡谷又三郎及び六郷殿此人所領とある中六郷内大森とあるは則
此地のゆかりなり

太田持資平安記行 大森と云ふ森のうけおとせしむる
大森のふたつうけのゆかりありしは是れなり 持資

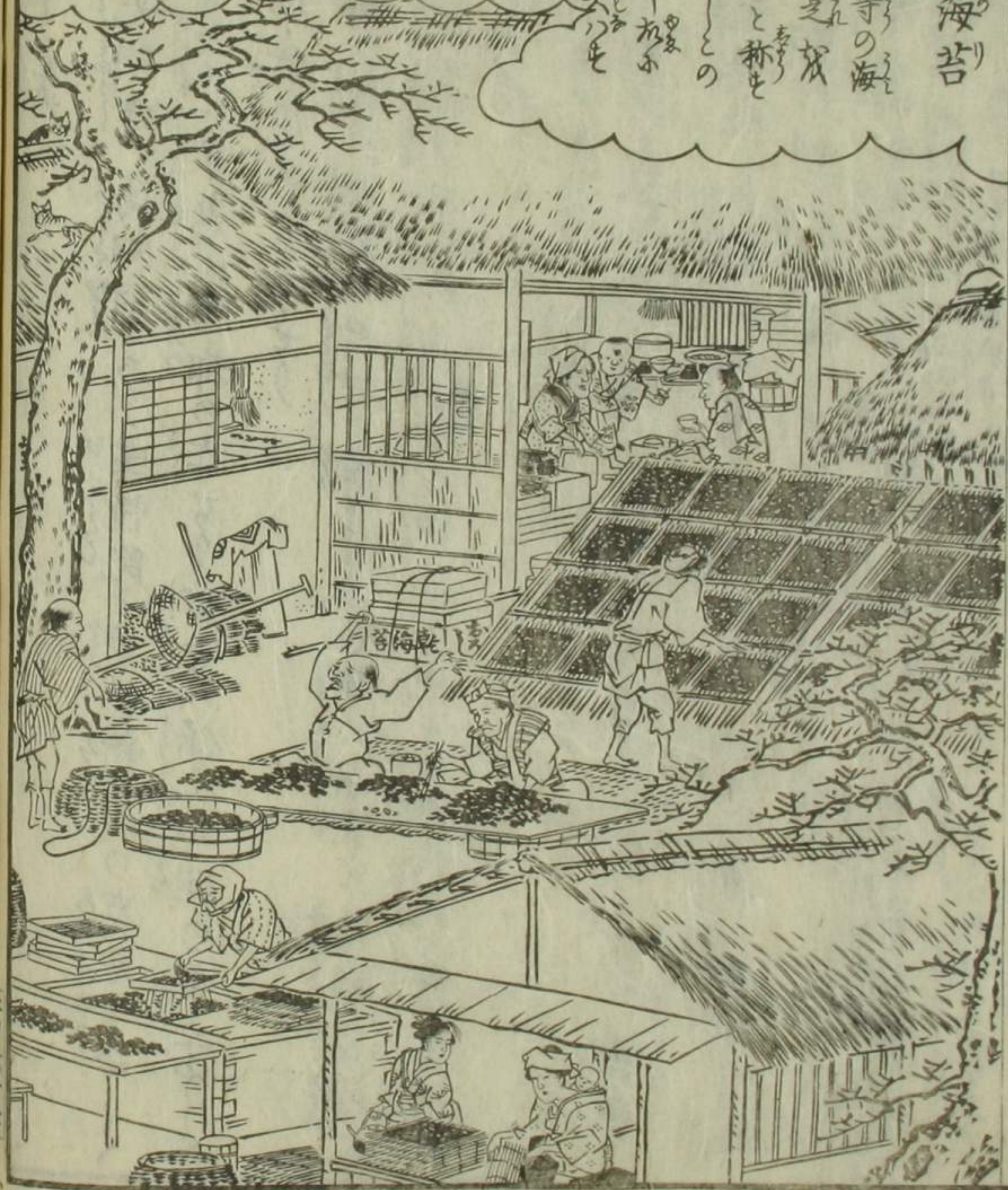
貴船明神社 大森村海道より右あり此地の産土神なりて別
當は真言宗大森寺と号し由来由詳なり

蒲田梅 蒲田邑ありしは蒲田和名類聚抄に武蔵國在る郡の中は如へ
助五郎六郷堤方及び稲毛在る月郷今井屋敷を分ちて領するの地を領するなり
も此地の人と号し又同書に圓城寺所領の中六郷内無田とあるも此所のゆかりなり

一年の間
 田置と
 合味
 変り
 高貴の
 家
 賞
 送
 諸国共
 業
 者
 江戸の
 産

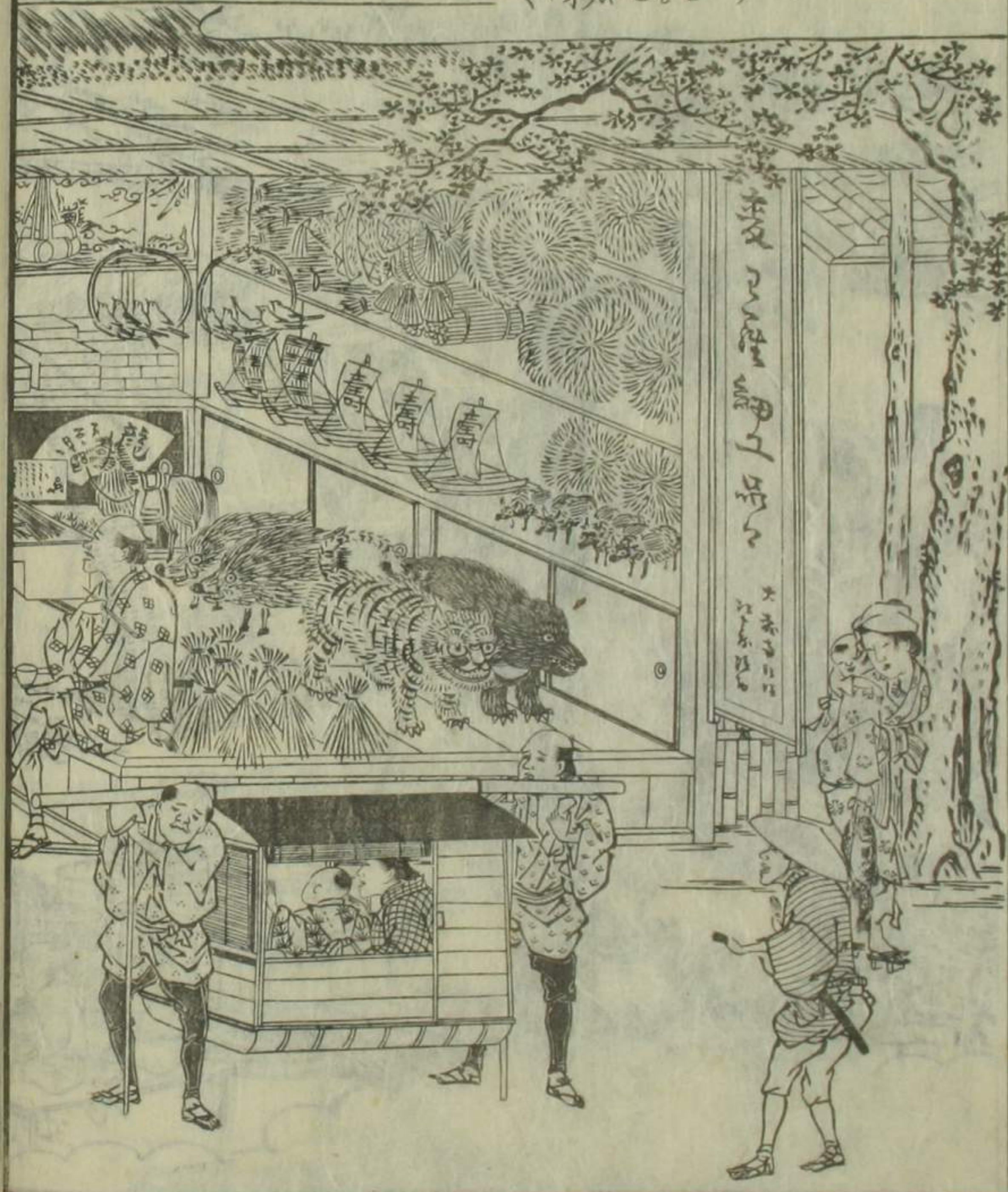


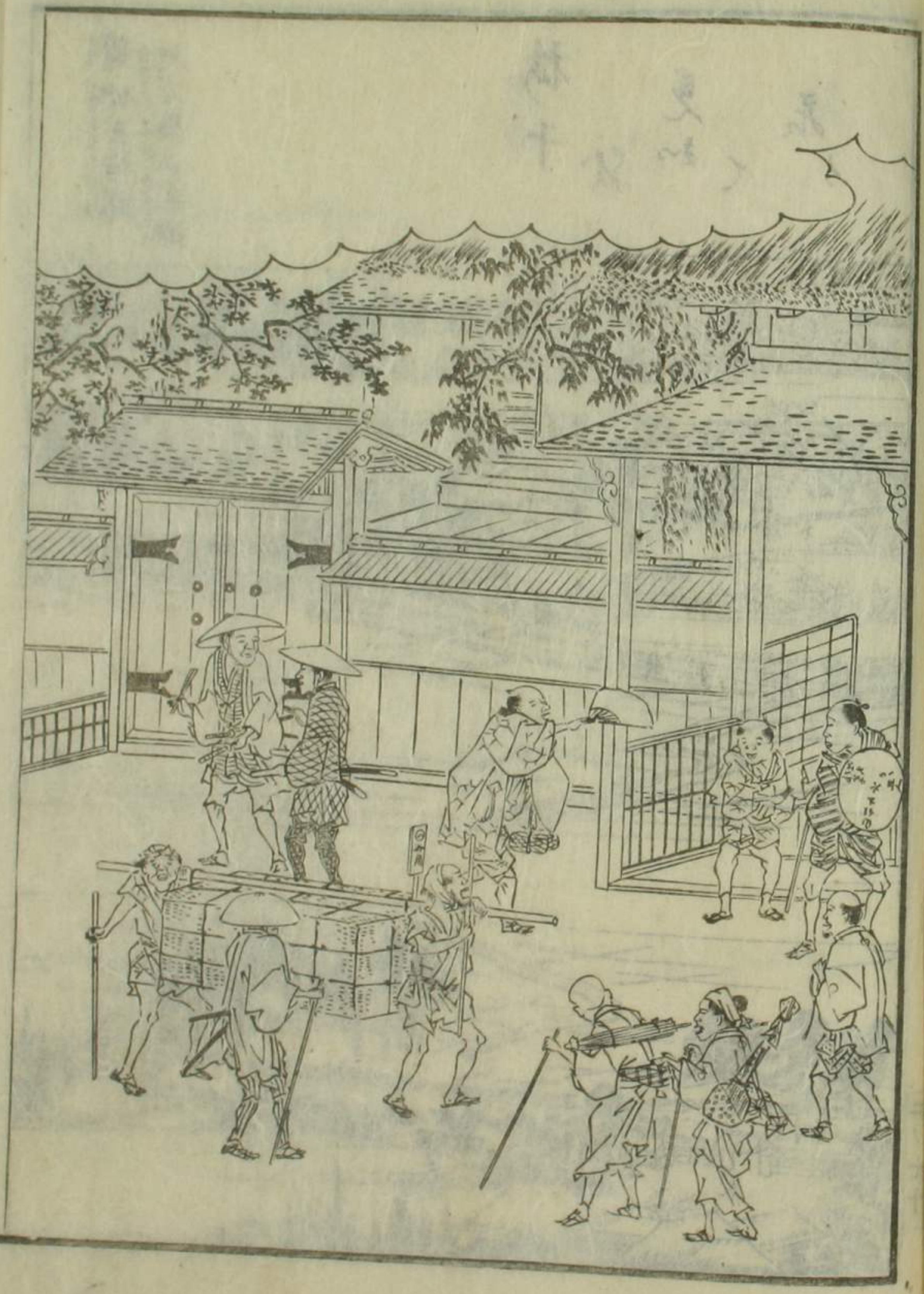
浅草海苔
 大森品川等の海
 産せり野成
 浅草海苔と称す
 其旧称を失つ
 呼来
 秋の時不
 産
 建春の時
 正止
 定規
 寒中小採
 絶品



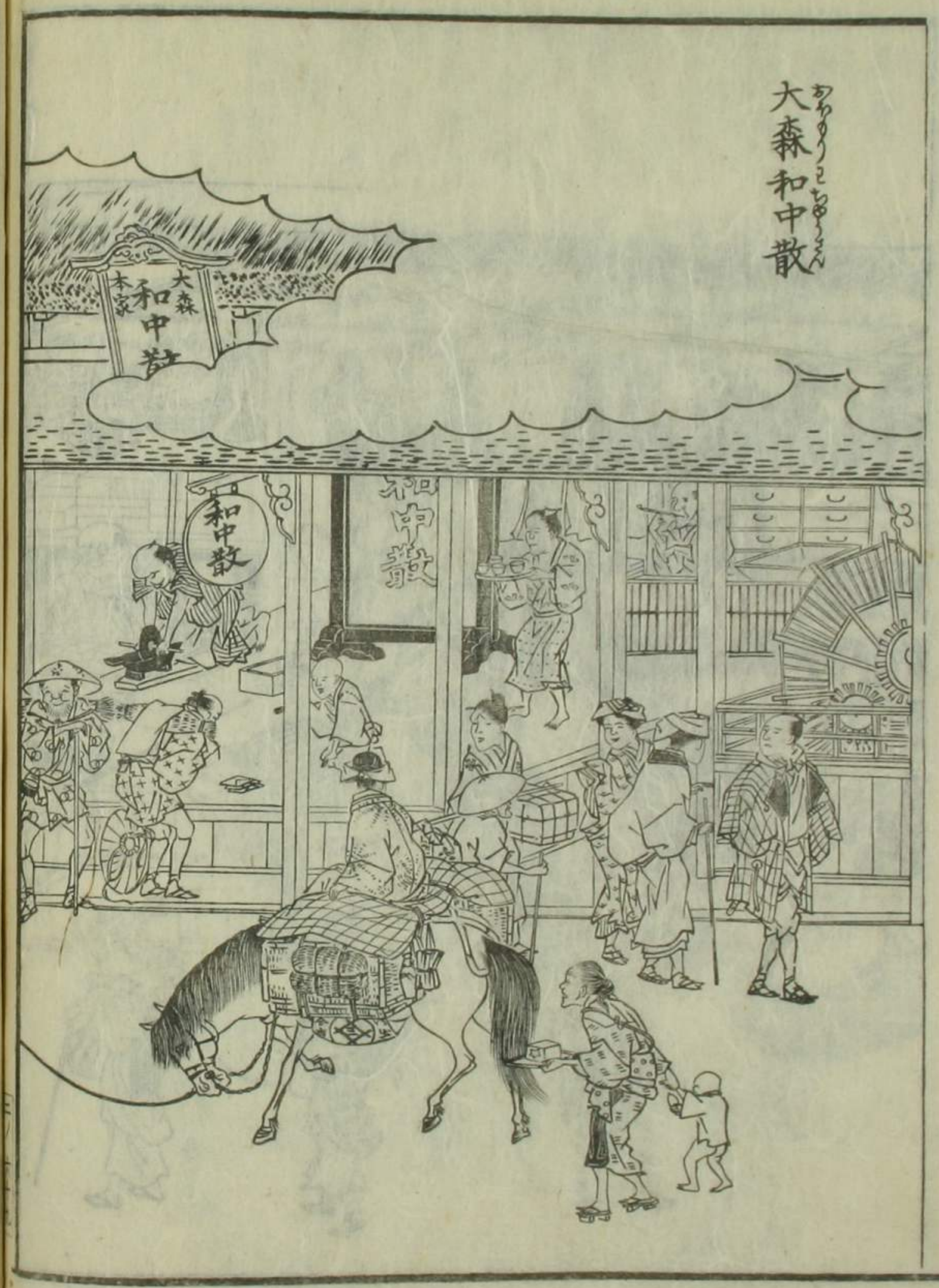


大森村の
 名産
 として
 鬻ぐ家
 多し五
 彩
 多し種
 の器物
 製す他
 邦の人
 り得く
 家土産
 せり

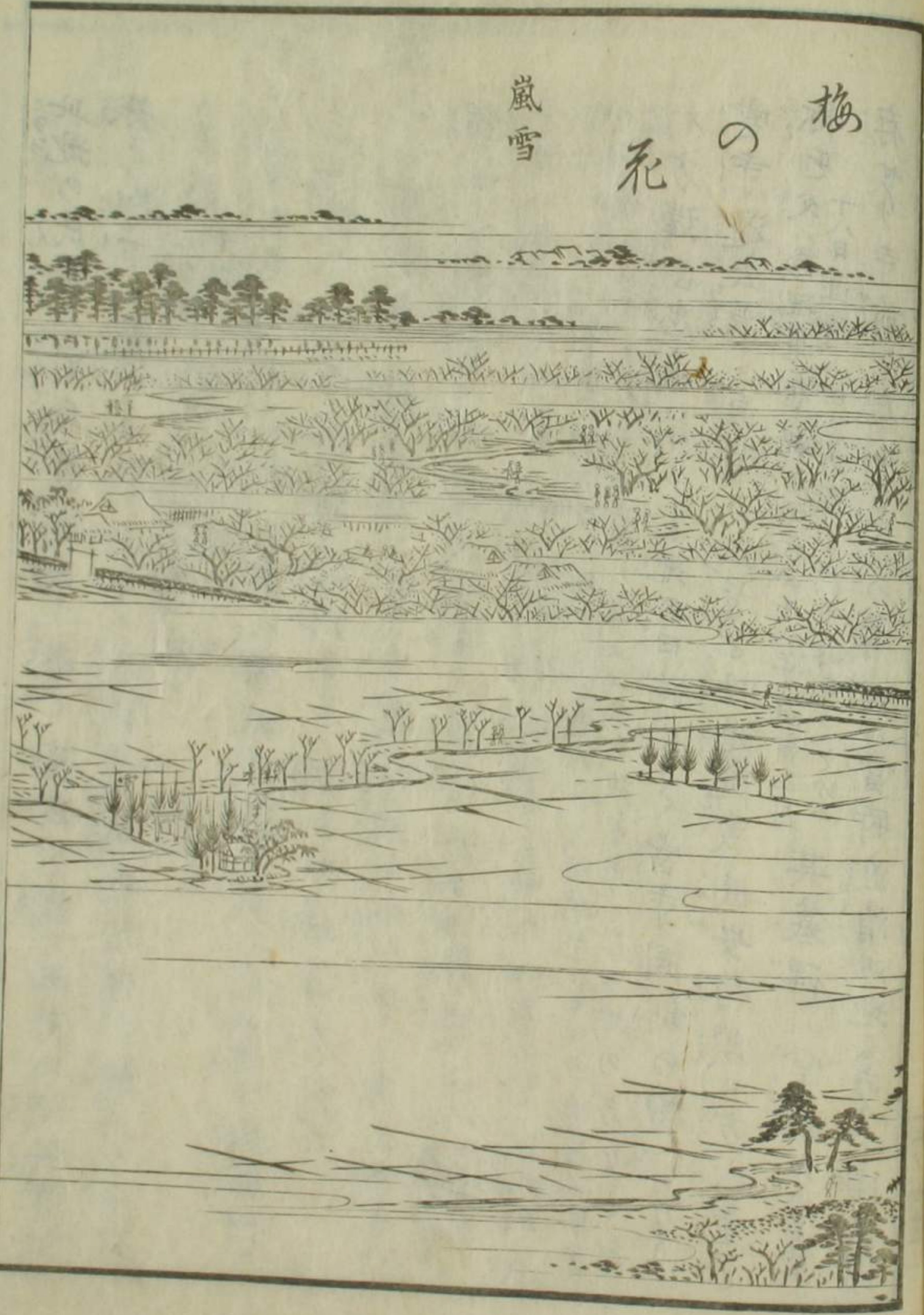




大森和中散

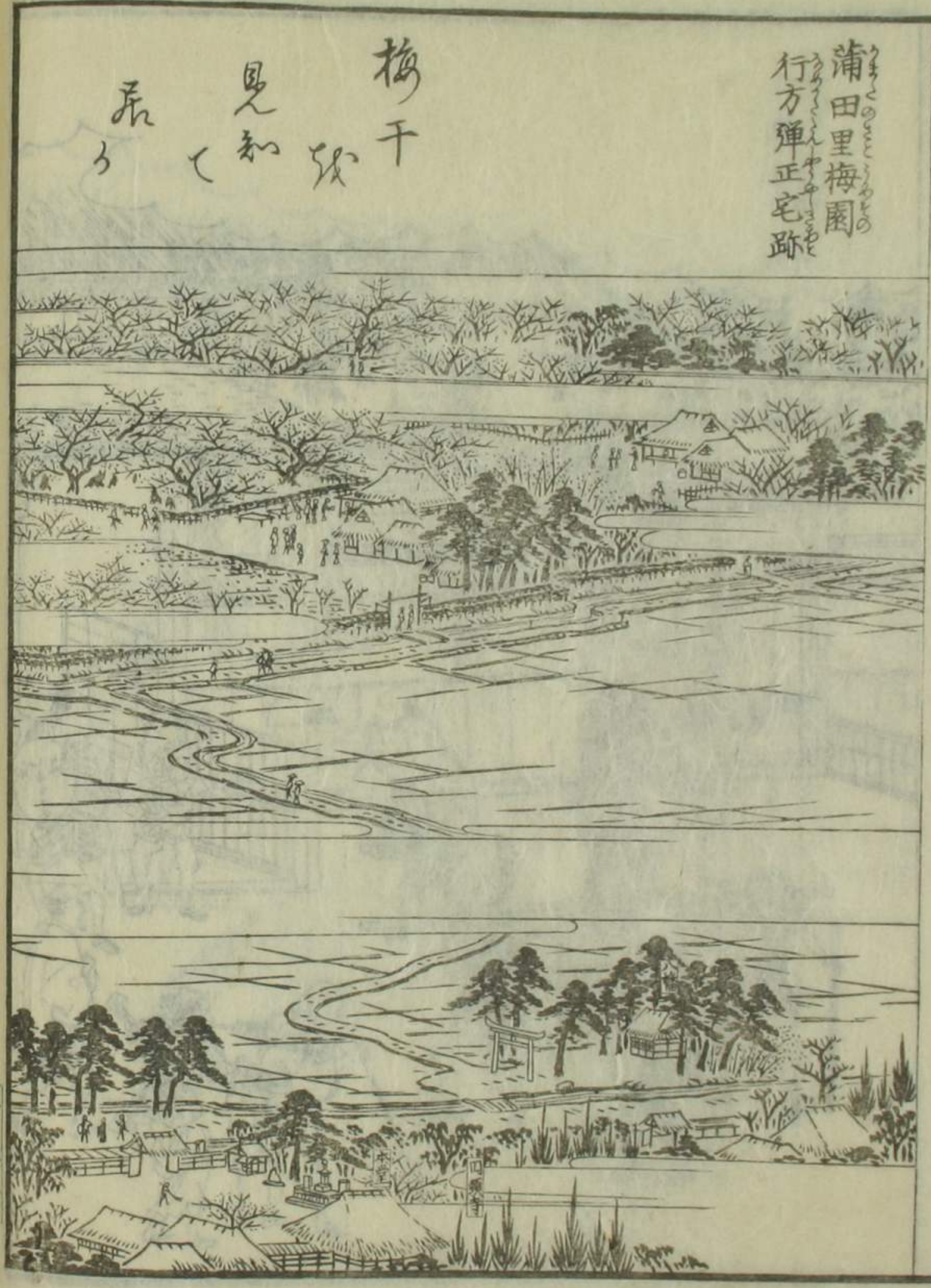


梅の花の嵐雪



梅干見知長

蒲田里梅園
行方彈正宅跡



此地の民家ハ前庭後園共ニ悉ク梅樹を栽て五月の頃其實を採り都下ニ鬻ぐされハ二月の花盛ニ幽香を採り遊人必ク

行方彈正忠明連宅地 六郷八幡塚の辺を云々人此地ニ御園村と

性光山圓頓寺 蒲田村ニあり日蓮宗池上本門寺ニ屬す本寺ハ

釋迦多寶等の木像を安置ハ潤山ハ九老僧日證上人 潤基

中興ハ日藝上人なり 寛永二十年癸未二月朔日當寺ハ小田原北条家の臣六郷の

領主 小田原北条家の分限帳ニ行方与次郎六郷大師河原葛西寺嶋等の地を

行方彈正忠直清々宅地の跡ニ當寺開創の檀那なり

當寺過去帳ニ直清の法号を性光院殿圓安行頓日方大居士と

稱す 父ハ修理亮康親と云天正十八年庚寅三月 其墓碑ハ堂前左の方小

存せり寺前ニ存する所の溝堀ハ當時直清此地ニありし頃の構の

外堀を其儘ニ用ゆると云小田原記ニ永祿九年武田信玄小田原の

人數少き隙を窺ひ思ひよる方より小田原へ押寄るとある奈

下ニ六郷ニ行方彈正居たり間己うきこの近所なる八幡を要

害ニ構へ稲毛の田島 横田 駒林 宇多河石見寺

を引卒一橋を焼落し甲州勢を通す信玄ハ品川の宇多河石見寺

鈴木等を追散し六郷の橋落れハ池上へ移り池上寺を追捕し

寺ハ本門寺 此寺の僧を案内者として矢口の渡を舟で渡り稲毛の

平間といふ所へ渡り稲毛の十六郷を追捕せしむ

蒲田八幡宮 同所道の傍ニあり前ニ記せし小田原記の文ニ行方

彈正其宅の辺なる八幡を要害ニ構ふとあるハ當社のよりある

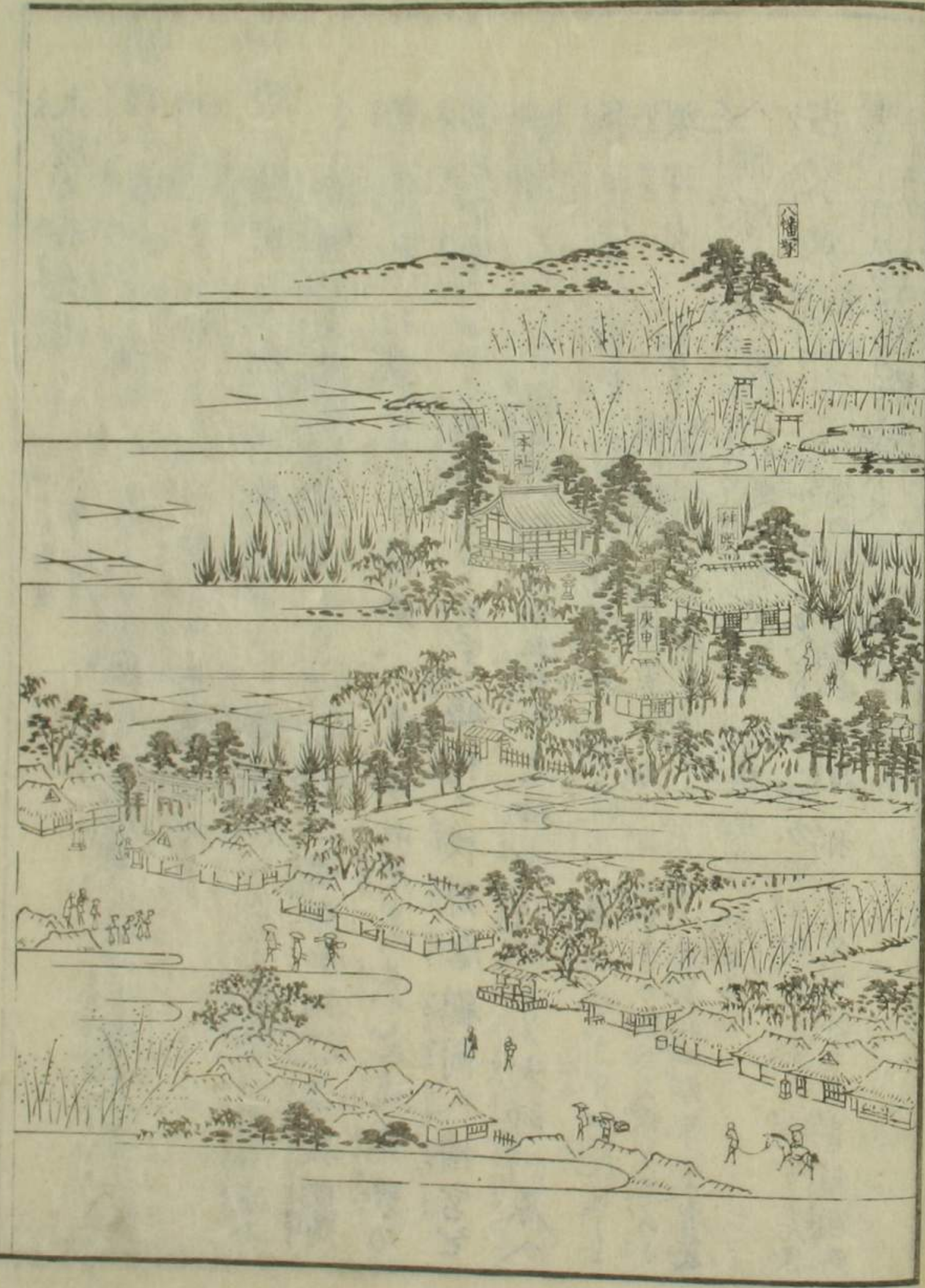
行方山妙安寺 海道の内新宿ニあり日蓮宗ゆり本門寺ニ屬す

本尊ハ三寶ゆり座山ハ日現聖人なり行方氏室圓光院妙安日行

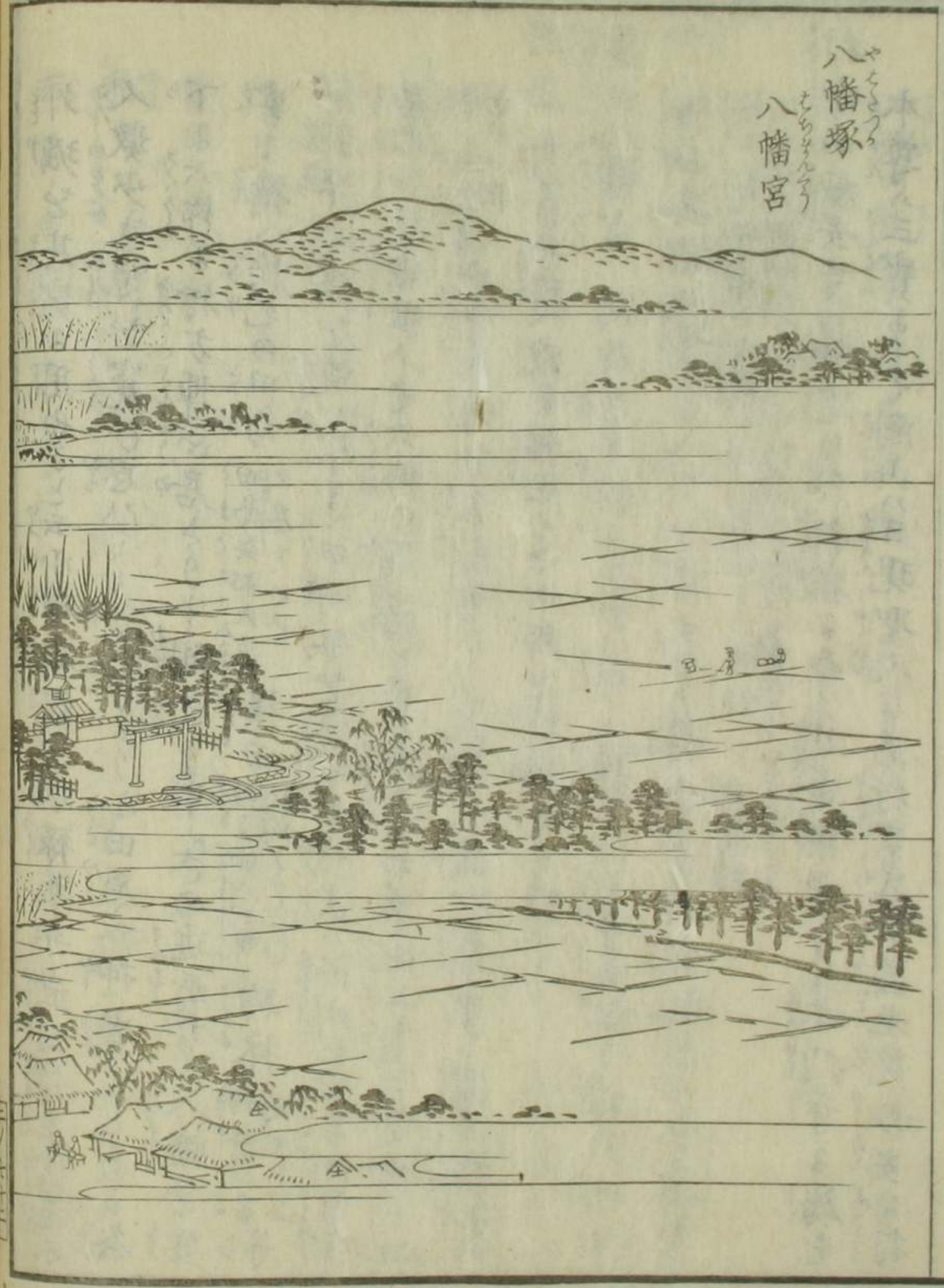
按三代實録貞觀六年八月十四日戊辰詔して武藏國

從五位下蒲田神を以て官社と列せしむる也

當社のよりある



八幡塚
八幡宮



大塚の菩提所と云天正十七年丑十月晦日あり

朗羽山長照寺 獵師町あり日蓮宗なり當寺は豊太閤秀吉公此

守佛なりと稱し北辰奴見大菩薩を安ん

六郷八幡宮 六郷の惣鎮守中八幡塚村あり別當八真言宗ハ

一々河幡山宝珠院建長寺と号し相傳ハ鎌倉右府將軍頼朝卿

安房國より大軍を卒し鎌倉へ入る項此所之旗を建軍勢の

著到を記しあひ旧跡ありと云し勝利の後鎌倉鶴岡八幡宮を

勸請しあつとを祭禮ハ六月十五日中て神輿羽田より大師河原へ

移りたまふ當社は頼朝卿建立の時梶原奉行せりと記せし

梁牌ありと云し按は梶原ハ景時なり馬込村万福寺の条下ハ奉り所の小

八幡塚本社あり右の方の蒼林の中あり 旗立杉社地ハ

古家敷大川のほとり畑をありと云し 按は行方彈正明連家の孫なり

旗竹は用ひられしものか繁茂せしと云し

六郷渡 八幡塚の南あり此川ハ多摩川の下流中て八幡塚あり

河崎の驛への渡りあり昔ハ橋を架せし享保年間田中立隅と

いへる人の工夫あり洪水の災を除んるハ橋を止め舟渡せしと云り

田中立隅ハ俗稱休愚右衛門嘉古と稱し冠帯老人と号し水理ハ達を相州酒匂川の

水と治りし此人の工夫なり今ハ其河原ハ其事を記せし碑あり又民間傳要といへる

書を著し今上平間村の田中山妙光寺と 東海道名所記ハ此橋の長さ百二

十間とあり 東路の四大橋といふ江州瀬田參州河内吉田及ハ此六郷の橋あり

癸未記行 六郷橋 忠者武州甲族 而屢往來鎌倉則不可無其理故首

注云俗説 畠山重忠嘗居于此雖不考于日記然重

忠及武州甲族 而屢往來鎌倉則不可無其理故首

河崎東此云 六郷里俗稱重忠居此村重忠武州七黨

長攻野戰報君恩龍附者日頻繁國列侯

蹤宛去江城五里許出者來朝化者萬歲高

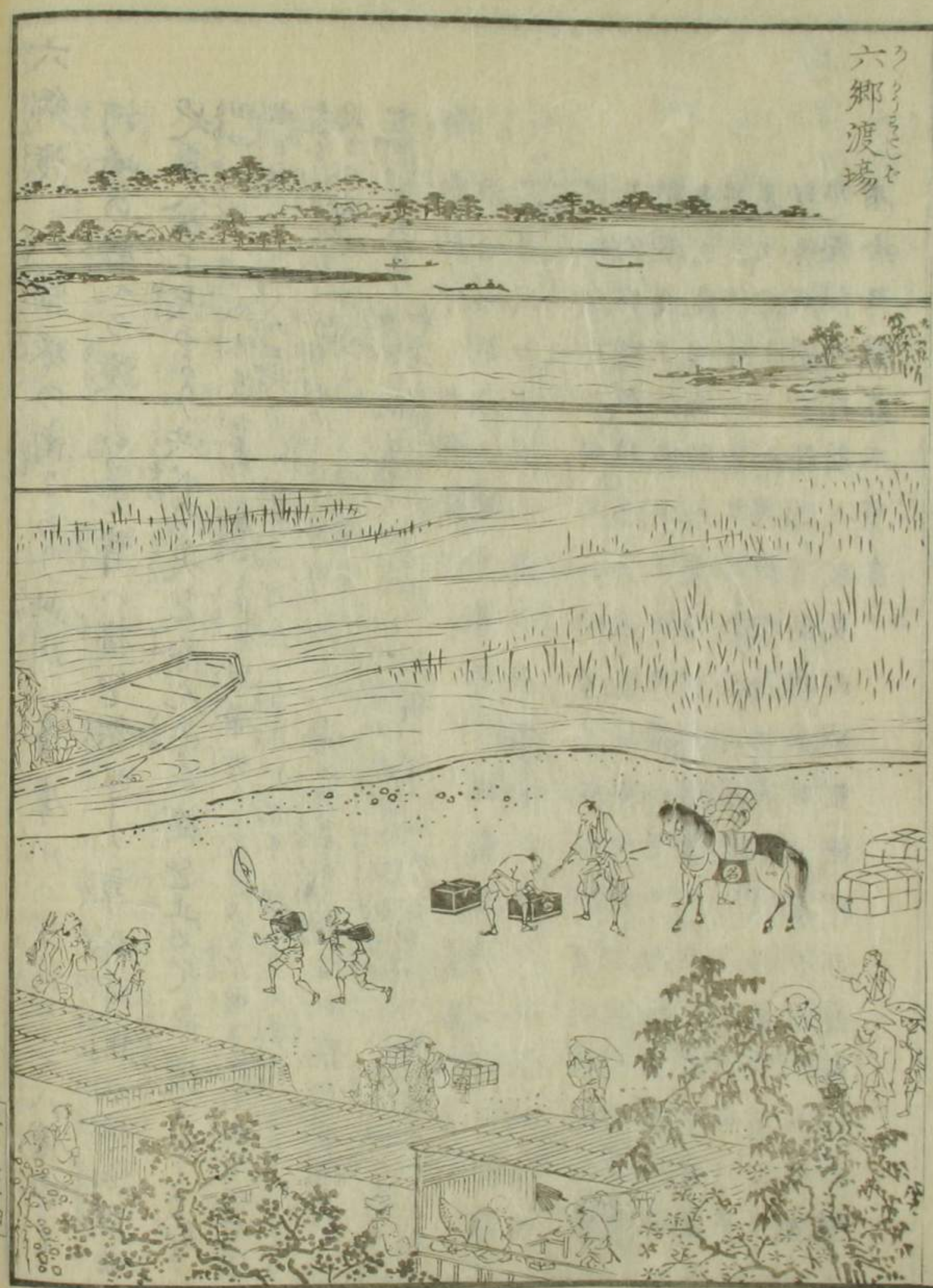
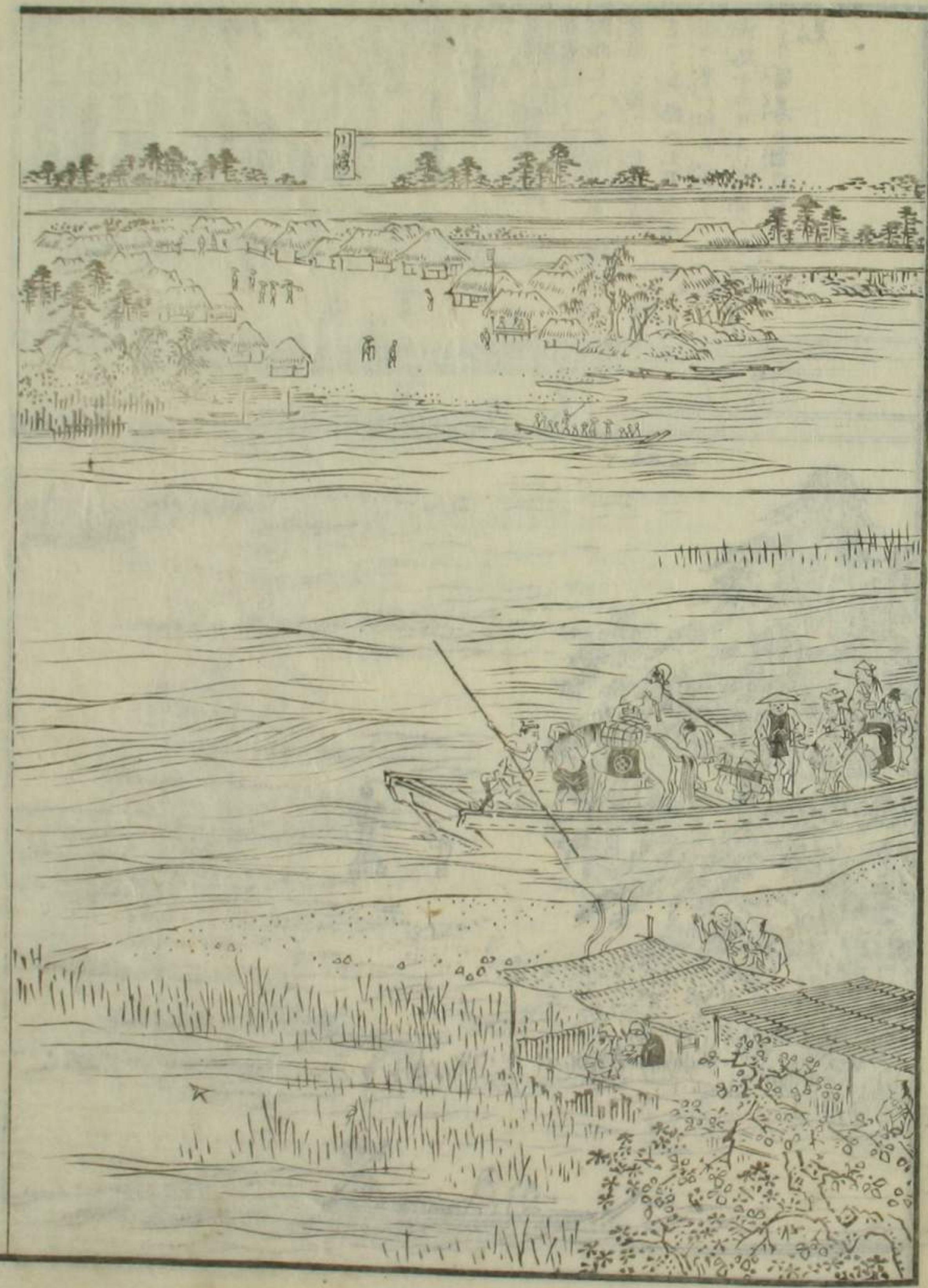
會同輿馬劍矛僕從喧異域是名走與利奔可笑

呼可尊士農工商幾過胡孫玄霜搗盡朝裴氏丁

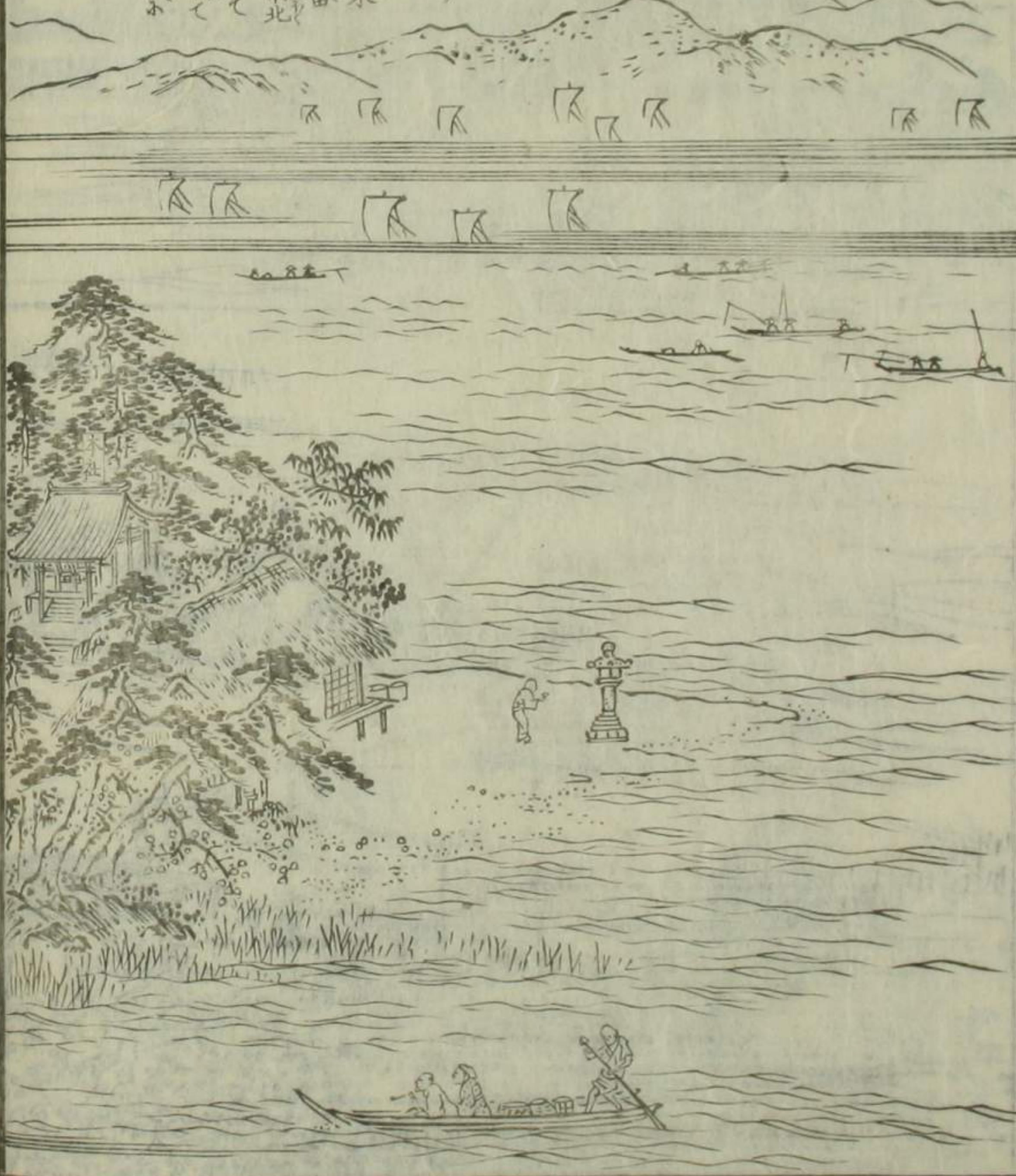
尾生女何用禪徒弄胡孫玄霜搗盡朝裴氏丁

早梅成約許何用禪徒弄胡孫玄霜搗盡朝裴氏丁

府今開時自不歡作不可言及江城望衡門三月遠征幸歸



此地の眺望最秀美
 夕日東海漫
 玉川混濁清
 流の富峰の雪不
 取川を隔て 東海
 の驛路あり桂
 來俗傳あり北
 筑波山城と
 龍雨行雲の氣象
 万十なり
 此嶋より相州三浦
 浦賀へ八里當りて
 海路九八里南徳木
 更津の渡へ八里當
 海路八九里南北
 総の界八里當りて
 海路十三里を隔て
 富峯八里の方
 見



羽田
 辨財天社



要鳴辨財天社羽田村の南の洲崎はあり故に羽田辨財天とも称せり
此羽田の浦を流るる河川は、別當八真言宗の金生山龍王蜜院と号し、辨財天の像は相州江島本宮巖窟辨財天と同躰なり。弘法大師の作なりとの説あり。此靈像昔江戸有馬侯藤原純政の家へ傳へ、尊信ありし。當社海誓法印の時靈夢よ感ずる所ありと以て宝永八年辛卯四月此本を此地に遷し、遷りてなり。
此洲崎の地は、別當八真言宗の金生山龍王蜜院と号し、辨財天の像は相州江島本宮巖窟辨財天と同躰なり。弘法大師の作なりとの説あり。此靈像昔江戸有馬侯藤原純政の家へ傳へ、尊信ありし。當社海誓法印の時靈夢よ感ずる所ありと以て宝永八年辛卯四月此本を此地に遷し、遷りてなり。

又當社は如意寶珠一顆を安置せり
天竺の如意寶珠、金銀銅鐵の類あり。此寶珠は、武州日原山弘法大師開創の地なり。山中は大日靈水と稱せらるるあり。水中一顆の宝珠を存せ、然るに往古此宝珠玉川の流にあらずして、羽田の辺に止る水中昼夜靈光を現は、依土人ひきいて祠を下し、是を得て後社を建て、崇敬を當社は是なりと云云。累縁起は、康治二年の春、當社の南の大河に祠あり、一顆の宝珠を拾ふ。故に玉川と名づけ、玉川舟や天女と稱し、また此地往古より社殿を経営せりと、是も屢風波の災は、かゝるも、永く保りあり。ハ、別當海誓阿闍梨法華經全部の文字を一字一石に書寫し、此海底に沈め、島を築き、宝殿を建立せ、その感應をあると云ふ。夫より己降、青松鬱蒼とて、繁茂し、庭上苔む、竟お風波の難を免るを得たりと云ふ。

江戸名所圖會天璇之卷

